取跡や淋しく見えしすゐき畑　如柳
我身
秋かせや息災過ぎて野人也　北枝
すばしりや秋ふく風のねらひ網　四睡
秋淋し　二句
秋や猶崩れし池のにごり水　紅尒
鶯鳴いて秋の日よわき曇り哉　牧童
秋の日や猶いたづらに馬子の鞭　意情
山中かうろぎばしにて
あきの日や猿一つれの山のはし　楚常
山中　十景、高瀬漁火
いざり火にかじかや波の下むせび　翁
有省
よしあしをいはで守るはかゞし哉　僧光山
物の音は水のむ獺と案山子哉　雲口
しよんぼりと山田のかゞし時雨鳬　和角
秋の野を壁土にとる哀れ哉　徳子

冬瓜や花にも葉にも捨てられし　圓木
かもうりの方にかたかる庵哉　盧水
蓬生に持ちあはせけり菊くらべ　遲櫻
小家つゞき垣根々々の黄菊哉　牧童
しら菊の一重は寒し秋の暮　宮腰橡青
鮭とんでさゞ波殘る川邊哉　圓木
山川にいぼりかゝりし紅葉哉　如柳
心あつて檜にもみぢをしかせけり　秋之坊
行く馬の笑ふにもちる柳かな　李東
つふ足の跡のみ多し刈田原　何之
二葉なる麥田にやせしいなご哉　雨柏
目に高し稲刈る末の御調藏　宮腰橡青
檉の葉の持ちこたへぬも哀れなり　何處
秋の雨鶏の尾のしたりけり　小松孤衾
人は住居はかりすごすや秋の暮　楚常
あき暮れて淋しき炭の匂ひ哉　尾張昌碧
行く秋のさて〳〵人をなかせたり　越人

卯辰集卷第四

冬

寒さ來て野守の花の簀子縁　楚常
藁曲げて壁におし込む寒さ哉　草雛
路通の行脚を送りて
見やるさへ旅人寒し石部山　大津尼智月
さむき夜の雨だりすごき寢覺哉　鵜來女甚子
から風や水はちゞみて網代杭　鵜來何之
淋しき庵のすさみ　二句
山あらし來よさむがりて明すべし　秋之坊
爐の隅に身や酎の神といはゝれん　同
木がらしや晩鐘ひとつ馬十疋　楚常
風によりかゝり行く馬上かな　春幾
木がらしや顔のみ動く鳩の聲　雨邑
釣瓶くる音風と成りにけり　梅露
木枯に咲いて見せたる八手かな　林陰
身まかりたる人の庭のけしきを
鉢の木やぬしなきつゝじ返り咲く　漁川
伊賀へ歸る山中にて
初しぐれ猿も小簑をほしげ也　翁
奥山は猿一聲にしぐれけり　幽子
亂山に日影あるあり夕時雨　紅尒
しぐれけり頓てその儘春でなし　牧童
古地藏しぐれ催ほす巷かな　小松斧卜
ふり初めて日半々の時雨かな　句空
しぐれきゝ時雨聞き夜のしぐれ哉　梅露
德利さげて賤の子うたふ時雨哉　四睡
垣あれて菊のうら見るしぐれ哉　洞梨
とかくに悲しき時
ひえながら打寢て時雨きくばかり　北枝
十月にふるはしぐれと名をかへて　同
葉茶つぼやありともしらでゆく嵐　宗因

嚢中略有七千首　不員百年風月身

我れもとて袋に入れし落葉かな　牧童
哀れにもつるみて落つる木の葉哉　四睡

宗祇十三回忌

地ごくへは落ちぬ木の葉の夕べ哉　宗鑑
這出でゝ落葉にねまる蛙かな　鶴來跡　杢

海のかたはしぐるゝに、庵の庭は木の葉をしくも、をりしりがほなりや。

はく路も木の葉はもとの庵哉　句空

庵の暮と云ふ事を

此の夕べたぞや落葉にすべる音　句空
ねがはばや戀をばせじと日蓮忌　鶴來何之
藪過ぎて霜のみ寒し葱苓　柳晏
燐火や今朝は霜おくかれ蓬　牧童
あさ戸明けて霜消ゆる迄何もせず　其糟
皆落ちて梢に丸し月の影　孤白

十月の望

から崎の鮒煮る霜の月見哉　北枝
鴛の女の世をあまりなる姿哉　蕉下
篝火絶えて鴨落つる夜の寒さ哉　楚常
舟よせて立てば足見ん都鳥　雨邑
山茶花や蝶のおらぬも静かなり　李東
山茶花やさすがふりさす庭の雪　幾葉
水仙はほの咲く筈のみぞれかな　楚常
種馬の駒待ちあはすあられかな　同
さむしろや雹ふりおく旅芝居　朱花
曙やひがしも桶もうす氷　萬子
有明の其のまゝ氷る盥かな　字路
行く道の音おもしろき氷哉　孤白
寒念佛歸る庵も氷るらん　鶴來康樂
辛風の蓑ぬきて見るつらゝ哉　雨鹿
狐ゆく跡は霜ふる氷かな　牧童
初雪や人のありくと日のさすと　楚常
はつ雪や松にはなくて菊のはに　北枝

初雪のかくしえぬ石のはづれ哉　三岡

老人をまもり居るて

しら雪の花とも見えぬつぶり哉　李東
元日の心や雪の朝茶の湯　孤舟
舟さして柳の雪を打ちかぶり　其糟

野田の山もとに住む人を、たづねまかりしにあはず、かたへの垣にかつらのかゝりたるを

なんの實ぞたま〳〵見だす雪の門　北枝
折るとてもあまり至極の雪吹哉　秋之坊

寒山讃

寢る恩に門の雪はく乞食哉　其角
喰らうてや死ぬかと思ふふぐと汁　小松斧卜
ちればこそいとゞ櫻はめでたけれ鰒　牧童
おもしろもなうて身にしむ神樂哉　北枝
戀しさもなくて寢られぬ師走哉　乙州
兒めきて泣きつゝ寢るや年の暮　楚常

年の暮わやめくを只餘波哉　盧水

草菴をしつらひけるとしの暮に

物うりの聲聞きたゆる師走哉　荷兮
一とせや餅つく臼のわすれ水　萬子
大年や難波堀江の鴨の聲　春幾
いざ汲まん年の酒屋のうはたまり　其角
輕薄を申しつくせる歳暮哉　牧童

元祿二の秋、翁をおくりて山中溫泉に遊ぶ　三兩吟

馬かりて燕追行くわかれかな　北枝
花野みだるゝ山の曲(まがり)め　曾良
月よしと相撲に袴踏みぬきて　翁
鞠ばしりしをやがてとめけり　北枝
青淵に獺の飛込む水の音　曾良
柴かりこかす峯の笹道　翁

霰降る左の山は菅の寺　北枝
遊女四五人田舎わたらひ　曾良
落書に戀しき君が名も有りて　翁
髪はそらねど魚くはぬなり　北枝
蓮の糸とるも中々罪ふかき　曾良
先祖の貧をつたへたる門　翁
有明の祭の上座かたくなに　北枝
露まづ拂ふ獵の弓竹　曾良
秋風は物いはぬ子の涙にて　翁
白きたもとの續く葬禮　北枝
花の香は古き都の町作り　曾良
春を殘せる其仍の箱　翁
長閑さやしらゝ難波の貝づくし　北枝
銀の小鍋に出す芹燒　曾良
手枕にしとねのほこり打拂ひ　翁
うつくしかれとのぞく覆面　北枝
つき小袖薫賣の古風なり　翁

非藏人なるひとの菊畑　翁
鴨ふたつ臺にすゑても淋しさよ　北枝
あはれに作る三ヶ月の脇　同
初發心草の枕に修行して　翁
小畑も近く伊勢の神風　同
疱瘡は桑名日長もはやり過ぎ　北枝
雨晴れくもり枇杷つはるなり　同
細長き仙女の姿たをやかに　翁
あかねをしぼる水のしら浪　同
仲綱が宇治の網代と打泳め　北枝
寺に使を立てる口上　同
鐘ついて遊ばん花のちりかゝる　翁
酔狂人と彌生暮行く　筆

柿喰三吟

八朔や脾の臓つよき柿喰ひ　乙州
だゞくさにつむ箒木のから　北枝
つゝり蟲靜かに見れば動き出で　牧童
旅の月夜は物たらずなり　州
頃の點取ともゝ卷からげ　枝
虚言つく人の顔をじろ〳〵　童
樗陰馬の燒鐵ふすぶらせ　州
盆の李を置こぼしけり　枝
入御簾に跡戻りして覗くらん　童
しぼりつきたる涙さへうき　州
ちつくりとあたま結ひける袴着に　枝
雪はつもれど去なぬ物買　童
臍の垢ほり盡したる世の中や　州
のぼり〳〵て淀の晝船　枝
水雲は畠のうねを作るかと　童
式部が夢は泣いつ笑ふつ　州
月花は男なぶりと詠むべき　枝
酒とりにやる春の蛤蜊　童
雁歸る鉢ふせ峠あれやらん　州
宿の二階の裏はみな山　枝
いつの日か障子に張りし人歩帳　童
額もぬかず角入れてより　州
唐の芋料りまどひし夕間暮　枝
かさある月の雲にかまはず　童
肌寒くなえたる衣のうすよごれ　州
つらし〳〵とならす鰐口　枝
夏來ては葉さまにくさる赤椿　童
小歌許りのあがる所化寮　州
さがせどもとれぬ釣瓶に草臥れて　枝
行燈とぼす頃のむら雨　童
怨靈の段讀返すむかし本　州
涙もろける里の肝煎　枝
いさかひてのがれ行くらん後つき　童
炙する日ともいへば風ひき　州
花の香の太秦迄も押移り　童

うかとはなかぬ小鳥鶯

琵琶五吟

風やいずこをならす琵琶の海　牧童
西もひがしも蕪引く空　乙州
道草の旅の牝馬追ひかけて　小春
足の灸のいはひかへりし　魚素
さかやきの湯の湧きかぬる夕月夜　北枝
髭籠の柿を見せてとりおく　童
陣小屋の秋の餘波をいさめかね　州
あだなる戀にやとふ物書　春
埒明かぬ神に歩みを運びかけ　素
池のすぼんの甲のはげたり　枝
橋普請木の切れさがす役に付き　春
晝寢せぬ日のくせのむか腹　州
むら薄おほふ隣りの味噌くさき　春

無欲にまつる聖靈の棚　素
布袋にも能う似し人の踊り出し　枝
伏見の月のむかしめきたり　童
花はちる物を見つめて涙ぐみ　州
人は思ひに角おとす鹿　春
春の日に開帳したる刀自佛　素
交る〳〵にたかる飴うち　枝
馬盥額に成るまでやり置きて　童
越の毛坊が情のこはさよ　州
月の前痛む腹をば押しさすり　春
扨々野邊の露のいろ〳〵　素
簀戸の番鳥帽子着ながらうそ寒く　枝
ゆるさぬものか妹が疱瘡　童
うつくしき袂を蠅のせゝるらん　州
食打ちこぼす郭公かな　春
醉狂は坂本領の頭分　素
松にきあはす辛崎の茶屋　枝

初しぐれ居士衣かぶる折りもあり　童
吹いて通りし夜の尺八　州
旅枕しらぬ亭主を頼みにて　春
藥を劑る床の片隅　素
うぐひすは杜子美に馴るゝ花の陰　枝
山と水との日々の春　童

霜六吟

人の年の霜の降る夜に寄りにけり　四睡
洗ひすごせる河魨は味なき　北枝
鷹宿の壁も疊もよごされて　紅尒
木賊つりおく音はさら〳〵　漁川
あの月は耳にかけたらかゝるべき　牧童
秋の夕べを頭なぶらせ　李東
幾度も小鯛ねぎりて買ひもせず　筆
屎の馬を行きぬけにけり　睡

山科の談所になれば衣着て　枝
まづなげ出すかねの狀箱　尒
水風呂を跡の先のと長びかせ　川
垂井根深ときけばゆかしき　童
時々は月にきしくる都にて　東
相撲はすけど祖宜のぬるさよ　枝
はえ〳〵と秋の空なる赤とんぼ　睡
はづみもぬけてものおもふ頃　川
花見よと局かしらにいざなはれ　尒
こたつふさげば廣う成りぬる　東
照降りもしどろもどろに春めきて　童
鼻につきたる旅の燒魚　睡
山道の草鞋ふなりに作りかけ　枝
浪は敦賀の磯にうつなり　尒
藪醫者のとろゝはげたる箱ながら　川
また仲人をしそこなひたり　童
戀種のとはぬ事迄云ひ過し　東

月夜鳥も寢ぼれ行くらん　枝
身にしめる風より蚤はとらへられ　睡
どこやら芋のわるき腹あひ　川
とり立てゝかりに連歌の草の庵　童
鶴見に出づる人はさわがし　東
風かはる夜は星影のきらめきて　尒
ふきぶりがちに木綿ねり揚げ　睡
起きるにも寢るにもとらぬ角頭巾　枝
いらぬもの迄かさぬなりけり　童
溝ぎはの花に後地を盛出して　川
春の小鮒の口ならぶ見ゆ　尒

元祿四年卯月日

賀陽庶人　北枝

勻塞

五老井記　許六選

許六

靈泉あり、水のたゝふる事纔に尺あまりにして、三尺の盆池より流れ出づる事、潺々滔々たり。五老井と名づく、列埜をひらきて五老菴を結ぶ。主人姓は森名は許六、みづから五老井居士と僭す。五老は予が別號也。驛が原不知哉川流れて、鳥籠の山南にちかし、十旬の休暇をうかがひ半日の閑を領する所也。遙かにきく、東江ばせをの翁、錫を坂西に赴しめ給へるの折ふし、靈泉を共に汲みて、風騷の匂ひを葎の中にとゞめむとならし。其の水の清き事は恵山の泉脉を通じ、あまきことは肅州の金泉にひとし。立ちかへる春の朝、白散の藥をさげてより以後、四時の生涯を養ふ事かぞふべからず。一とせの間に　わきて泉を翫ぶ事は夏を主とす。霍山鳴が井盤の納涼、西上人の柳の陰も、今此の水に俤添ひぬ。其の德其の要廣大にして、神佛の尊きをすゝしめ、且つ堯の井を堀り禹の水土を夷らぎてより、四民猶おだやかならしむ。後に山あり。さゝ栗の岡といふ。晴に臨み雪に對して眺望きはまりなし。湖水の島々、江南江北の山のたゝずまひ、日枝伊吹の嵩、比良三上の高根に眸をさく。申酉の方に衙が岡あり、聖德太子の御歌より犬上の名所となりぬ。杖を曳きては籬を廻り岡に登る。薇は韮をたすけ、粟は茗粥を炊ぐ、抑も庵は纔に莚三枚を設けて膝を窄め、賓主六人一座に全からず。茶碗五つ枕五つ、筆墨の外に物なし。月に杜宇を添へ、驛路の鈴に里の砧を合せて秋をかなしむ。庭に箒をあてず、樹に木鉗を入れず、窓前の草自らなり。たま〳〵畑を穿ちては狛の瓜種を求め、五色の茄子を植うるといへども、山蟻の爲めにせゝり落さる。噫々僭居

士、文書に僻する事二十餘年、子瞻、芝瑞を師とし、楊子、呆道人が骨髓を窺うて、雪裡の芭蕉、夏天の梅、自然に一味の風雅を兼ねむとす。世上予が筆痕を樂みて予が心頭のたのしびをしらず。風雅は是非をあらそひ、畫圖は鄕童の前の戲れとなる。いまだ風雅の爲めに文書を樂むものをきかず。予と共に志を同うして、はやく我れをたすけよや〳〵。終日樹下に徘徊すれども、更に答ふる物なし。四隣の鳥の聲、花間の蜂蝶のみ、笑うて靑天に腹つゞみを鼓し。五老の流に脚を洗うて還る。于時元祿五年壬申春貳月。於三盤欒樹林下一濺レ毫

水すぢを尋ねて見れば柳かな

元祿壬申冬
十月三日許六亭興行

けふばかり人も年よれ初時雨　許六
野は仕付けたる麥のあら土　酒堂
油實を賣む小粒の吟味して　岱水
汁の煮えたつ秋の風ばな　嵐蘭
宿の月奥へ入るほど古疊　筆
先づ工夫する蚊屋の釣りやう　水
才ばりの傍輩中に憎まれて　翁
燒焦したる小妻もみ消す　六
粽つむ笹の葉色に明けわたり　堂
輾磑をのぼるならの入口　紫
半分は鎧はぬ人もうち交り　水
船追ひのけて蛸の喰飽き　翁
宵闇はあらぶる神の宮遷し　六
北より荻の風そよぎたつ　堂
八月は旅面白き小服綿　黃
燒山ごえの雲の赤はげ　水
打起す畠も花の木陰にて　翁
つらも長閑に鶴の卵わる　六
春ふかく隱者の富貴なつかしや　堂
當摩の丞を酒に醉はする　蘭
さつばりと鰐一本に年暮れて　水
夜着たゝみ置く長持の上　翁
灯の影めづらしき甲待ち　六
山ほとゝぎす山を出る聲　堂
兒達は鮎のしら燒ゆるされて　蘭
尻目にかよふ翠簾の女房　水
いかやうな戀もしつべきうす霧　翁
琵琶をかゝへて出づる駕物　六
有明は昆舍門堂の小方丈　堂
舌のまはらぬ狐やゝ寒　蘭
一すぢも靑き葉のなき薄原　水
篠ふみ下る筥根路の坂　翁
宗長のうき寸白も筆の跡　六
茶磨たしなむ百姓の家　堂

花の春まつへて廻る神樂米　堂
七十の賀の若菜莖立　蘭

四　唫

鰐船や比良より北は雪げしき　李由
蘆浦納豆寢せ初むるころ　許六
酒道具つけて家賣る年暮れて　汝郁
京の返事に機嫌なほする　徐寅
月くらき腰湯に裾のぬれ廻り　六
一城わたる四十雀雁　由
盆過に濱手の早稻を米にして　寅
女房の供に夫のいかるゝ　邦
門口に化粧立てたる宿の者　由
向ふに付くる日野の壺皿　六
紫蘇の葉のちり〳〵となる夏の暮　村
さんない尻のあまる小盥　寅

引飯の算用たてる男部屋　六
肩で風きる後の沼がはり　由
大坂は木綿のやすき秋の來て　寅
月夜に語る奥の世の中　村
一あらし老樹の花の崩れたち　六
池は田蕎麥に蛙鳴くなり　由
永き日の十三鐘に暮れかゝり　村
惣々醉うて禮をいはるゝ　寅
肥足にこびとの革袋のはな緒すれ　由
廻したふれのつゞく前橋　六
傾城の心中咄し一ばいに　寅
上のお駕籠の揃ふ朝明　村
掃きちぎる小庭に柘を作りたて　六
うつぶけて置く溜塗の丸　由
物喰の先づ口もとにほれ初めて　村
やいとの隙をもらふかこつけ　寅
そよ〳〵と麻に風たつ夕月夜　由

腮に挾んでむすぶ犢鼻褌　六
豐島御産一枚持つて草枕　寅
河に聞きあく信濃海道　村
鵤につちくれ鳩の啼きつれて　六
糊のまゝ子の鍋をはだける　由
此の春は閨に花の遲なはり　村
苣も赤菜も冴えかへる色　寅

三吟

秋もはや雁おり揃ふ寒さ哉　野坡
藁を見てからかゝる屋普請　許六
暮の月宿へはひれば草臥れて　利牛
何ともしれずうまい臭する　坡
大勢の中で精出す疊さし　六
はやい七つの鐘の穿鑿　牛
葬禮に傘は隣へことづけて　坡

女房の酌に一つ呑むなり　六
餅米は手つけの銀をあてゝ置き　牛
かい暮れかゝる番町の坂　坡
用心のやねの碓に雪降りて　六
玉子の殼の多き掃溜　牛
何事も年を越ゆれば長閑なる　坡
日野商人のもどる春風　六
後家鞘をひねくり廻す花心　牛
踏崩さるゝ寺の芝土手　坡
しん〳〵と月夜の水の落つる音　六
惣嫁追出す肌の寒けさ　牛
秋さきはならぬ米やもざはめきて　坡
峯入前の三井の振舞　六
一ふりの雨に凉しき槇の色　坡
女子ばかりがもの思ひ居る　六
煤掃の道具で戀の顯はるゝ　坡
はやう濟みたる町の寄合　六

雪隱は場を通つて奥に在り　坡
ばんばともえて食の焦つく　六
旅人のもらひばかりに伊達をして　坡
法界祭日ぐれから行く　六
霜稗の穗の見え初むる月の代　坡
醉の競ひに鹿を追ふ也　六
根原越し水のたしなきかり枕　同
痺癬をうつる江戸の絹買　坡
懸隔に暑や寒むやの梅雨の中　六
立ちまはつては座敷掃くなり　坡
一年の醬油喰込む花盛り　六
彌生の雉子の鳴きさかる聲　筆

三吟

鵤を見かへる鷄のさむさ哉　木導
宵の豆腐の氷る俎板　朱徜

たはふたる昨日の草鞋隙やりて　許六
壹歩が錢を腰中に卷く　導
暮切つて灯とぼすまでの薄月夜
鷹場の上を鴈わたるなり　六
ひつそりと曹洞宗の夏は濟みて　導
せつかれて又藥研もとする　徜
五器ふいて下女は化粧にかかり　六
泣出すたびにくらがりをむく　導
芬々とよい茶を入れて茶漬喰ひ　徜
座敷へ舁いで上る駕物　六
皺の手に琥珀の珠數のたふとさよ　導
藪も動かぬ嵯峨の有明　徜
砧うつ隣りは馬のいなゝきて　六
漁村の並ぶ濱の澁糟　導
葭葺の五門徒寺に花もちり　徜
彌生も暮れて夜著の洗濯　六
筒藥首にふらつく春の風　導

宮井ゆたかに藤堂の藤　徜
早乙女の子持は畔に腰懸けて　六
前に皺よるかひ割の帶　導
瓜茄子戸板の上の魂祭　徜
まだなでしこに秋の初かせ　六
御前から甲を脱いで月を見る　導
矢口のさとにかゝる玉川　徜
桑粒のほろ〳〵落つる雨の中　六
脚半の紐の廻る草臥れ　導
精進に箸馳走する旅の宿　徜
解毒の禮を孫にいはする　六
珊瑚珠の色うつくしき夏羽織　導
木どりではてぬ夷大黑　徜
正月の夜食は餅に極まりて　六
佐和山多屋の薺聞ゆる　導
花盛りつれ〴〵草を引出し　六
春から雨の降りつゞく年　徜

三　嗑

秋かぜに吹きすかされてけふの月　汝郁
河原柳の一ばいにちる　許六
相撲とりの勸進元を喰ひたてゝ　木導
たよりのたびに上る綿の直　村
かしこさに伯父の跡まで丸めけり　六
能するやうに家の手番　導
いそがしう見せるも戀の一思案　村
膳にほろりと泪つれなき　六
尼になる宵は潛かに洗ひ髪　導
星は氣疎く光る雪空　郁
荒海の久世戸を越ゆる鴨の聲　六
五十過ぎてはならぬ先懸　導
土器をしばしひかふる舞の内　郁
青い疊に月の澄みきる　六
灯籠の果もちかづく地藏盆　導
白川石の色の露けさ　村

花ざかり衣類法度の御觸狀　導
出替時の外のそはつき　郁
より飴に日のさす頃は長閑にて　六
伊勢路の者の錢の取りあき　導
染物に雲の模樣も一はやり　村
作で半分過ぎる城下　六
めつきりと拵へ藥仕出來して　導
むす子が嫁をあつらへてやる　郁
さゞ波や大津にたよる浪人衆　六
又ほめられて見する手鑑　導
夕涼み水增雲に夏の月　村
掃除の跡の十藥の臭　六
傾城の土葬はかなき淺茅原　導
小僧が母にばつと名の立つ　郁
食繼に莖大根を折曲げて　六
師走にしきる支那の糞取り　導
水風呂を据ゑて燒きたる藏の内　村

本町の垢塵の末は花曇り　導
つけ木の輾る東風遙か也　六

二三　吟

誰が宿ぞ穴明き岩に紅牡丹　毛紈
細う涼しき水のくま〳〵　米轡
西行の軍法ばなし小夜更けて　程己
秋もやう〳〵湯豆腐の月　許六
菊の花金をならべて遊びけり　轡
穂むけの風に五反百姓　紈
ひた〳〵と腹疫病にまゐられて　六
武士荷が來れば馬が休まぬ　己
水もなき河原雲雀の夏の雲　丸
よい寺になる黄檗の山　岱
月雪にいつも八百屋の作兵衛　己
五年が中に女房三人　六
奉公の邪魔になるほど戀をして　轡
酒とたばこで世にもすむ哉　紈
花の陰越前衆の旅枕　六
一本鑓に冴えかへるなり　己
山ごしのかねに六尺おき直し　紈
戸板平目の鍋をとりまく　轡
順風にしらゝ吹上げ見渡して　己
物つかうたる公事の勝口　六
とやかくともはや日もなき年の暮　轡
只身代は眞木の簡略　丸
傾城の地女になるもあはれなり　六
脉が早うて夢もむすばず　己
青みたる下弦の月の夜明方　紈
松茸植ゑる野屋舗の山　轡
峯入の過怠に宇治の橋かけて　己
即非の下で禪にかたふく　六
閑さにやつれ果てたる舉句集　轡
茅野もかれて冬は來にけり　紈
一時雨筏に下す炭俵　六
晩まで通す晝と場の馬　己
から〳〵と烹豆の上に日のさして　紈
寺請狀の判を見に來る　己
よい花もはや端々は火をともし　轡
霞の中に鶯の聲　六

二　唫

じゆんけいの膳据ゑ渡す花見哉　許六
日向に照らす顏の陽炎　李由
奉公ぶり出替前のきは立ちて　同
中でとつたる屋根の麥がら　六
月の秋うそ〳〵時の切通し　同
腹のふくれた躍り聞ゆる　由
上下で送りむかへの魂まつり　同
死こしらへの布を嗜む　六
ちやッくりと澁の餘りに罠懸けて　由
驗氣を得たる尾張商ひ　六
慳貪な女房の顏を化粧ひたて　由
烏帽子で禰宜の出ッ入ッする　六
青雲に若草山の夏あらし　由
氣を付けて見る小の十五夜　六
初鷹のまだ寢處も定まらず　由
革羽織着て江戸の良寒　六
する〳〵と大根の市の四ッさがり　由
姉がもどつてふえる喰口　六
白い物直を持揚げて年の暮　同
牛がつかへてよどむ逢坂　由
上紺の衣にはねのきれ草鞋　六
ひよつと餌ざしの出づる塀間　由
ほか〳〵と豆腐の布に湯氣立ちて　六
兄弟ながら妾奉公　由

祐筆の手を習ひ込むたはれ文　六
御夜詰ひけて世間静まる　由
鼠鳴に灯口の丁子祝ひ入れ　六
棚から物の落ちた音なり　由
水風呂の中より見たる暮の月　六
後の彼岸の談義草臥れ　由
醤油の二番にかゝる初紅葉　同
田舎芝居の穢多をこはがる　六
雨乞の躍りの代にやね葺きて　由
わめいて通る宿の馬方　六
竈の火もほのかに明けて茶の出花　由
分限見かけて多賀の頭さす　六

亡師三回忌報恩

月雪に淋しがられし紙子哉　許六
小春の壁の草青みたり　李由
蕎麥切のおろしの音に座つくりて　木導
相役同志の御用さゝやく　朱徜
懐のふくれてつれる夏衣　汝邨
きふな雁歯を人に押さるゝ　馬佛
家々に烟りをたてる揚屋町　米巷
松めづらかに羽子ひゞく也　胡布
数の子に扣き牛蒡の小重箱　毛紈
春日奥ある醫者の新宅　程己
人宿の後はやがて城の塀　徐寅
外郎買に荷は先へやる　六
雪隠を覗いて廻る腹ごゝろ　由
根太つぶして相撲崩るゝ　導
秋の日に村中こぞる喰ひ祭　徜
いつか出てある暮方の月　邨
息災で花見る人はうらやまし　佛
一歩もらうて長閑なりけり　巷
雪消えて上ぐる佛の御洗濯　布
藤に暮れたる細呂木の關　紈
佩板のひた〳〵濡るゝ川越して　己
味噌焼く門を扣き明けたり　寅
から臼の棹に積みたる古莚　六
馬が放れて菅笠を喰ふ　由
いひはやす鏡の食屋見て行かむ　導
早麥あからむ並松の風　徜
黒い帶女の仕たる夏の月　邨
夜宮の町の山のはり番　佛
後先にだんだと通る十駄物　巷
木曾材木でかゝる琵琶橋　布
ならべ置く大落雁の箱の蓋　丸
日は赤う出て雪のひらつく　己
後から被の裾をつまみ上げ　寅
門の外より拜む大佛　六
ごろ〳〵と車の音の花曇り　由
其衣更着の夢の境界　筆

匂塞

辭世

目は横に鼻は竪也雪佛　馬佛

悼馬佛

茲に丙子霜月廿二日、六成堂の馬佛、例の箭血をはしらして終に身まかりぬ。六年の多病に毎座吟席を欠ぐ、ことしも仲秋又病床に臥して、諸士が三夜の遊びをしらず。事終りて一軸を送れば、跋を作りて自ら病める佛と披露す。しかはあれど、亡師三回忌の追善報恩の席まで這出で、そくさいで花見る人はうらやましといひ出でし句も、けふのむかしとはなりぬ。蒼くすゝどきものゝふの顔色も、干鮭と死貌をあらそひ、兩眼を利鞘にかけられ、いたづらに烏の腹を肥す。噫々かなし、風雅の片腕をおとされ、花下月前

の遊びに、ながく一人を欠ぐ事、千悔萬悔の悲み、涙空しく靈前にそゝぎ、各燒香追悼して斷金のちぎりを謝すのみ

干鮭もさぞな子供の離れ際　李由

時雨てはつと友千鳥なく　錢芷

道中の味噌にこまらぬ旅ねして　許六

湯桶の酒に月のかたふく　朱袖

主の留守ぬけて出でたる一をどり　木導

うす燒の香に秋の初風　程己

湖を北に見渡す柴屋町　汝邨

西大名の二かしらつく　徐寅

鼻よせて嗅いで廻れる鮎の鮨　毛紈

灸の順にかたびらの蠅　米巒

放參の鉦しづまれば沓の音　執筆

癸酉記行並師友之餞別

許六離別詞

去年の秋、かりそめに面をあはせ、ことし五月の初め親切に別れををしむ。其のわかれにのぞみて、ひと日草扉をたゝいて、終日閑談をなす。其の器畫を好み。風雅を愛す。予こころみにとふ事あり。畫は何の爲め好むや。

風雅の爲め好むといへり。風雅は何の爲め愛すや、畫の爲め愛すといへり。其のまなぶ事二にして用をなす事一つなり。まことや君子は多能を恥づと云へれば、品ふたつにして用一つなる事可感にや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は精神徹に入り、筆端妙をふるふ、其の幽遠なる所予が見る所にあらず。予が風雅は夏炉冬扇のごとし。衆にさかひて用ふる所なし。ただ釋阿、西行のことばのみ、かりそめに云ひちらされしあだなるたはふれごとも、あはれなる所多し。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも、これらは歌に實ありてしかも悲しひをそふるとのたまひ侍りしとかや。さればこの御ことばを力として、心細き一筋をたどりうしなふる事なかれ。猶古人の跡をもとめず、古人の求めたる所をもとめよと、南山大師の筆の道も見えたり。風雅も又これに同じと云うて、燈をかゝげて柴門の外に送りてわかゝるのみ。

元祿六孟夏末　風羅坊芭蕉述

おなじく五月六日の頃、旅だゝむと申しつかはしけるにおどろき、例の次郎兵衞を使として、後の旅は、我れも木曾路を經て、眞一文字に五老井と志す、彦城の諸子に、はやく對面せむ事を常々にねがふ。かならず人に沙汰する事なかれと、こまやかに文して、色紙短尺繪讃の類もたせ給はる。猶離別の情あさからずとて、發句などいとねんごろにしたゝめかさねて、詞書をそへてむまのはなむけを寄せられたり。並に杉風子各餞別あり。

其の詞

木曾路を經て、舊里にかへる人は森川氏許六と云ふ。古しへより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとうて、おのれが心をせめて、物の實とする事をよろこべり。今仕官おほやけの爲めには、長劔を腰にはさみ、乘かけの後に鑓をも

たせ、歩行若黨の黒き羽織のもすそは、風にひるがへしたるありさま。此の人の本意にはあるべからず。

椎の花の心にも似よ木曾の旅　ばせを

うき人の旅にも習へ木曾の蠅　同

兩句一句に決定すべきよし申されたれど今滅後の形見にふたつながらならべ侍る

餞別

笠摺や蒼きわたしたるあやめ草　杉風

梟鳴いて跡もさらなる青田哉　桃隣

木を流し〳〵行く涼しさよ　百里

木曾の山路の旅行をそゝれば、畫圖俳諧のたすけにすらんといひて、

蚊のなきを又かこつけて旅ねかな　草才氏

夏草にあくび移さむ駕籠の者　安孟氏

千鳥たつ夏の氣色や諏訪の海　退波

甲斐の道すぢを教へて　田氏　魚

歌仙ども多ければ、餞別の俳諧今こゝに略す。

手の跡をわすれな甲斐の覆盆子時　門氏

不二淺間中にかけはしほとゝぎす　林氏

いに兼し客の形見や夏の月　松隣氏

夏山の形りみ忘れぬわかれかな　日氏

曲　郭　鮮　化　前氏　達

五十年の行脚に、一點の難も蒙らぬは西上人獨りの上也。蘇氏八州の逆旅は皆不平の上の流浪也。古人は是なるも非なるも、共に風雅の境を出でずして、萬古の情を述べたり。我れ雲水の客となる事二十年、ある時は不破清見が明月に鞭をあげ、士峯の空に顏をあふぐ事五たび、又むさしかむつけを經て、碓氷の雪にまよひ、木曾の若葉を分入る事已に六度に及ぶ。東西南北に奔走する事合せて十一度也。水村山郭木のふり石のたゝずまひ、前後左右はまのあたりにおぼえぬ。明朝赴かむとする道は、甲斐の猿橋を渡りて上の諏訪にかゝり、又もや木曾の川音のゆかしきに、枕を支へむと灯下に先達の紀行を披きて、名所の和歌古戰場の由來をとゞめて、旅行の囊に收め、足袋はゞきの破れを補ひ、竹杖の節をおろして枕の上にかけたり、我れむつまじき翁に別れ、行末覺束なく、心細き身になり行く空に、蜀魂の一聲も尋常ならず。月落ち鳥啼きて、やや市に行く人の足音は、已に首途をすすめぬ。明くれば五月六日武江の館を退く。

卯の花に蘆花の馬の夜明哉

日々の文章は、去んぬる記行にゆづりて筆をとゞむ。猶名所ところ〴〵の句共、おほくは前輩の集に出でたればこれをもらす。しかはあれど、旅の情のをかしきをあつめ、たはふれに賦作り、旅すく翁のなぐさめに書きあつめて草庵へおくる。今ついでよければ、亡師のかたみの一列にこれをしるす。

風狂人が旅の賦　並小序

旅は風雅の花、風雅は過客の魂、西行宗祇の見殘せしは皆俳諧の情也。我が翁白川の田植歌を聞き初め、奥羽の間を廻り、高館の夏草

に兵共が夢を驚かし、あつみ山の夕すゞみには吹浦をながめ、佐渡に横たふ天の川に初秋の袂をしぼる。それより蛤の二見を渡りて七百三十餘程を吟ず。曾良が落髪の力量を感じ。一鉢の飯を分けて風流を盡さる、ひと日ばせを庵を敲き、畫の雜談に及ぶ時、予に旅十躰の繪をかゝせて讃して、何某が求めに應ず。其風雅にたより、俗語をあつめ狂賦五段となす。穴賢奥の細道草枕の類にはあらず。旅店のさま　上段に書院劍菱のすかし、火のなき火燵にやぐらかけて、門口の入湯桶傾けて居るたり。庭に小砂のさはるは、夜べの殘りもいぶかし、出女の竪島は春秋をしらず。根太板敷は落ちて隅隅まで疊とゞかず。天井ふすまは雨もりにきはつき、鐵行燈はくらく、紙は童部の心といふ事に燃えたり。錢賣草鞋賣にせがまれ、やう〳〵に枕を傾むけ、心よき寢入ばなは馬さしの聲に夢を破る。

出たちは七ッと云ひふくめたるに、旅人も亭主もよく寢て、夜の明けてふためくつらも又にくし。

大名の寢間にもねたる寒さ哉

道づれの上をいはば、船頭の胸つくしをとり、駕籠廻しをたゝき、馬さしとつかみ合ひ、一僕の後にさがるをねめまはし、鷄の鳴かぬにつれの男を起し、挑燈とぼして夜道を行くを手柄のやうにし、湯の一番に入りたがるは何の爲めぞや、「つはの枯葉に雨のはら〳〵。といふ前に、

世話やきの友にあきたる旅の宿

といふ句も此の情にかなへり。

海道の賣物に餅酒のなき所もなし。摺針峠の餅を喰はねば、未來焰王の前にて、からきめを見るといへり。寒天にも冷素麺をすゝむるは逢坂の茶屋、饅頭のほか〳〵と見えたるは見付の臺也。玉子の煮ぬきは木曾の旅、はな紙は竹にはさみ、錢の看板は筒をかけたり。蒟蒻の田樂は、何者の喰ひけるぞ。

乘懸に春の蜜柑やうつの山

舟、川の上、馬、駕籠の情しば〳〵かぞへ難し、五月の大水もかり借の手形に書入れ、おのが草の戸は流るれど、首たけの借錢を納して、暫らく息を繼ぐものは、島田、金谷の賊也。水の淺深を何文川とこたへたるは、大きなる洒落也。天龍の中の瀬は、馬人足を空にまどふ。乘る人は股だけ入れて荷を肩にかけてまち、あがる者は負はれ支度して舟端に立つ。旦那が鑓をかたねたるは渡し場の情也。馬士駕籠舁は、輕重に日月をおくり。一盃の酒に徒然の氣をやしなふ。一生を漂々飄々とすまして、雲助の號を豪ふる。炎暑の日、玄冬のあしたも、榎の木の下に眠りて蟻の都にいたる、終に飲喰を座敷につかず、汁かけて出す馬方の食と作られ、小便のはしりながら、吸がらは手の裏にはたき、錢は耳の穴に納め、金はふんどしに結ぶ。一とせの名殘も暮れて、世にある人々のことぶく月日を、出替の季と定めけるは、世をやすうおくる人にも似たり。

出女も出がはり顔や年の暮

流浪漂泊の上にこそ、あはれなるためしはおほけれ。獨坊主には宿をかし兼ね、同じ所に二夜はとめず。五月雨の朝、霙の夕暮に、情深きあるじは長持臭き衣かして、ぬれたる物を燒火にあぶる。あるは三方荒神といふ物にしがみつきて、暫らく足を休むれ共、極めの札場より追ひおろされて、却つてのらぬ先より股をすくめ、雨方の手に、杖を携へて歩むべしとも見えず。人間病死の到來は時も所もまたず。醫療のたすけはうとく、懷中の振藥はやう〳〵急病を防ぐ、巡禮飛脚の族は、路頭に倒れ臥す、片目なる肝煎に追ひ立てられ。老僧の愍れみにて門下に入る、おとろへかさなり終に黃泉の下に赴く、かねて何國の土とならん終り

をしらず、犬はしりの土中にこめて、年の疑ひ、衣類の模樣を小札にしるされて、何國のいかなる人といふ名もしらずなり行く也。岡部の辻堂の笠に經文をよみて、同行の別れを惜しみ、隅田川の念佛を尋ねて亡子の古墳に登る。今來古往の人、旅懷の情を盡して風雅の腸をさらす。能因は白川の歌をよみて、二たびみちのくへ赴き、不二都鳥の二句を求めて、すみやかに故里に歸る者は、貞室老人也。東海道の一すぢもしらぬ人、風雅におぼつかなしといひし翁の聲、耳の底にとゞまる。

于時元祿九年丙子冬臘月日於
風狂堂選之

五老井主人
武林　森羽官　許六子
孟耶觀主頭
月澤衞人　買年僧李由

風雅の實體山野に滿ちて、いまだ亡師の跡をさまさず、しかれども、取捨のたよりをうしなひては、やゝ面々の楊貴妃に誇り、おのが甲に似せて是非をあらそふに、翁の畫像唇を動さず、面受口決の輩も、ひとりひとり露ときえ、雲と成南後、何を範とし誰れを柱とせむ。嗟乎かなしむべし。俳諧滅盡三十年に過ぐべからず。かの優婆鞠多は數滴の油をこぼし。夫子は觚ならんや〳〵と歎ず。まことに後世の翁をまつは、筆の跡なりとて、許六と額を合せ、函底に埋もれし古翁の句、遠近親疎の佳什を列ね侍りぬ。曾丹好忠の家集に習ひ、十二月をわけ、終に韵塞と題す。

元祿九丙子冬臘月買年李由自序

韻塞

李由選

十月

宿明照寺（元祿辛未干時四十有八歳）

當寺此平田に地をうつされてより、已に百年におよぶとかや、御堂奉賀の辭に曰く、竹樹密に土石老いたりと、誠に木立物ふりて殊勝に覺え侍りければ、

百年の氣色を庭の落葉哉　芭蕉翁
御玄冢も過ぎて銀杏の落葉哉　李由
生壁にぬり込む門のおちばかな　如元
あかぎれの膏藥つゝむ落葉哉　木導
寒山と拾得とよるおちば掻　許六
雜水の恩をおくるや落葉掻　毛紈
狼の道をつけたる落ばかな　程己
掃きおろす牛の背中の落葉哉　如行

旅行

夜の中に木の葉を聞くや駕籠のやね　荆口
炭燒や朧の清水鼻を見る　其角
神無月豆腐のうれるあらし哉　杉風
一しきり闇もあかるし神無月　朱徜
兀山や化をあらはす神無月　素覽
裝束の簾も倒さぬ神の留守　松風
新藁の屋根の雫や初しぐれ　許六
初時雨百舌鳥野の使もどつたか　諷竹
蔦の葉の落ちた處を時雨けり　此筋
蒟蒻の湯氣あたゝかにしぐれ哉　猿雖

無名庵にて當座

流れたる雲や時雨と長等山　北枝
一方は藪の手傳ふしぐれ哉　丈艸
鴻の列を崩さぬしぐれかな　米糂
惟然が、田上の草庵に入りけるに贈る
もらぬかと先づおもひつく時雨哉　翁
松山や時雨の脚のはこびやう　毛紈
原中や星はつて居て降る時雨　角上
麥糞の土に落ちつくしぐれ哉　李由
時雨來る空や八百屋の御取越　徐寅
水鼻にまこと見せけりおとりこし　許六
同じ日に山三井寺の大根引　奚魚
乘物につかへまはるや大根引　去來
刈株に一すぢ青し冬の稻　李由
木がらしにいつすがりてや雨蛙　正秀
凩にうめる間寒きいり湯哉　荆口
木枯や簀子の下を通る音　奚魚
こがらしや百姓起きて出づる家　亡人馬佛
我が形りの哀れに見ゆる枯野哉　智月

亡師一周忌にみづから畫像を寫して、野坡に贈りて深川の什物に寄附す。

鬢の霜無言の時のすがたかな　許六
爐開や左官老行く鬢の霜　翁
見臺に髮ゆふうちの火燵哉　毛紈
山寺は山椒くさき火たつかな　角上
小若衆に念者きはまる火燵哉　李由
脇見して中さかねたるこたつ哉　徐寅
御命講や顱のあをき新比丘尼　許六
御命講や紙子のうへの麻ばかま　奚魚
行きかへり客に成りけりえびす講　去來
水鳥も寢あたゝまるか靜かなり　李由
明けがたや城をとりまく鴨の聲　許六
瀧つぼを覗いて見たる小鴨かな　程己
あげ汐に弟雪ちかし鴨の聲　支梁

有馬歸路

初雪やならぶ伊丹のかはら葺　朱徜
初雪や一面に降る勢田の橋　李由
はつ雪や獄屋見舞の重の内　錢芷
初雪や網代の小屋の高斬　汝村

はつ雪や拂ひもあえずかいつぶり　許六
初雪ををしまではたく頭巾哉　毛紈
縄すだれ鼻で分けたるづきん哉　木導
鼻息や朝飯まつ間の江湖部屋　許六
寒菊や火を焼くかたの眞さかり　李由
ふくろ戸の押繪に書くや水仙花　木導

霜月

初霜や七夜の朝の樽さかな　荆口
初霜に覆ひかゝるや闇の星　千川
水風呂に垢の落ちたるしもよ哉　許六
柊の花に明行く霜夜かな　汝村
霜畑やとり殘されし種茄子　桐葵（エド）

芭蕉庵主十二日月並興行

萱屋根に霜見る朝の日和哉　同利牛
朝霜を火桶にのこす寒さ哉　京謙山
初しもや麥まで土のうら表　北枝
應啼くやしのび返しの霜の冴え　遅望（カヾ）
干鮭に喰ひさかれたる紙子哉　木導
肩置の出所かくすかみこかな　李由
さわがしくならぬとり得や古紙子　正秀
紙子着て樟柱にさはる音　錢芦
飛退いて鼠の笑ふふすま哉　蕪下
綿帽子の糊をちからや冬の蠅　許六

旅行

舟あてゝきや〳〵氷る寢覺哉　杉風
大儀して鍋蓋ひとつ冬ごもり　李由
人を吐く息を習はん冬籠　千那
冬籠鼓の筒のほこりかな　木導
土鍬子や燒火になるゝ冬籠　米糂
しづかさや二冬なれて京の夜　其角（京）
六條の豆腐の沙汰や夜の雪　吾仲
乞食の事いうて寢る夜の雪　李由
雪の日や先からさきへ子取婆　程己

わづかなるスサにたよりや壁の雪　汝村

去来が雪の門を題にするゑて、晋子に句を望まれける時

十四屋は海手に寒し雪の門　許六
帆ばしらに雪降りそふや風面　泥足
水鼻を吹ききつて行く雪吹かな　李由
霙降る宿のしまりや蓑の夜着　丈草
川越のふどしをしぼるみぞれ哉　毛紈
これほどの霰に寒き朝かな　日鮮
冬瓜のかくてもあられ降る夜哉　句空（カヾ）
紅の鷹の大緒や玉あられ　胡布（不知作者）
麥主の涙をこぼす鷹野かな　李由
御鷹野にすくんで居たり網代守　許六
網代守宇治の駕籠舁と成りにけり

住よしにて

星寒き三の鼓や松のかせ　大サカ規柳
かな物にさはる手もとや神樂姫　徐寅
晩方の聲や碎くるみそさゞい　惟然
鶯に啼いて見せけり鶺鴒　許六
狼のかりま高なり冬の月　奚魚
塀裏の桐の木ずゑや冬の月　朱徜
冬の月杉を澄するあらし哉　木導
松の葉の赤ばる方や冬の暮　許六

極月

寒き日は猶りきむなりたばこ切　千那
葱白く洗ひたてたるさむさ哉　翁
兩脇に足袋屋の弟子の寒さ哉　毛紈
鮫洗ふさゝらの音のさむさかな　木導
蕎麥粕の枕の音の寒さかな　角上
大髭に剃刀の飛ぶさむさかな　許六
氣をつけて見るほど寒し枯すゝき　杉風
鵙のかしらも寒し柞原　汝邨
寒ければ寢られずねれば猶寒し　支考

さむき夜は裾に鞍置く旅ねかな　左次
物賣の急になりたる寒さ哉　風國
菜大根の土に喰ひつくさむさ哉　乙州
寒き夜や二階の下の車井戸　探志
嫁入の門も過ぎけり鉢たゝき　許六
納豆きる音しばしまて鉢扣　翁
臘八は何とたゝくぞはちたゝき　木導
臘八に愚痴を一臼しらげばや　諷竹
臘八や腹を探れば納豆汁　許六
禪僧や悟つたうへのくすり喰　芦本（イセ）
客人に見物させて藥喰　禪桃（田）
寒聲を引ずる松の嵐かな　李由
傾城もいとゞねられぬ寒念佛　奚魚
長崎に唐物もなし年の市　氷化
渡し場や人行きとまる年の市　奚魚
節季候もはやす乙子の祝ひ哉　毛紈
節季候をまねて出でけり煤はらひ　胡布

長明がいかに見るらんすゝ拂　介我
松かせや琴とりまはす煤拂　臥高
煤はらひ不動に似たる眼かな　木導
すゝはきに鼻の欠げたる佛哉　米巒
煤掃に砧すさまじ雪の上　嵐蘭
すゝ掃や園爐裏にくばる番椒　李由
煤の手に一歩を渡す師走哉　岱水
煎茶に食粒の入る師走哉　胡布
問ひかへす咄もなしや年わすれ　曲翠
追鳥も山に歸るか年のくれ　丈草
氷魚といふ名こそをしけれ年の暮　千那
股引や膝から破れて年の暮　馬佛
木綿買ふ門の座頭や年のくれ　百里
同じ人に又あふ年の一日かな　仙化
來年は〳〵とて暮れにけり　露川（チハリ）
行く年や多賀造宮の訴訟人　許六
行く年に疊の跡や尻の形り　去來
膝かしら出して餅押す寒さ哉　東推（チハリ）
餅の手をはたいて出づる衣配　木導
衣くばりいそがぬ顔の廿日頃　望翠

示小坊主阿段

訴へを直に聽く也節布子　許六
春ちかき三年味噌の名殘哉　李由
待春や机に揃ふ書の小口　浪化

正月

七種や明けぬに聟の枕もと　其角
なゝ草や次手に扣く鳥の骨　桃隣
俎板に寒し蕪の青雫　此筋
古猫の相伴にあふ卯枝哉　許六

蜆子畫賛

白魚や黑き目を明く法の網　翁
桶鉢もほされぬ梅の盛り哉　岱水
寺町や向ひ合せの梅の花　李由

から風をうけつながしつ梅の花　木導

寄梅戀

ふり袖のちらと見えけり闇の梅　野坡
梅が香ややねに干したる酒袋　朱徜
むめがゝや山の大師の廻り月　汝村
梅がゝや通り過ぐれば弓の音　毛紈
むめが香に濃花色の小袖哉　許六
上塗に澁つくむめの匂ひかな　保直（大サカ）
かしこさの脫いで行きけり梅の花　角上
ふるひ行く心はしらず坊の梅　諷竹

深川懷舊

豆腐やもむかしの顏や檐の梅　許六
かぞへ來ぬ屋敷々々の梅柳　翁
それ〴〵の朧の形りや梅やなぎ　千那
寶引に夜をねぬ貌の朧かな　李由
おぼろ夜や塀の棟木の鳥の糞　徐寅
黑土の庚申塚やおぼろ月　許六

乞食の寢所かへるや朧月　毛紈
朧々直に霞みて明けにけり　杉風
海山の霞冥加や生れ國　千那
氷凝解にほつれて咲くや蕗の花　米巒
養父入の客のとりけり蕗の臺　木導
やぶ入や親なき里の春の雨　李由
春雨やはなれ〳〵の金屏風　許六
物よわき草の座とりや春の雨　荆口
幸ひに柳も寐るや春の雨　吾仲
はるさめに水のいさみや雲出川　昌房
春雨や鶯這入る石燈籠　杉風
逢坂や鶯きかば小關越　尚白
うぐひすやまん丸に出る聲の色　木導
鶯の鳴破つたる紙子かな　許六
うぐひすに浮れて脫ぐや下ひとつ　千川
鶯の聲もさはらぬ日より哉　濁子
鶯や此のまに雪も降りながし　支考
春雪や茶糞の上のむら鳥　毛紈
下萠の氣色を消すや春の雪　李由
掃きためを捨てかけておく春の雪　許六
初茸の盆と見えけり野老賣　其角
傾城の生れかはりか猫の妻　木導

二　月

二ン月の雨より細き柳哉　汝村
梅が香をくだく柳の梢かな　木導
風のむきけふは隣りの柳哉　子珊
川上へ流るゝやうな柳かな　此筋

大和巡路の頃、六田の渡りにて

伐りたてゝ空に青みや川柳　徐寅
我がまゝに枝のそろはぬ柳哉　如元
結ひたての髪を撫でたる柳哉　李由
唐人のうしろむきたる柳かな　許六

奈良にて故人に別る

二俣にわかれ初めけり鹿の角　翁
思ひ子をしかるに似たり雉子の聲　千那
大峯や櫻の底の雉子の聲　李由
蜂の子をのがれて蝶のそだち哉　丈草
蟷螂の夢見て逃ぐる胡蝶かな　如行
眞直に矢橋を渡る胡てふ哉　木導
砂川や芝にながれて鳴くひばり　許六
日中のあをみにすわる雲雀哉　隱山
くろき物ひとつは空の雲雀哉　李由
陽炎や足もとにつく戻駕籠　去來
かげろふや破風の瓦の如意寶珠　許六
雀子と聲鳴きかはす鼠の巢　翁
鳥の巢に蓋して置けば椿かな　支考
春風にむかふ椿のしめりかな　野坡
古佐和や赤菜の中の春の風　馬佛

題餘寒

灸の點干ぬ間も寒し春の風　許六
きさらぎや身は思はねど押やいと　千那
糞草の烟るも二日やいと哉　毛紈
苗代を先づあてにして歸る雁　汝村
苗代やうれし顏にもなく蛙　許六
百姓の訴訟顏なる蛙かな　毛紈
芦の葉の達磨に似たる蛙哉　木導
菜の花を身うちにつけてなく蛙　李由
菜の花や豆の粉食の晝げしき　許六
菜の花や畑まぶりの大蕪　毛紈
涅槃像後は釋迦の立佛　左次

三　月

芳野山又ちる方に花めぐり　去來

寄霞谷元政上人

草の戸の草もゆかしや花の雲　明照十二世了超
雛事のつゞきにあそぶ花見哉　李由

五斗の米の爲めに、腰を折るに懶し

年々に猶いそがしや花盛り　許六
日あたりの花見る顔や婢子の目　孟退
花にいざ節振舞の遅なはり　望翠
崖端をひとりが覗けば花の山　野坡

遊五老井

花の山常にながるゝ井戸ひとつ　諷竹
壁土に道せばめけり花ざかり　句空

東叡山吟行二句

寢とすれば棒突きまはる花見哉　其角
饅頭で人を尋ねよ山ざくら　同
伐口を人のをしむや山ざくら　徐寅
鯉のぼる瀧の濁りや山櫻　毛紈
大竹の間に咲くや山ざくら　木導
茶のはりにそしつて散るや山櫻　許六
山彦に散果したるさくら哉　米巒
春の夜は櫻に明けて仕廻ひけり　翁
金の間の庭一ばいや八重櫻　李由

逢坂のかたまる頃や初ざくら　千那
鶴の巣や日は入りはてゝ散る櫻　汝村
桃さくや宇治の糞船通ふ時　程己
實をねらふ足輕町の洮の花　朱油
火は燃えて家に人なしもゝの花　鼠彈
室咲の桃に糀のほこりかな　梨期
草餅にいな振舞や鯨汁　土芳
足あとのやさしきもある汐干哉　一咕
鹿島には杉菜の生えるしほひ哉　山店
松原に風を殘して鹽干哉　風國
出替や傘提げて夕ながめ　許六
紙屑や出がはり跡の物淋し　千那
出替りに替るや髪の結ひ心　木導
五器箸に離れて出るや一季者　李由
出替に都司王丸の葛籠哉　肅山
長々と蛸も伸びする春の海　附鳥
懺法のあはれ過ぎたる日の永さ　許六

永き日や大佛殿の普請聲　李由
革足袋や野はあたゝかに木瓜の花　錢芚

旅行

草臥れて地にとりつくや木瓜の花　殘香
難波の諷竹、之道といひける時、しばらく行脚の頭陀をとゞめて、又美濃の方へも越えむと申しければ
紬着る客に取つけ木瓜の花　許六
獨活の香に亭主のすゝむ出立哉　李由
其の頃岐阜の方よりの文通に
うどの香や膳のむかひの稻葉山　諷竹
藤の花さすや茶摘の荷ひ籠　許六
水風呂の置處なし春の暮　嵐竹
大和路の望みの春も暮れにけり　荆口
行く春や麓におとす馬糞鷹　許六
ゆく春に佐渡や越後の鳥曇　許六
行く春に飽くや干鱈のむしり物　李由

四月

世の中をうしろの皺や衣がへ　支考
水引いて髪ゆふ姫や更衣　李由
上ひとつ脱いで大工の衣がへ　許六
いつとろに袷になるや黒木賣　其角
傾城に喰ひつかれたるあはせかな　程己
風の日は何にかたよる杜宇　杉風

遊長命寺

筍の鮓を啼出せほとゝぎす　丈草
蜀魂門は胡桃の茂り哉　木導
草臥れて三井に歸るかほとゝぎす　千那
杜鵑鴨川の水山法師　李由
外宮内宮とたんに聞くや杜宇　毛紈
兄弟が顔見合すや蜀魂　去來
時鳥眞一文字のきほひ哉　徐寅
子もふまず枕もふまず杜鵑　其角

大津に住み侍る頃、勢田にてはつねを聞きて

ほとゝぎす勢田は鱧の自慢かな　許六
烏賊賣の聲まぎらはし杜宇　翁
青天に向つてひらく牡丹哉　汝郁

題觀心寺牡丹

楠の鎧ぬがれしぼたんかな　其角
三味線の音にはり合はぬ牡丹哉　木導
蠟燭にしづまりかへるぼたんかな　許六

畫賛

から獅子の血を干しつけて牡丹哉　李由
芥子の香にたま〳〵似たる牡丹哉　陳曲
本庄の三ッ目の橋やけしの花　汝村

信濃上野を過ぎ、むさしの地にいりて芥子の花を見る。馬頭初見二米囊花一と いふ句の力を得たり。

熊谷の堤あがればけしの花　許六
花芥子や握りつめたるあたゝまり　木導

白川の關こえける時、竹田の太夫裝束つくろひける事おもひ出して

卯の花をかざしに關の晴着哉　曾良
うの花の葉は持ちながら笹の垣　土芳
卯の花に隣りありきやぬれ鼠　諷竹
灌佛や捨子すなはち寺の沙彌　其角
佛法を裸にしたる產湯哉　許六
傘にかゝやく色やかきつばた　木導
藤棚や池の小すみのかきつばた　奚魚
日あたりや紺屋のうらの杜若　許六
くらがりに覆盆子喰ひけり草枕　史邦
草臥れや蕗の葉もりの蔓いちご　汝村
鼻紙の覆盆子に染まる晝寢哉　朱油
筍やからげてかつぐ手傘　木導
竹の子に身をする猫のたはれ哉　許六
筍の勢にこけたり鮓の石　李由
松柏を植ゑた痕ありすしの石　嵐竹

五月

夕だちのかしら入れたる梅雨哉　丈草
五月雨や蠶わづらふ桑ばたけ　翁
さみだれや焙爐にかける繭の臭　汝村
布杭に桶の尻ほす五月哉　可吟

許六が、東武に赴くと聞きて申し送る

猫の手も江戸拵へや夏ごろも　李由

仁和寺懷舊

柑類の花の盛りの御室哉　大ッ七人 旬兒
競馬見てもどりは陣の嘶し哉　朱油
なよ竹の末葉殘して紙のぼり　其角
むづかしきするのとまりや幟竹　胡布

東武吟行のころ、美濃路より李由が許へ文のおとづれに

ひるがほに晝寢せうもの床の山　翁
晝顏の果も見えけりところてむ　許六
出女や水鏡見るところてん　木導
蓑笠もあら鵜つかひや川おろし　李由
鍛冶の火も篝に曇る鵜ぶね哉　汝村
見物の火にはぐれたる歩行鵜哉　去來
伊勢荻や鵜の進む夜の風の音　馬佛
箸持ちて鵜籠を覗く宵月夜　朱油
大名に馴れたる鮎や大井川　毛紈
投げられてもろき命や簗の鮎　此筋
涼風や青田のうへの雲の影　許六
青鷺や世間ながむる田植歌　正秀
腰のして念佛申す田植かな　吏明
菩薩とはならでや道の餘り苗　乙州
燕の下腹さはる早苗かな　胡布
胴龜や昨日植ゑたる田の濁り　許六

月澤の夜遊　四句

風呂屋より直に見に行く螢かな　木導

夜の更るほど大きなるほたる哉　汝邨
苗塚を休み處や飛ぶほたる　李由
宇治川の螢は、昔日三位入道の亡魂なりといひつたふ。今の世はかしこさに合戰なしに飛ぶ螢　許六

六月

有難き時代にあふや土用干　杉風（許六亡父理性軒）
内張の錢の暑さや土用干
八十に餘る老祖父、子孫の榮えゆくにつけて、はやく死したとばかり、願はれける。
一竿は死裝束や土用ぼし　許六
南天にしばしと干すや汗拭　山店
撫子の泄は落さじ麻地酒　史邦
田の草におはれ〳〵て富士詣　奚魚
夏富士にほつれて涼し雲の縁　汝村
雲の峯石臼を挽く隣りかな　李由
暮待や藪のひかへの雲の峯　去來
眞白に繭干す庭や雲の嶺　奚魚
照りまけて夕立雲の崩れけり　猿雖
夕立に幾人乳母の雨やどり　許六
白雨に一足はやし旅籠町　此筋
ゆふだちやひし〳〵とやむ鳥の聲　李由
桐の葉に埃りのたまる暑さ哉　孤屋
大磯や砂のひかりのあつさ哉　陳曲
愁に兀長持のあつさかな　如行
川端をうちかへしたる暑さ哉　游刀
伊賀の舊友より文通の返しに
米の直も大かた似たるあつさ哉　羅香（大サカ）
蟬鳴くや土用の中の晝談義　程己
木曾路
棧やあぶな氣もなし蟬の聲　許六
あつみ山吹浦かけて夕すゞみ　翁
中入や面をはづして一すゞみ　汝村
乳母どもの食の噂や夕すゞみ　毛紈
此のあたり二三度もどる涼みかな　野坡
前おたれはづして町の夕すゞみ　李由
山伏の髪すきたて〻夕すゞみ　許六
中間の堀を見てゐる夕すゞみ　木導
肩衣はおの〳〵すゞし帆かけ船　支考（長サキ）
あげ笘に涼むばかりぞ向ふ風　魯町（長サカ）
涼しさや松の葉越の破風造り　野明（サカ）
爪紅の濡色動く清水哉　卯七
鷹匠のはしり付きたる清水哉　徐寅
いそがしきから臼踏の團かな　許六
ある方より畫扇の葬に當座所望
朝顔や扇の骨をかきね哉　其角
かさねて武者繪かきたる扇つきつけられて
すゞ風や與市を招ぐ女なし　同
旅行
涼風や峠に足をふみかける　許六
月代をさはきたてけり蚊のうなり　苔蘚（イガ）
蚊やり火や食にさしあふ西の岡　乙州
世をいとふ心のはしか蚊屋の中　謙山
旅行
大垣は夜明になりぬ眞桑瓜　眠石（彦根）
口の代て蠅をはせぬか瓜つくり　利合
水無月やとりおくれたる舟日待　奚魚
川越や蚤にわかるゝ横田川　彫棠
宿山中
蚤虱馬の尿するまくらもと　翁

七月

素堂の母、七十あまり七としの秋、七月七日にことぶきする。萬葉七種をもて題とす、これにつらなる者七人、此

の結縁にふれて。各また七夏のよはひにならはむ。

七株の萩の手本や星の秋　翁
織女に老いの花ある尾花哉　嵐蘭
布に煮て餘りをさかふ葛の花　沾德
動きなき岩撫子や星の床　曾良
けふ星の賀にあふ花や女郎花　杉風
蘭の香にはなひ待つらん星の妻　其角

むかし此日家隆卿、七そじなゝのと詠じ給ふは、みづからを祝ふなるべし。

今我が母のよはひのあひにあふ事をことぶきて、なほ九としあまり九ッの、重陽をもかさねまほしくおもふ事しかなり。

めでたさや星の一夜も朝顔も　素堂
五位の聲まだらに更けぬ天の川　汝村
かさゝぎの橋や繪入の百人一首　許六
七夕や馬すゞますする川の端　錢芷
初秋や帷子ごしにかゝる雨　毛紈
あさがほのうらを見せけり風の秋　許六
燒きたての食のにほひや秋の風　李由
澁い壁に何をたよりの秋の風　程己
作り木の糸をゆるすや秋のかせ　嵐雪
さびしさや馬屋の蚊屋の秋の風　汝村
朱の丸の入日の中や秋のかせ　毛紈

宇津の山を過ぐ

十團子も小粒になりぬ秋の風　許六

同じ頃、島田金屋の送り火に感をます

聖靈とならで越えけり大井川　同

追悼

玉棚の奥なつかしや親の顔　去來
芋の葉に風の吹きけり玉まつり　徐寅
そなへもの名は何々ぞ魂祭　卓袋
秋の蝶一葉と散るや夢の中　大坂一桐

蜻蛉のついとぬけたる廊下哉　美濃斜嶺

贈清貧僧

下帶のあたりに殘る暑さ哉　李由
初秋や親に離れし相撲取　米巒
相撲取の腹に着きけり虻の聲　木導
投足に燈籠打消すすまひ哉　朱徜
裸身に麻の匂ひやすまひ取　許六
後から家老のあふぐ勝相撲　汝村
傾城の汗臭くなるをどり哉　木導
食の湯の汗に出でたるをどり哉　李由

訪草庵

秋さびし手毎にむけや瓜茄子　翁
走り穂を分けて出でけり三日の月　李由
三日月や柱にすわる高燈籠　錢芷

八月

八朔に酢のきゝ過ぎる膾かな　許六
鶏頭を黑うてらすやけふの月　文鳥
酒臭き鼓うちけりけふの月　其角

病床

捨てらるゝ目に度々や今日の月　馬佛
名月や無事に穂を出す竿はづれ　千那
名月は蕎麥の花にて明けにけり　李由
名月のこれもめぐみや菜大根　許六
小草までともにそよめく月見哉　徐寅
十六夜はとり分け闇のはじめ哉　翁
いざよひや有馬を出でゝかへる人　許六
十六夜の氣色わけたり比良伊吹　汝村
いざよひや堅田かもどる神明講　毛紈
日暮から長屋へやつて碪かな　如元
松茸の笠のひゞれる碪かな　徐寅
松茸や園爐裏の中に植ゑて見る　伊勢團友
松だけや大きな聲のなぐれ賣　吾仲
葉隱れの螇蚕のやどりや蕃椒　米巒

生れつく草の青みや秋の虫　文鳥
くるゝほどばせをにひゞく虫の聲　許六
やねまくる暴風の中や虫の聲　李由
虫の音や木綿所のわた車　汝村
暾豆を引く手にはづむ蟲かな　爲有
豆まはし廻しに出たる日向哉　支考
蟬の音や株ほす藁の日のよわり　汝村
蛤蜊のすがたも見えず稻雀　李由
稻刈の其の田の端やこぎ所　許六
禪門の數珠持ちそふる落穗哉　木導

亡母年回追悼

同年の尼くづをれて袖の露　李由

おなじく供養に詣でゝ

唐がらし菜摘み水汲み法の人　許六

源氏の書贊望まれて、いなみけれどゆるさゞればひきのけて

傘持も月におくるゝすがたかな　其角

大きなる家ほど秋のゆふべかな　許六
石山の石にも蔦のうらおもて　乙州
霧雨の空を芙蓉の天氣哉　翁
朝霧や水をはなるゝ鵜の雫　毛紈
世の中を這入りかねてや蛇の穴　惟然

孟耶觀の夜話

夜ばなしの長さを行けばとこの山　丈草

九月

塗物にうつろふ影や菊の花　木導
顏痩せて花肥したり菊作り　李由
菊は猶捨てじ佛のたてからし　千那
猫の毛の濡れて出でけり菊の露　岱水
濡落の雫霽れけり菊の露　朱袖
菊の香やふるき難波の呑手共　千川

加州山中の重陽

山中や菊は手をらぬ湯の匂ひ　翁

水鼻にくさめなりけり菊紅葉　其角

宿山寺

むく起や峯の紅葉の朝しめり　李由
てりたてゝ夕日春け初もみぢ　野童

木曾路にて

棧や命をからむ蔦もみぢ　翁

遊五老井　二句

早咲の得手を櫻の紅葉哉　丈草
あを空や手ざしもならず秋の水　同

題十三夜

月影やこゝ住よしの佃島　其角
穗のうへに高低もあり後の月　游刀
月代に吃と向ふや鹿の胸　木導
小男鹿やころびうつたる蕎麥畠　許六
むら尾花ふりむく鹿を招きけり　梨期
穗すゝきをたばねよするや秋の畑　芦本
秋の野をあそびほうけし薄かな　李由

あだゝかに九月日和や藪の照り　水魚
歸り來る魚のすみかや崩れ簗　丈草
又來たと鶉おもふや小田の雁　支考
稻主に啄をかくすや小田の雁　毛紈
雁の行くづれかゝるや勢田の橋　北枝
雁がねのむすび合すや眞野堅田　李由

自書自贊　二句

白雁や野馬をおどす草の露　許六
落雁の聲のかさなる夜寒哉　同

訪鄕里舊友

病人と鉦木に寢たる夜寒哉　丈草
客人の夜着押しつくる夜寒哉　程己

遊五老井

椋栗の笑ふも淋し秋の山　李由
いが栗や落つる合點に突いて逃げ　苔蘇
徒移や先へ來てゐるきりぐ〳〵す　露川
干鮭の目へかゞんだる竈馬かな　許六

磯際の波に鳴入るいとゞかな　惟然

訪隱者不遇

喰殘す柚味噌の釜のいとゞ哉　程己

青き葉をりんと殘して柚味噌哉　園友

麥地ほる一くらがりや民の秋　汝村

のび〳〵て衰ふ菊や秋の暮　許六

謝芭翁被訪草菴悅而奮交

十年も言葉一つの暮の秋　禪桃

行く秋や身に引きまとふ三布蒲團　翁

匂ふたぎ追加

閏月

芭翁後の旅行餞別に

五月雨も日と月のひよ閏月　石菊

さみだれにふた月ぬるゝ青田哉　芳山

衣配りまつや師走の一かさね　立甫

雛の來ぬ閏に咲くや遲ざくら　如元

三月も閏の則の寒さかな　水魚

極月に閏ありて次のとし歳旦

味噌つきより七十五日や花の春　似春

大

晦日も過行く嫗がゐのこかな　尙白

文月の三十日おどろく燈籠哉　比竹

小

助番や二十九日の大晦日　孟什

朔日

朔日は猶あはれなり鉢扣　柴雫

日蝕

日蝕の日に喰入るや栗の虫　李由

月蝕

棟絹の色もうるむや月の蝕　汝村

月蝕の露にあてまし白牡丹　木導

彼岸

百姓の娘の出たつひがんかな　許六

くゝ立の花うちこぼす彼岸哉　支考

きら〳〵と秋の彼岸の椿かな　木導

土用

おぼつかな土用の入りの人ごゝろ　杉風

八専

頭痛する八專中や椎の花　程己

十方くれ

てり曇る十方くれのあつさ哉　毛紈

庚申

庚申や殊に炬燵のある座敷　殘香

甲子

甲子をまつや隣りの茶菰引　米巒

入梅

胴龜の夜番を起すついり哉　錢芷

八十八夜

ふく病につれなき霜の名殘哉　千那

二百十日

菜大根に二百十日の殘暑哉　李由

半夏生

半夏水や野菜のきれる竹生島　許六

石竹も半夏に胡麻蒔くついで哉　朱徜

冬至

門前の小家もあそぶ冬至かな　不知作者

ゐのこ

しみ〴〵と餅腹寒きゐのこ哉　徐寅

寒

月花の愚に針たてむ寒の入　翁

寒に入るこゝろにかるし夜着の裾　卓袋

節分

大豆をうつ聲の中なる笑ひかな　其角

年内立春

冬の春心の外や梅の花　智月

立春

春立つや齒朶にとゞまる神矢の根　許六

跋

日本書記は天理の臆を窮め。源氏物語は人情の實を盡すとかや、今韻ふたぎと題する二卷は、李由許六が腸なり。木導汶邨其のほか羅漢のやうなる者ども、花の雲にあそび、月の水にたゞよひて、人一如の誹諧の一揆、赫然として百尺の竿にともし火をかゝぐ、詩歌管絃の舟をかざらばおの〳〵身を和らげて、夢乘ぬべき彼の廬山東林の交り、遠法師陸道士車座に酒のむ顏ならむかし。

蒲萄坊　僧千那書

孟耶孟耶觀主頭　月澤衞人　買年　李由

五老井主人　武林　森羽官　許子六

刀奈美山引

頭巾とも襟卷ともつかぬはなむけせしは、霜月十三日の夜也。そのよはことにさむかりしかども、嵐雪に妹ともいはせず、桃隣に疝氣とも逊さず、落柿舍をたゝいて入りしより、先づたき付くる酒の燗、ともに本情をあらはすたのしみや、四子一胸に成りて、芭蕉翁の昔しを泣きみわらひみ、嵯峨の咄しは幻住庵へとんで、深川をわたれば、清瀧川の塵なき月を思ひ、猿蓑の評は芝居の沙汰にうつり、戀をば一句にてこそ捨つといへば、早く傾冶のたはふれに事よせて、人事人情かはる〴〵の轉動の上にも、十人の酬和と云ひし九人が意地をたてしも、たゞ翁一人を眼にし口にし、横行の蠏の逊穴をふんで、時のさかなにせんとはなししこるに、八ツの鐘耳ひそかにして、鉢たゝきのしはぶき來る、是を嵐雪が馳走にと、十錢をなげて千聲のひさごをならさしむ。

千鳥なく鴨川こえて鉢たゝき　其角
今少し年寄見たし鉢たゝき　嵐雪

へうたんは手作なるべし鉢たゝき　桃隣

旅人の馳走に嬉しはちたゝき　去來

されば堅固のつとめ哉と、その跡をしたうて、明れば十四日の明ぼのに四子北野へまうで侍り。輪藏を廻りて回廊によれば、雪の風はな松をはらつて羽織にしめり、かぼそき梅にかゝるさへ田樂の匂ひになりて、一盃はと勸むる桃隣が貌色ことに靑し。嵐雪が奉納の一句に十面するを、時うつすまで繪馬をながめて待ちかねたり。とかくする中に、かたはらに腰掛所得て、爰に都の名殘ををしめり。むかし芭蕉翁北越の旅寢に、ありそ海の吟あり。浪化君此の句より信仰の一集をおぼしめし立ちあり て、去來着頭をかうむる也。江戸門葉のものにも、かねて發句まゐらすべきよしを、催しぬる事を語り出で、とみにとなみ山のおもてを起しぬ。往年落柿舍にて夜ひそかに翁をむかへ、向對の盃ありて、門人のかためをなさせ給ふ御志の、目出度く覺えぬれば、予も一かたに思ひ侍るよしを約して、心かたむかぬ等をぬきんで、撰集の餘刀とし、こしのとなみに雁陣をたて、同じく綰柳の麾を揮つて、下知する事をしかいふのみ。

となみ山の表

こがらしや沖より寒き山のきれ　其角
高きところに生えるふゆ麥　浪化
來春の用意するらん木具提げて　嵐雪
家は見事にたちそろひけり　桃隣
山鼻にしる人持ちてはしりよる　去來
きざみなますに入るゝこんにやく　角
萩の花小刀ぬいて下へおり　化
はこに鼠のかゝるあさ露　雪
有明の汐に筏をおしくづし　隣
番羽織着ていきるくみつき　來

冬

此の家が不破の關屋か雪の中　岩翁
初雪に眞葛が原のめかけ哉　晋子
すり針や今ふるやうにいつの雪　龜翁
はらはずに雪の風鈴の音もなし　介我
初雪や爐次に女の雀弦　紫紅
かくれ家や片耳かけて角頭巾　專吟

春

やぶ入やひとつはあたるうらや算　晋子
齒につかぬ子こもりも哉花の時　岩翁
物陰や田螺ののぼる稚だはら　尺草
彼岸にて彼岸櫻のちりにけり　彫棠
春の野や木瓜は莚の敷合せ　沾德
やぶ入や朧月夜の酒の醉　專吟

夏

卯の花に芦毛の馬の夜明かな　許六
早乙女の手でせくものよ川の支　彫棠
飛石の間や牡丹の花のかげ　介我
旅立に火繩やりけり門すゞみ　岩翁
涼しさや帆に船頭のちらしがみ　晋子
涼み舟鵜はかしましと沖へ行く　枳風

秋

星合や離別の中をわびて見ん　山蜂
曉を引板屋にかはる妻もがな　秋色女
穐のくれはり合ひもなし舟遊山　紫紅
寢た家の燈籠哀れに月夜哉　未陌
水の蛛一葉にちかくおよぎ寄る　晋子
雁の腹見送る空や舟の上　同

元祿猪頭勇進之日

去來丈　演說し給へ　其角

礪浪山の撰集に、我がかたの連衆催ほされければ

捨鐘の間を降出す、れの雪　曲翠
鷹とまらせにおろすたれごも　浪化
松茸の數を袖より見せ合うて　正秀
箸に露うく盃のもち　臥高
名月をこゝろ〳〵に申しなし　胡故
湯治の旅をあとさきの初　翠
ともかうも少しの金をしひろげて　高
去る宮人のむすめ養ふ　秀
反故にもちよつ〳〵と見ゆる文の端　翠
時雨の頃はみのを出て行て　故
さび刀冥加もあれといたゞきて　秀
戸を片陰にひろき寢所　高
樓欄の葉に風吹きあつる月よかげ　故
すゝきの岸を下る川舟　翠
よひ衆の見たがられたる秋のくれ　高
豆腐に葛のまづきれいなる　秀
今はやる庭とて花を五六本　翠
春のひよこの股立をとる　故
陽炎のちら〳〵としてあたゝかに　秀
そこら廻りの鍬すてゝおく　高
蜂のさす貌をさまゐてすゞみ居る　故
五器に蓋してもろふ何やら　翠

下町の盗の出た咄しして　高
越前衆の遲うたゝれし　秀
行違ひ手ぶりで通る松の間　翠
月もくらみて光るいなづま　故
翠簾の下ひそかにくゞる秋の風　秀
淺芽の露を戀の一景　高
おもふ事あとは念佛にまぎらかし　故
五百の錢をどちへすまさう　翠
腹持を今朝の鯲に直したり　高
旦那の留主は門たてゝおく　秀
柴積んだ上に子供をあそばせて　翠
きのふの古着ねをさしてくる　故
しやら〳〵と花見の通る眞盛り　秀
武士片側に寺町の春　高

曲翠　九　正秀　九
浪化　一　胡故　八
臥高　九

となみ山

鶯に朝日さす也竹閣子　浪化
禮者うすらぐ春の靜かさ　去來
やぶ入の見やげ似合ひに拵らへて　同
又時の間にわるうなる空　化
炬燵切る寒さもちかしくれの月　同
ひろい處を丸口にかる　來
旅人に錢をかはるゝ田舍道　同
かひごの臭き六月の末　化
雫たる網を一ばい引きちらし　同
小屋敷並ぶ城の裏町　來
謂分のちよつ〳〵と起る衆道事　同
梅咲きそめて立花はやらす　化
年中を松の內より料理くひ　同
いせの狀日のいそがしき春　來
上紺の木綿合羽に傘さして　同
湯屋の手透は八ッさがり也　化
名月のもやう互にかくしあひ　同

一歩でもなき梨子の切物　芭蕉
玉味噌の信濃にかゝる秋の風　同
不足な寺を無理に持たする　來
右の手の振ひしだいに強うなり　同
點かけてやる相役の文　化
此の宿をわめいて通る鮎の鮓　同
青田うねりて夕立のかせ　蕉
平めなる石を敷きたる行水場　同
給仕をさせて馬夫が食喰　來
月くらき夜の鹽梅を星でする　同
聖靈棚はよほど窮屈　化
しのぶ間を踊に出るとおもはせて　同
來てうからかす去年の傍輩　來
參宮といへば盗みもゆるしけり　化
につと朝日にむかふよこ雲　蕉
蒼みたる松より花の咲きこぼれ　來
四五人通る僧長閑なり　化

薪過ぎ町の子供の稽古能　蕉
いづつも春にしたきよの中　來

浪化　十五
去來　十五
芭蕉　六

ことし乙亥のむ月、加賀の金澤に旅寢す、たま〳〵芭蕉翁の百ケ日に逢ひ侍れば、句空、北枝が等をまねぎ、この日の作善をおこす。

即興

問殘す歎きのかずや梅のはな　北枝
春も氷にしづみつくいけ　浪化
田を返す馬の鞍蓋こしらへて　句空
石つる方へとやのかたがる　林紅
白水の二番取りおく月の影　牧童

梧桐落つるを秋の手はじめ　筆
打明くる折敷にはせのそりかへり　化
這ひかゝる子にいかい目をむく　枝
借屋から奉加の帳をつけ廻り　紅
袷洗うてもらふ旅だち　空
うは〳〵として何もかも忘れたり　枝
笑うて濟す途なかの禮　童
物ねぎる内より雨の晴れあがり　空
おもひがけなきうづらなき出す　化
すががきの同じ手かへす秋の暮　童
殿にもまけずいらへする月　枝
ちる花に有る程の戸を明けはなし　化
欲にめし喰ふ熊野路の春　空
さえ返る兵具のつゞらしめからげ　枝
めづらしさうに犬の尾をふる　童
裏白のほぐちのうつるすりびうち　空
四方えんなる茅の辻堂　化

となみ山

往昔の宗祇の連衆したはるゝ　童
蒼き空より雪のうちゝる　枝
あふつけに小ふとん敷きて里歸り　化
一荷ひほど鷄頭のはな　童
うそ寒き淺草前に店はりて　枝
けさは露見るやねの置石　化
つう〳〵と目白の渡る月白し　童
藪のうしろを鉦たゝき行く　空
麥刈の晝間過せと留主をして　化
ひえたる菓子を盃にもる　枝
上一ッぬらで帶するひぢりめん　空
船ゆる度に肝つぶす君　童
されば こそ松は花より朧にて　萬子
海苔もてはやす百日の空　紅

北枝　八
浪化　八　句空　七
林紅　三　牧童　八

萬子一筆一

追悼のほ句

去年の神無月、翁の辭世し給ふ事も、越路のはし〳〵にはやゝ日數へて聞えぬれば、義仲寺へ手向抔おそなはり侍りて、晋子が終焉の記にもゝらされし事、人々あさましとおもへれば、今ここにとゞめぬ。

落着ば難波のゆめや都鳥　句空
かなしさや時雨に染まる墓の文字　浪化
冬籠うき次手なる別れ哉　加賀萬子
風渡る枯葉に見るや雪の舍利　秋之坊
黒海苔の文も形見や雪の跡　加賀四睡
風と化すたよりに袖の時雨哉　平交
車座に並び泣きけり冬の月　越中宇白

獨言いうてくやむや小夜時雨　同芦葉
痩せ〳〵て終に折れけり水仙花　壽仙
初雪や扇たけなる墓の松　呂風
白玉も涙の名なり冬つばき　林紅
聞忌に籠る霜夜のうらみ哉　北枝

蕉翁の落柿舍に寓居し給ひけるころ、たづねまゐりて、主客三句の情をむすび立歸りぬるを、その後人々まゐりける序、終に一卷にみち侍るとて、去來がもとより送られける。

葉がくれをこけ出て瓜の暑さ哉　去來
野松に蟬のなき立つる聲　浪化
歩荷持手振の人と咄しして　芭蕉
かごと御供の間ひとぎるゝ　之道
半時ほど夜のかゝりたる月の入　丈草

火のばち〳〵と燃えてやゝ寒む　支考
軒口は蔦這ひのぼるふしん前　惟然
兄弟どもが兄をあがむる　野童
切立てゝ畠見渡す丹波やま　野明
そろ〳〵出す冬のうりもの　來
寄合は鯨のとれぬさたばかり　道
あかうすゝけしあんどんのさや　草
ちくとした風呂敷さげて戸を叩き　考
こそり〳〵とそよぐ黍の葉　然
砂川の淺くながるゝ夕月夜　童
露しとれども輕荷ふらつく　明
百遣ふ花の木陰の店屋もの　道
菜種鼈に西を見はらす　來
此の寺に楞嚴よめしこぞの春　草
獵場の公事のむづかしうなる　考
朝のうちむす子に馬をおはせやり　然
餅つきあげて汁粉もり出す　童

となみ山

はご板の寄せて一間にあまるほど　明
僧上いうてめかけたづぬる　道
茶小紋にろの十德のすんかりと　來
手船さつさと秋は來にけり　草
此の夕べ月を野にとり山にとり　考
しづが畠のなるこからつく　然
雨氣つく鉢の戻りのはら〳〵と　童
早う出來たる市の小屋懸　明
此のごろの化物ばなししづまりて　道
むこと舅のなほる挨拶　考
御局の里下りしては涙ぐみ　草
ぬつたはこより物のだし入れ　蕉
花の香の暫くやまぬ宮うつし　然
日がな一日鳥のさへづり　明

去來　四
浪化　一　芭蕉　二
之道　五　支考　五

丈草 五　惟然 五
野童 四　野明 五

百舌鳥なくやまだ明星の入殘り　嵐青
うす〳〵霜のみえわたるあき　其繼
木綿取る庭もお上もふさがりて　浪化
廿四五夜のほのくらき月　呂風
紫陽花に螢みだるゝ水の色　林紅
村をはなれて小家一軒　夕兆
寢處を不性や晝も敷きつめて　路健
手繰おろして間にかよふ也　青
入りちがへ〳〵ふる玉あられ　繼
みかんのかざのはんなりとする　化
金屏をたゝみよせたる秋の風　風
月代見えて月の出かぬる　紅
しづ〳〵と女房達を先へたて　兆

御國いんきよのめでたかりける　健
鶯の餘の鳥どもと鳴きまじり　青
うらゝに眠る長谷の所化寮　繼
杉の葉の花にならべば赤ばりて　化
沖より風の吹きまくりけり　風
いくはなも大名衆の鑓印　健
けふは隨分朝起をする　青
湯づき芋をかけちらしたる竹の垣　繼
顏の上氣にうつる白粉　化
こも僧に大事の手共所望して　紅
御齋過ぐればはら〳〵とたつ　化
一面に雪のふり込む水たまり　青
手のきはばかり殘る松明　健
封切に役の人足つめさせて　風
內のつとめにかゝる遊行派　繼
しん物の串柿おろす春の月　化
藪をはなれず人ちかな雉子　紅

本丸を打ちこして見る花の雲　繼
青い合羽のつゞくあめふり　化
鰯干を燒けば匂ひの鼻につき　紅
牛の債の銀をいたゞく　青
聞きしより宮司の娘てんばなり　兆
あそびのやうに前わたりくる　風

嵐青 六
其繼 六　浪化 七
呂風 五　林紅 五
夕兆 三　路健 四

賀刀奈美山撰集

風や釼を振ふ礪浪山　去來

有磯海序

はれの歌讀まむと思はゞ法輪に詣でゝ所がら薄を詠めよとをしへ、雪見の駒の手綱しづかにして、灞橋の邊りにあそべと示しけん、よくも風雅のわり符を合はせて、向上の關を越過ぎける事よ、然れどもつく〴〵おもふに、是等はみな文吏官士の上にして、たまさかに市塵を離るゝ便なるべし　平生身を風雲に吹きちらして、心を大虛にとゞめむ中には、限りもなき江山に足ふみのばして、行先毎の風物をあはれみ、雪ちるやほやの薄としをれ果てたる風情、いかでか其の法輪、灞橋にのみかたよらんや、されば芭蕉庵の主、年久しく官袴の身をもぬけて、しばじの苔の莚にも膝あたゝまる暇なく、所々に病床の曉を悲しみ、年々に衰老の歩みを費して、またとなく古びたる後姿には引きかへて、句ごとのあたらしみは、折々に人の唇を寒からしむ。一年越の幽蹤に杖を引きて、袂を山路のわたくし雨にしぼり、海岸孤絶の風吟、心を惱まされしかど、聞入るべき耳持ちたる木末も見えず、辰巳あがりの棹歌のみ聲々なれば、むなしく早稲の香の一句を留めて返られ侍りしを、年を經て、浪化風人の吟鬚を此道に撚られしより、あたりの浦山頭をもたげ、翠をうかべしかば、いつとなく此の句の風に移り浪に殘りて、えもいはれぬ趣の浮びけるにぞ、ひたすら其の境のたゞならざりしことを、をしみ感ぜられけるあまりに、穗を拾ひ葉をあつめて、終に此の集の根ざしとはなりぬ。この頃洛の去來をして、あらましを記せん事を蒙ふる。かゝる磯山陰をもたどり殘す方なくして、かゝることの葉をこそあまねく世の中にも聞えわたらば、猶ありとし國のくま〳〵には、いかなる章句をか傳へられ侍るにやと、思ひつゞくる果しもなく、ありそめぐりの杖のあとをしたはれけん筆の跡も、亦なつかしきにひかれて序。

懶窩埜衲丈草謾書

有磯海

あきのまき

早稲の香や分入るみぎは有そ海　芭蕉

此の句は元祿二年、奥羽の行脚に春夏を送り、秋風たつ頃三越ぢにかゝり、處々の風吟有りけるなかに、當所のほ句と申しつたへける。

芭蕉翁當國の行脚もしらず、良程を經て其の句をまうけ其の人を慕ふ

早稲の香や有そめぐりのつゑの跡　浪化

早稲の香や有その濱の放れ駒　丈草

わせのかやゝとひ出らるゝ庵の舟　曲翠

わせのかや田中の庵の人出入　支考

わせのかや田中を行けば弓と弦　惟然

先づ入るや山家の秋をわせの花　之道

行く人や門田のわせの籾つもり　正秀

田隣りへ早稲かるしきの日和哉　去來

早稲干すや人見え初むる山のあし　呂風

世のうさや早稲つみたるゝ舟の垢　嵐青

刈入れてうらやまれ鳧わせつくり　其繼

米になる早稲の祝ひや秋露入　林紅

早稲の田に刈りすかさるゝ小村哉　句空

山水やまだ初秋の香薷散　秋之坊

病中

秋の蠟かうべむや〳〵足せゝり　陽和

すか〳〵と西瓜切るなり穐のかぜ　芭蕉

七夕や秋をさだむるはじめの夜　去來

酒もりとなくて酒のむほしむかへ　丈草

聖靈も出てかりのよの旅寢かな　荒雀

露もるや聖靈棚の瓜なすび　越平

芭蕉翁の、いがへこし給ふを洛外に送りて

玉棚のはしごをのぼるすゞめ哉　小倉山僧

籠かきの佛見事や玉まつり　京閑夕

尼壽貞が、身まかりけるとき、て

數ならぬ身となおもひそ玉祭り　芭蕉

ならの片わきにやどりて

うら盆や家のうらとふはかまゐり　伊賀卓袋

三浦には九十三騎やはかまゐり　乙州

とぼしては風にけさるゝ切籠かな　彈鼠

村ごしに見せてやしのぶ高燈籠　美濃淵泉

明る夜をとらで仕舞ふや下手相撲　嵯峨野明

物ごとの御物ににたり相撲取　曲翠

勝まけをわすれて立つや相撲草　長崎錦水

電の山を出かぬる夜あけ哉　嵐青

電や門の茶による物がたり　大坂伽香

朝がほに野邊のちぎりや稲光り　嵯峨農爲有

あさがほや宵のかやりの燒ばこり　昌房

葬や梢に垣の這ひあまり　杉風

あさがほや水の引きたる塀のきは

おくれじと木槿の花のみだれ咲き　土芳

女郎花ゑのころ草になぶらるゝ　伊賀野童

荷の端もかげにとざすや女郎花　尾頭

駒買に出迎ふ野べのすゝき哉　野明

花薄たけをのび切るあきの雨　關河

歌枕見に行く人の從者にとらせける

花すゝき達者にありけ十文字　伊賀車來

比丘定　かまくらの女郎はすゝ竹の

つめたに織ものゝ手おほひ

うつの宮かさを

きりゝとめされて

秋のゝを舞臺に見たる薄かな　萬里女

世の中をかう見て行かん花野哉　胡故

鷄の尾につられけり初あらし　荆口

芭蕉庵のるす

主まつ春の用意やちり柳　桃隣

初かりや比良で追ひつく帆懸舟　木節

行くかりの友のつばさや魚の棚　惟然
とりかごの曙はやし秋の聲　越中 平水
木啄の入りまはりけりやぶの松　丈草
日當りにせゝくりながすうづら哉　正秀
馬夫にふみ立てられてなくうづら　臥高
粟の穂のひくに入りたるうづら哉　惟然
薪ともならでくちぬるかゞしかな　正秀
しる人になりてわかるゝかゞし哉　惟然

太宰府を通りけるに、女どものおほく集りて、稲こぎける中に申し遣しける

一夜さもゆるしてねせぬかゞし哉　長崎 卯七
かへし
うき人の袖引きやぶるかゞしかな　ふみ人しらず

奈良の鹿　二句　木辻に泊りて

門立のたもとくはゆる小鹿かな　其角
番の火を便りにねるや鹿のなり　探志
啼きはれて日ざしも疎し鹿のなり　丈草
ひざ見せてつくばふ鹿に紅葉哉　牛殘
かんせきに四足そろふる小鹿かな　彦根 汝村

西塔に宿し　二句

明星や尾上に消ゆるしかの聲　曲翠
ゐずまひをふつと直すや鹿のこゑ　蘇葉

秋日游小倉山同詠鹿角

振りあげて薄に立つや鹿の角　野明
諸角に月いたゞきて出鹿哉　來儿
鹿たてや角かたむけてしのび足　荒雀
たゝきあふ角見てなくや女鹿の聲　閑夕
飛ぶ鹿の角にもつるゝすゝきかな　爲有
臥處かや小萩にもるゝ鹿の角　去來
あつさをもしのぎつけゝり稲の花　大坂 游刀
禪門の後手さむし稲のはな　芝栢
出揃ふや稲の田づらのざんざぶり　尾州 露川

ながの月の末、大井川をわたりて

いつしかに稲を干す瀬や大井川　其角

狼のこの頃はやる晩稲かな　支考
稲村の鶴を見てをそすゞめ哉　孤屋
稲といふ名もきがゝりやいもが門　史邦

嵐蘭子をいたみて

なき出して米こぼしけりいな雀　智月
粟畑の奥まであかき入日かな　伊勢 空芽
暮待つて盛り見せけりそばの花　雨汀
狐火のしらけて過ぐやそばの花　荒雀
口取も咳氣ごゑなり駒むかへ　曲翠
京がさは皆駒曳のもどりなり　浪化
一番にかゝしをこかす野分哉　許六
みのむしの家くづしたる野分哉　句空
日より能うなるとてよるの野分哉　浪化
くずの葉にふとり〳〵て野分哉　小松 塵生
風の根をてり付けにけり秋の空　長崎 卯七
電の切れて殘るか三日の月　美濃 文鳥
待宵や流浪のうへの秋の雲　惟然

伊賀山中にありて

名月や花かと見えて綿ばたけ　芭蕉
明月に麓のきりや田のくもり　同
野山にもつかで晝から月の客　江戸 丈草
名月や野山をあしのつゞくまで　彦根書 太大
めいげつや馬より下るせたの橋　如元
名月やいかり打込むなみのくま　ゼ 正于
明月や舟にもたへず岩の上　長崎 青野
日でりにはあぶなげもなき月見哉　伊賀 買山
賑かな内を出て來る月見かな　利牛
名月や宵は女の聲ばかり　木節
明月や里の匂ひの青手柴　大津 木枝

不破の宿に寢て

目利してわるい宿とる月見かな　如行
明月や向ひの柿やでかさるゝ　去來
明月や家賃の外の坪のうち　野馬
飼猿も呼出す庭の月見かな　殘香

明月や片手に文と座頭の坊　左柳
名月にもたれて廻るはしら哉　野童
仕舞せて勝手はねせる月見哉　山蜂
明月やはら〳〵鶏の俄客　浪化
月影にはね鯉ねろふ獵師哉　江州國半村宮城氏
豆腐やらつとめて月の七ッおき　長崎牡年
おろ〳〵とむかへば月の御光かな　智月
やゝさむし早稲のひつぢの角芽立　野童
正秀が方へまかりけるに、物一つ謂ふ程もなく、枕引寄せて共にねにけり。
やゝふくるまゝ、おどろきて立ちかへるとて
宵の間をぐつとねてとる夜寒哉　臥高
かへし
あんどんをけして引込むよさむ哉　正秀
木枕にはなかみあつる夜寒かな　伊賀風麥
友ずれの舟にねつかぬ夜寒かな　丈草

生柴をちよろ〳〵させて砧かな　美濃千川
手の下にしるやいなごのちから足　岱水
秋もはやくるゝとしらず飛ぶ稲子　風國
すゞむしの啼き揃ひたる千ぐさ哉　加賀桃ヂ妖
すゞむしに客を通すや廻り縁　兕ヂ觥
燈明に虫もよらぬやひえの山　蘇葉
寒けれど穴にもなかずきり〴〵す　丈草
菜畠の一うるほひやあきの雨　李由
菊の香になくや山家の古上戸　北枝
煮木綿の雫さびしや菊の花　支考
椀かくのたらぬ住居やきくの花　李由
菊の花見に來てゐるかいしたゝき　京可南女
蒼浪にのぞみたえけりきくのきじ　嵐ヂ雪
九日に菊をたねとやしろ椿　待彼
松茸やふごをおろしてかほくらべ　爲有
天王寺に、遷座まし〳〵ける善光寺の如來を拜して
みだ頼むこよひになりぬ後の月　荆之江戸道
あるほどの節句仕舞うて月見哉　八桑
寒やみの炬燧もほしや後の月　斜嶺
蔦の葉や貝がらひろふ岩の間　臥高
彦山に詣で、同國五百らかんを拜み侍るとて、樵のかよひける紅葉谷といふところに入り、みちのほど五六里さらにほかの梢も見えず、同行に申し侍りける
秋の道一日かなしもみぢ谷　長崎田上尼
かへし
數十里は雲も燃えけり紅葉谷　同魯町
澁柿ややぶのうちから山の路　江戸呂風
晝中にやねからおつるふくべ哉　呂國
行く秋にきるほどもなき袷かな　杜年
行く秋をぶらりと蚊屋のつりて哉　史邦

冬

古郷に高い杉あり初しぐれ　荆口
いさかひに根もなき市の時雨哉　正秀
嵯峨山にあそびて
宇治木幡京へしぐれてかゝる雲　曲翠
住よしのま一しぐれとくゝるまで　之道
潮間に鮎死にかゝるしぐれかな　如行
やねふきの海をねぢむく時雨哉　丈草
日枝までものぼれ時雨のはしり舟　李由
牛馬のくさゝもなくて時雨かな　浪化
しぐるゝや紅の小袖を吹きかへし　去來
ふる〳〵と晝になりたる時雨かな　臥高
芋ほりに男はやりぬむら時雨　風國
門火たくたもとにやみのしぐれ哉　越中閑夕
秋露の持ちとほしたる時雨かな　平水
五器さらも手當りがたしけさの霜　露川

芭蕉翁の七日々々もうつり行くあはれさ、猶無名庵に寓居して、こゝちさへすぐれず、去來がもとへ申しつかはしける

朝霜や茶湯の後のくすり鍋　丈草

かへし

朝霜や人參つんで墓まゐり　去來
馬の息ほのかに寒し今朝の霜　民丁（ゼン）
霜のくさ裏かへし見るしとゞ哉　素龍（江戸）
おく霜に聲からしけり物狂ひ　舟（大坂）
雜水の名だてに寒し神送り　呑（越中）
此の里の牛の聲きけ神おくり　紅（越中）
こがらしや廊下のしたの村雀　木枝（越中）
こがらしや天井ばらぬ堂の内　夕兆
木枯の更行くかたや蠟たまり　林紅
　　其繼

芭蕉翁の送葬に逢ひ侍らんと、さがより木曾寺へいそぎて

こがらしの尻吹きすかす鞍かな　野明（彦根）
風や田より田にゆく水のおと　木導
こがらしや明星ぬれて三保の松　空芽
音もなし木の葉のあるゝ社家の庭　八桑
紅葉ちるやねの木の葉や石まじり　氷固（伊賀）
黄になりて落つるこのはや蝶の羽　野明
あらし山猿のつらうつ栗のいが　小五良（野明男十一歳）
どんぐりのころび合うたり窪溜り　牡年
馬しかる聲ちかれのゝあらし哉　曲翠
野はかれて砂にすり込むうづら哉　子荻（伊賀）
枯あしや何に折れたる汐干がた　佛馬（彦根）
丸ながら月よ嬉しき十夜哉　壽仙（越中）

小倉山常寂寺にて

御命講やあとの月には月の友　荒雀
開山忌となりは留主のいなり山　浪化
夷講我が料理してしらぬかほ　曲翠
大屋から先にしてとれえびす講　嵐青

芭蕉翁の難波にてやみ給ひぬときゝて伏見より夜舟さし下す

舟にねて荷物の間や冬ごもり　去來
そこ意にや廣間の番も冬籠　怨風（美濃）
炭の火に並ぶきんかのひかり哉　北枝
冬籠り炭一俵をちからかな　滄波（僧）
炭うりもつら出しかぬる嵐哉　故温（加賀）
口燒くや吹草祭りの酒のかん　竹戸（美濃）

洛にのぼりて、寺社をがみめぐりけるに、淨土の寺ごとにゝぎはしかりけるをかきのぞきて

口切や講肝煎を筆かしら　正秀
くち切やことし作りしふくべ共　木導（伊賀）
宿かへてまだ土くさき炬燵かな　我峯
埋火に根ぶとの痛む夜明かな　汝村
埋火やふとんを通す茶　匂ひ　許六（大津）
折りかへし敷くもかぶるも布團哉　海動

繕うてやつとさげたるふすまかな　杉風
雜水に琵琶きく軒の霰かな　芭蕉
ねこ鳥の山田にうつるあられかな　正秀
新田に水風呂ふるゝあられ哉　昌房
白丁の根に吹きまくるあられかな　支考
みぞるゝや鷄のぞくとまり時　平夾
はつ雪や人の機嫌はあさのうち　桃隣
初雪も飛石ほどの高さかな　斜嶺
はつ雪や人まつ市の松かゞり　之道

芭蕉翁の住捨て給ひける幻住庵を、あづかり侍りければ

はつ雪や去年も山で燒どうふ　靈椿（ゼン）
初雪や小坂にはやくすべりみち　配力（伊賀）
はつ雪や奥の洞屋の雪なだれ　李由
日枝一つ前に置きたる雪見哉　乙州
川こえて身ぶるひすごし雪の鹿　臥高
ひる通る岡部の鹿や雪あまり　魯町

雪の原ほつこりとなる木かげ哉　美濃　此筋
雪の夜も湯かた一つや瀧まうで　奈良　含粘
ゆきふりや堤にかゝる片いざり　大坂　舍羅
砂川の雪をちからやむまの沓　セ　駟石
から鮭の目づらも見えず舟の雪　正　秀
鴨の背にゆふ日やのこす雪のあし　セ　支幽
かりよする鷺かごや雪のあさ　惟　然
はたれ雪ひらりとしては三十三才　伊賀　祐甫
さゝ一葉ちりとなりけり雪の上　土　芳
ほつかりとわれて落ちけり笠の雪　伊勢　芦本
笠の雪いくひになりてをしまるゝ　卯　七
米貳俵おろしおきけり雪の中　彦根　胡風
雪空や片隅さびし牛のるす　丈　草
かはゆさや雪を負ねてかへる猫　セ　堀江氏妻
應々といへどたゝくや雪のかど　去　來
大雪や隣りのおきる聞合せ　浪　化
手水湯や流しそこなふ雪の上　セ　弩鳥

御築地のうちををがみ侍りけるに、如意が嶽よりいづる月の、南門にかゝりてかぎりなくめでたければ

から花に月雪こぼすとびらかな　嵐雪
竪横におらせて見ばや雪のいと　支考
雪うちや首から尻に瀧のいと　荒雀　羽州
御座そりや先に立たる道具持　不玉
あし代ややぐらの下のうすこほり　許六
茶の花や鶯の子のなきならひ　浪化
小坊主の上下きたり水仙花　尾州　素覽
寒菊のふるごものぞく日和哉　美濃　嵐舟
寒菊の隣りもありや生大根　許六
日の緣にあがる大根や一むしろ　臥高
すみがまや口付けかふる風のむこ　子珊
河づらや聲吹きながすあじろもり　其繼
河鮒洗ふ水のにごりや下河原　其角
粥をくはねばいなぬといへば
蠅ほどの物と思へど大師講　句空

岡崎村に住侍りけるころ

うしなはで落穗をたくや大師講　可南
肝煎の手をはなれけり冬の月　曲翠
かり金や友におくれて寒の入　風國
のら猫の聲もつきなや寒のうち　浪化

大名の參會し給ひけるを、二人物のかげよりかきのぞきて

正客の行儀くづさぬさむさ哉　野坡

とかんじけるを、其の大名にかはりてかへし

れき〳〵の水鼻たるゝ寒さ哉　利牛
すりこぎに取りつく老のさむさ哉　大坂　野明
手もださで机にむかふさむさかな　舍羅
しかめたる鏡のかほの寒さかな　伊賀　九節
いつそふにわめいてかへる寒さ哉　加賀　點吹

有磯海

宿して

ふじ垢離の聲高になる寒さ哉　杜年
をし鴨のつくべき水の見晴かな　林紅
筑摩江やたつべを覗くかいつぶり　汝村
白濱や千鳥あつまるあみのあと　セ　徽房
鹽燒の夜伽になくや濱千鳥　川支
客たてゝ跡の仕舞や小夜千どり　彦根　左次
あら鷹もその鷹匠もづきんかな　朱迪
狼のひよつと喰へし鉢たゝき　野童
雉子の尾にせばき師走の湯殿哉　蘿生
錢湯の朝かげきよき師走かな　伊賀　惟然
煤拂や二階をおろす古かはご　望翠
煤掃やかしらをつゝむみなとがみ　彦根　黄逸
煤掃のちりにかくるゝ數寄屋哉　史邦

春とゝもに旅立たんといふ人のもとにて

春かけて旅の萬やとし忘れ　惟然

牛の子の角や待つらんとし忘れ　荆口
節季候や夕日につゝく袋持　浪化

此の句は、夢中に句作り侍りけり。

盗人に逢うた夜も有り年のくれ　芭蕉

春

むつくりと岨の枯木も霞みけり　杉風
宿うらや風すさまじき梅の花　土芳
痩せはてゝ香にさく梅の思ひかな　去來
梅がゝのかみのそりねに留れかし　句空
梅が香にはづんで反るや折の鯛　臥高

伊賀の城下にうにと云ふものあり。わるくさき香なり。

香にゝほへうにほる岡の梅の花　芭蕉
梅がゝや風呂屋のみちの一たより　浪化（越中）
むめが香や雪かこひとる軒の晴　夕里（越中）
掃切つて梅がゝ遠きひろまかな　涼葉（江戸）
梅がゝや別當をおくる村の口　呂風
しかるべき松原も有りむめの花　如行
笠ぬぎて貌洗うたる野梅哉　素寛
手水場のまだほのくらし梅の花　嵐青
梅さくやまだひをむしの朝ちから　荆口
ちりしほやはせうる里の梅の花　許六
竹簀戸のあほちこぼつや梅のはな　丈草
ちる時をさわがぬむめの一重哉　桃隣
七種や唱歌ふくめる口のうち　北枝
ならべ置く膳になづなのひゞき哉　我峯
數々は女房のせわのなづなかな　風睡
鶯の小がろきなりやぶ椿　微房

別支考

鶯や尻をもためず暇ごひ　徒計（伊勢）
化粧する果やなき出す猫の戀　史邦
猫の戀風のおこらぬ斗りなり　風國
更くる夜を水のむ猫の別れかな　川支

背戸中はさえかへりけり田にし殼　丈草
是までが〳〵とてはるのゆき　支考
出替や酒の使の名のはじめ　健路（越中）
山鳥と小松の殘る燒野哉　木洞（伊賀）
やまどりの樵を化す雪間かな　支考
曉の雉子にさめけり猿のかほ　關河
やまうらの夕轟きやきじの聲　芽空（伊賀）
雉子なくやほろゝは消ゆる瀧の上　來車（ゼ）
子をつれて岩にふりむく雉子哉　光魚
つつくりと雉子つくなるや木瓜の花　露川

源平の古戰場をたづねて兵庫にいたる

便船や雲雀の聲も潮くもり　史邦
四五尺を雲に入るとや雲雀かご　千川
しら雲を瀧へけ落す雲雀哉　萬里
おそはるゝ夢のかしらの野駒鳥哉　卯七

いせより江府へまかるころ

雁の聲朧々と何百里　支考

有磯海

波先や勢田の水行く朧月　猿雖
朧夜に引くや網場のからす貝　乙州
野馬やあとのさびしき小大名　李由
馬の尾に陽炎ちるや晝はたご　惟然
かげろふや晝より前はあくのかす　其繼
陽炎やしたは流るゝ水ながら　平水
陽炎のもえて田にちる椿かな　曲翠

老境

九月より春まで花の老椿　風麥（伊賀）
見おとるや里に植るては山つばき　良品（伊賀）
文の添ふ椿は道でもげにけり　利牛
大佛やよこねもならず御入めつ　不玉
春雨やはたごもとはで奥坐敷　正秀
水風呂に茶をはこばせて春の雨　曲翠（ヒ）
鶺鴒の尾にたゝきだすつくしかな　麻三（ヒ）
置土やへぎおこしたる蕗の塔　子祐（江戸）
茄子なへもらはん雨のしめりかな　壺蛙（江戸）

ゐのしゝの藪ほりかへすのびる哉　野明

女のもとより、白魚を人のもとにおくるとて

白魚や道で氷らん飛鳥川　よみ人しらず

ときこえければ、其の人にかはりて

しら魚に透きても見えよ胸のくま　曲翠

しら魚のすべりなれたる碇かな　木導

身の春を飛んで見するや池の鯉　殘香

春かせや蝶のうかるゝ長廊下　伊賀林紅

はるかせの空に登るやくれ木つみ　伊賀配力

市中や馬にかけ行くいかのぼり　伊勢園友

花鳥の空にいそぐやいかのぼり　土芳

あひおひの姫とつるゝや雛あそび　越中宇白

煤けたる壁ほのくらし紙雛　伊賀雪芝

土器のはくもゆりこせもゝの花　其繼

鶏の相手もなしやもゝのはな　殘香

菜畠や境てりあふもゝの花　浪化

はれ物にさはる柳のしなへかな　芭蕉

狙の鱗をながすやなぎかな　曲翠

五六本よりてしだるゝ柳かな　去來

おしよせてたばぬる程の柳哉　探芝

待つ花に小さむい雨のあした哉　杉風

櫻をばなどねどころにせぬぞ、はなに

ねぬはるの鳥のこゝろよ

花にねぬ此もたぐひか鼠の巣　芭蕉

片尻は岩にかけけりはな莚　丈草

一本をくるり〳〵とはな見かな　浪化

花見にもたゝせぬ里の犬の聲　去來

ちかづきになりてくつろぐ花見哉　正秀

喰物に喰入るやつもはな見哉　古嵐蘭

寺中花

小坊主にしかられてのく花見哉　其繼

ぬり笠に花の末うつあらし哉　來几

あつらへの天氣也けり花ぐもり　史邦

物干や夜着かゝへ出て花の雲　岱水

花の雲世を一ばいの入日かな　卯七

鳥追うて花つかみ行くす鷹哉　恕風

かし家や花のさかりに門の錠　嵯峨風睡

花ちりて二日おられぬ野原哉　嵯峨農十二才

御封切る廊下の口やいとざくら　美濃市支老

東叡山

八ッ過の山のさくらや一しづみ　其角

日枝のやまにのぼりて

惡僧の弓はるあとや山ざくら　野明

立臼の木取て有るやゝま櫻　孤屋

野遊くれかゝりぬれど、猶獨り芝居はなれねば、從者をかへして申し遣しける

つれまつやとろ〳〵坂の薄すみれ　伊賀尾頭

かへし

盃の中にさかせんつぼすみれ　伊賀示蜂

有磯海

山吹や水そこ見こむ馬の上　伊賀石推

やまぶきに牛の尾をふる道もなし　伊賀荻子

五六反しさりて見るや松のふぢ　爲有

やはらかに濁るか藤の雨しづく　木枝

狼のによろりと出るや藤の花　荒雀

山ひとつ青みも見えぬつゝじ哉　文鳥

梅がえにこそ鶯は巣をくへ

もずの子をそだて揚ぐるや茨くろ　セゞ素鑁女

三月盡

何番の花でつくるや春の空　野童

夏

ほとゝぎすたれに渡さん川むかへ　丈草

時鳥二ッの橋を淀の景　惟然

ほとゝぎすせたは鰻のじまん哉　許六

頭のうへにむせぶや摩所の時鳥　支考

啼きころぶ曉あらんほとゝぎす　北枝

竹の子もひかれておそし時鳥　李由
麥めしで埒明く客やほとゝぎす　之道
木を立つて木にうつる間ぞ時鳥　壽仙

句空法師が、山寺に來りけるをとゝめて

豆腐こそなのらぬ山はほとゝぎす　浪化

かへし

ほとゝぎす山には鬼もなかりけり　句空
雀よりやすきすがたや衣がへ　雪芝
衣更雜巾ひとつ出來にけり　之道
鶯に糊ちらしけりひとへもの　呂風
竹の子や風呂やの土のあたゝまり　朱迪
たけの子や皮つきこはし甲武者　智月

許六が江戸よりやがてかへるべきと、いひこしけるに申しつかはしける。

竹の子のきほひや人を待つ日數　李由

かへし

竹の子の上る競ひや夜々の露　許六
頭をあげて咲かゝりけりけしの花　斜嶺
ぬけ道や垣ゆひ切つてけしの花　左次
むまにのる貌をり〳〵や若楓　卓袋
芍藥や廬路をひらけば奥の前　支老
草むせやところ〴〵に百合の花　伊勢宗比

人々川崎まで送りて、餞別の句を云ふ其のかへし。

麥の穂を便りにつかむ別れかな　芭蕉
麥秋は身の置きどころなかりけり　風蕎
疱瘡する兒も見えけり麥の秋　越中浪化
麥秋やとんばうとまる淵の上　和求
麥わらを取りかぶせけり地藏堂　平交
麥笛やふいて見による師子かしら　伊賀魚日
夕雲雀鳴きやむ麥のくろんぼふ　野童
一朝に降りしづめけり麥ほこり　平水

元祿七年久しく絶えたりける祭の、おこなはれけるを拜みて

醉顏に葵こぼるゝ匂ひかな　去來

奈良び萬僧供養に詣で、片ほとりに一夜をあかしけるに、明けて主につかはすべき料足もなければ、枕もとのから紙に、名處とゝもにふり捨て、のがれ出で侍りけり。

短夜や木賃もなさでことはしり　惟然
あやめ草茶師のよろこぶ節句哉　木枝

大井川水出で、島田塚本氏のもとにとどまりて

さみだれの空吹きおとせ大井川　芭蕉

うつのやまにて

さみだれや棹にふすぶる十團子　左柳
五月雨にもてあつかふはしご哉　江戸里東
眞白に鹿の星毛や五月あめ　楚舟
鉢々と留主の間めぐる田植かな　示蜂

有磯海

鳩の巣や螢もかりの足やすめ　荊口
たゞ一つやなに落ちたるほたる哉　越中少年鹿也
顏つきや藤の裏葉の螢とり　伊賀若蘇
水うちて跡にちらばふほたる哉　伊賀回鳬
蚊の中を軒つたひ行く螢かな　甫文

露川が等、さやまで道おくりしてとも

にかりねす

水鷄なくと人のいへばやさや泊り　芭蕉
くる音は麥わらかつぐ水鷄哉　伊賀玄虎
うしろより戻りかゝればなく水鷄　半殘
水札なくや懸浪したる岩の上　去來
よし鳥や日のさし廻る假の庵　伊賀錦水
片壁にはやためろふや蚊のやどり　蛙弓
蚊の聲の中にいさかふ夫婦かな　李由
蚊やり火や麥粉にむせる咳の音　許六

訪農家

行水の下たき立つるかやりかな　野明

かへし

客ともにつれてけぶたき蚊やり哉　爲有

妻をうしなひける頃

子をねせて頼む人なき蚊遣かな　膳所 忙玄
やう〳〵と涼しくなればかやり哉　不玉
轉寐(うたね)をこかし入れけり蚊屋の内　車來
鶉づかひの晝ねの床や蠅の聲　史邦
日のかげをおはへて蠅のざしき哉　長崎 近胃
苦しさや笹葉かけ行く牛の蠅　九節
町幅のいんきなりけり京の夏　孤屋
あたりから晝ねの客や夏の亭　桃隣
ざしきまでとゞかぬ夏の木陰哉　野坡
月代にゆめみて飛ぶか蟬のこゑ　正秀
時々に寢言がましやよるの蟬　句空
降るうちや蟬のなかねば物わすれ　子珊
あふ坂やいとゞせき合ふせみの聲　智月
空せみとなるまでなくを仕事哉　乙州

しがみつく力やのこす蟬のから　此筋
すゞしさや瓜ふむやみのあせ傳ひ　支考
しぶかみに瓜の匂ひや市あかり　夕兆
茶ぼこりの手をあらはばや眞桑瓜　正秀
水かへてこすほどすゞし眞桑瓜　游刀
水仙のとちほりかへすあつさ哉　雪芝(加賀)
馬の目のおろかにくるゝあつさ哉　牧童
蟹の手のひゝもかわらくあつさ哉　野明
白砂に雀あしひくあつさかな　遲望
立合うて牛うる軒のあつさ哉　探芝
暑き日や馬屋のなかの糠俵　恕風
上下とひねる枕のあつさかな　魚日(大垣)
ゆつくりとねたるうへにも暑さ哉　遊糸
そろばんも枕數なり竹婦人　卯七(伊賀澤)
夕立に吹きちるものや竹の皮　雉(加賀)
白雨や山伏里に入りかゝる　萬乎
ゆふ立やろぢより出づる水の穴　望翠

麥かりし夜は猶うすし夏の月　越中 山紫
われ鐘のひゞきもあつし夏の月　北枝
暑き夜や井戸に水なき夏の月　荻子(イガ)
かやの手に馬追なくや夏の月　裾道
夕貌やあるじのしよさの懐かしや　我峯
ゆふがほをくゝり廻るや夏ざしき　臥高
夕顔にかんべうむいて遊びけり　芭蕉
日ざかりの花やすゞしき雪の下　呑舟(伊賀)
をさないに花むしらるゝけまん哉　一鶯
くらがりにいちご喰ひけり草枕　史邦
なつもゝや一構つくにがご竹　空芽
礒ぎはをやまもゝ舟の日和哉　惟然

淀川畫舟

浦々のうしろに實なき榎かな　風蕎
からむしのあとからそのの二葉哉　浪化
種麻やぐるりに殘るやけ畠　同
やねふきの額しろしや麻頭巾　壽仙

おもだかも田草の數にひかれけり　如行
川狩や村は御藏の藪の腰　嵐青
馬柄杓を岩に割込む清水かな　野徑
先づ馬の沓しめし行く清水かな　猿雖
我があとへ猪口立ちよる清水哉　許六

老情

暮しばし緣までにじる涼み哉　祐甫(イガ)
葛布のきごゝろしれや夕すゞみ　買山(江戸)
嫁つれて涼むやせどのま木の上　龜水
とぎ立つる庖丁すゞしすのこ緣　其繼
すゞしさや折つて見せたる生鰯　臥高
風すゞし膳出しかゝるたな鰹　洞木
出嫌のおされて行くや夕すゞみ　仙枝
涼しさやうかく行けば行止まり　里東
里の子の乘物のぞくすゞみかな　萬乎
砂川をわたりてあそぶ涼み哉　土芳
すゞしさや水の流れの畠なり　蘇葉

涼しさや八人代の田の青み　荒雀
涼しさの心もとなしつたうるゝ　丈草

紀の藤代を通りける頃、此處に三郎重家の末今にありと聞きおよびぬれば、道より少し山沿に尋ね入り侍りしに、門ついぢ押廻し、飼うたる馬、みがきたる矢の根たてかざりて、いみじきものゝふ也。又庭にいにしへの弓懸松として古木など侍りけり

藤代やこひしき門に立ちすゞみ　去來
暮まつや白地扇の風あたり　良品
町禮や袴のひもにあふぎさす　曲翠
直さまと書きなぐりたる扇哉　望翠
水無月をきはだつ雲のたかね哉　靈椿
八雲たつ此の嶮謨を雲のみね　其角

ありそ海集撰りたまひける時、入句ども書集めまゐらせけるにそへて祝す。

鷲の子や野分にふとる有そ海　去來

元祿八乙亥歳花老上旬

正竹書焉

芭蕉庵小文庫

木曾の情雪や生えぬく春の草、と申されける言の葉のむなしからずしてかの塚に塚をならべて、風雅を比惠日良の雪にのこしたまひぬ。さるをむさし野のふるき庵ちかき長溪寺の禪師は、亡師としごろむつびかたらはれければ、例の杉風かの寺にひとつの塚をつきて、さらに宗祇のやどりかなと書きおかれける一帋を壺中に納め、此塚のあるじとなせり。たれ〳〵もかれに志をあはせて、情をはこび句をになふ。猶師の恩をしたふにたらず。霜落葉かきのけて、かたのごとくなる石牌をたて、霜がれの芭蕉をうゑし發句塚、と杉子がなげきそめしより、愁腸なほあらたまりて。

日の影のかなしく寒し發句塚　史邦

小文庫

冬之部

島田の宿にて

宿かして名をなのらする時雨哉　ばせを

旅宿

はつ時雨戸あけてみれば反歩也　山店
米河岸できくや穐田のはつ時雨　嵐竹
雷おつる松はかれ野の初しぐれ　丈草
食どきにさしあふ村のしぐれ哉　去來
板壁や馬の寢かぬる小夜しぐれ　史邦

雜冬

冬空やすがもは江戸の北はづれ　嵐竹
ほゝづきやとけその山の九十月　史邦
城山に雉子出でけり小六月　山店
青き穂に千鳥啼くなりひつぢ稻　史邦

寒菊に野武士も住むかわに堅田　同
薫物のもれてやにほふ枇杷の花　同
下刈の藪きれいなりつはの花　養浩

大通庵の主道圓居士芳名をきくことしたしきまゝに、まみえむことをちぎりて、つひにその日をまたず。初冬一夜の霜と降りぬ。けふはなほひとめぐりにあたれりといふをきゝて

其のかたち見ばや枯木の杖の長　芭蕉

舊庵　師の像に謁す

芭蕉會と申し初めけり像の前　史邦
達磨會やもつさう食の一文字　同
水風呂をふるまはれたる十夜かな　同
御命講や油のやうな酒五升　ばせを
上人の鼻にはくおけ御命講　史邦
惠比壽講酢賣にはかまきせける　芭蕉
ゑびす講あひるも鴨に成りにけり　利合

まづ鯛と筆を立てけり惠比壽講　史邦
玉あられ百人前ぞおとりこし　山店
御取越內儀の客が一ざしき　嵐竹
檜物屋も間にあはせけりお取越　養浩
おとりこしまづ左座は松の坊　史邦
ひだるさに馴れて能く寢る霜夜哉　惟然
ころ〳〵と虫もむらつく霜夜哉　種文
霜腹の寢ざめ〳〵や鴨のむれ　丈草

ふるき世を忍びて

霜の後なでしこ咲ける火桶かな　芭蕉
炬燵より寢に行く頃は夜中かな　雪芝

正秀亭當座

革羽織とりかくされて炬燵哉　史邦
風のあたりどころやこぶ柳　丈草
こがらしの藪にとゞまる小家哉　殘香
風や窓にふき込むみそさゞい　蘭芳
冬川や木の葉は黑き岩の間　惟然

くむ潮にころび入るべき生海鼠哉　梨雪
雁鴨やわちがひめぐる水けぶり　蘇人
毛衣につゝみてぬくし鴨の足　芭蕉
雞の片脚づゝやふゆごもり　丈草
金屏の松もふるさよ冬ごもり　芭蕉
小屏風に茶を挽きかゝる寒さ哉　斜嶺

旅宿

大名の寢間にもねたる寒さ哉　許六
猫の食干からびてあるさむさかな　山店
夜神樂に齒も喰ひしめぬ寒さ哉　史邦
菜をきざむ廣敷寒し吹きどほし　支老
留主のまにあれたる神の落葉哉　芭蕉
甲を干すあたゝかけさや胴紙子　史邦
子祭や梅まつ宿の赤豆食　山店
子祭に目貫ほり出す自慢哉　史邦
餅蜜柑吹革まつりやつかみ取り　下風
幽靈に水のませたか鉢たゝき　智月

婬入の門も過ぎけりはったゝき　許六
はつ雪やかけかゝりたる橋の上　芭蕉
初雪やひじり小僧の笈の色　同
雪ごとにうつばりたわむ住居かな　同
鷦鷯家はとぎるゝはたれゆき　如行
狼の聲そろふなり雪のくれ　丈草

打出濱眺望

嶽々や鴉とりまはす雪けぶり　史邦
納豆するとぎれやみねの雪起　丈草
長尻の客もたゝれしみぞれ哉　史邦
さつ〳〵と荻も氷もあられかな　同
冬梅のひとつふたつや鳥の聲　土芳
水仙の花の高さの日かげかな　智月
はち卷や穴熊うちの九寸五分　史邦
あな熊の寝首かいても手柄かな　山店
丹波路やあなぐまうちも惡右衞門　嵐竹
月花の愚に針立てむ寒の入　芭蕉
寒聲や山伏村の長づゝみ　仙杖
一雨や相場のかはる事納め　嵐竹
身代も籠でしれけりことをさめ　史邦
金公事もつく〴〵にして事納め　山店
せつかれて年忘れするきげんかな　芭蕉
魚鳥の心はしらずとしわすれ　同
さかもりや一雫にて年わすれ　智月
うちこぼすさゝげも市の師走哉　正秀
蛤のいけるかひあれ年の暮　芭蕉
さかやきや咳氣をなぐる年の暮　探志
客人の心になりてとしのくれ　乙州
酢がとれて蜜柑も年の名殘哉　之道
いせえびを取りあはせけり衣配り　史邦
餅春に小腹たてけり瘧疽やみ　同

石臼之讃

市中に在りて俗塵によごれぬ物は、げにその始めをよくするよりもその終りをとぐる事はかたし。商山竹林の猛士も、なほ出て仕へ、寛平華山の上皇も終にたしかならず。たま〳〵是を見るに、唯石臼のひとつのみ、聖一國師は是をもつて肉身をやしなひ法身をしる、民家にはまた麥刈りそむる頃よりも、籾こぎ落す冬に至る迄、片時もよそにする事なし。其のたかき事を論ずれば、役の優婆塞の庵の中にかくれて、彼の類ひを道引く功の上に立つべし。上と下とふたつなるは、力たらざる者のために專らなれば也。不斷土間に在りて莚より外を見ぬは、謙に居る事の調へるにあらずや、かりにも黄姉の手にとられざることの、有難きことを深くさぐりしるべし。目なだらかなる時は、かますを荷ふ老翁のいで來りてこつ〳〵とする音すみて、のちは李札が劒を塚にかくる事をはづべし。名をぬすむ盜人はあれども、石うすをぬすむ盜人はなし。またひとの心をみださゞるの至りならずや。月さしのぼる夕顔の陰に、ひとりはおどろの髪をまぐね、ひとりは佛のまねをする、あたまなりにて苦しきことを覺えず。挽きまはす力に其の飢をたすくるは、文王の始めに仕へ給へるに事たがはず、やゝいま樣のむづかしき歌のふしにかまはず、聲も唱歌も古代のまゝにして、枝もさかゆる葉もしげると、しばぶきがちにわなゝかれたるぞをかしきや。

机銘

間なる時はひぢをかけて、嗒焉吹噓の氣をやしなふ。しづかなるときは書を紐どいて聖意賢才の精神をさぐり。靜かなるときは筆をとりて義素の方

寸に入る。たくみなすおしまづき、一物三用をたすく、高さ八寸おもて二尺、兩脚にあめつちのふたつの卦を彫にして、潛龍牝馬の貞に習ふ。是をあげて一用とせむや、また二用とせんや。

應蘭子求　　元祿仲冬　芭蕉書

對門人僧

是や世の煤に染まらぬ古合子　芭蕉

煤掃之說

明ぼのゝ空より、物のはた〳〵と聞ゆるは、疊をたゝく音なるべし。けふは師走の十三日、すゝはきのことぶき也。げにや雲井の儀式、九重の町の御法は嘉例ある事にして、唯なみ〳〵の人の煤はく體こそいと面白けれ。おの〳〵門さしこめて、奥のひと間を屏風にかこひなし、火鉢に茶釜をかけて、嫗が帷子の上張、爪さき見えたる足袋もいとさむく、冬の日かげのはやく晝になりゆき、庭の隅、調度共とりちらしたる中に、持佛のうしろむきたるぞめには立つなれ、家の童の縁の破れ、すのこの下をのぞきまはるは、なにをひろふにやとあやし、味噌とよばる大男の、袋かぶり裝きたるもめづらかに、米櫃のサンうちつけ、俎しらげ、行燈張替へて、たつくり鱠、あさつけのかをり花やかに、かみしもの膳するゑならべたるに、ほどなく暮れて高いびきとはなりぬ。

すゝはきや暮行く宿は高鼾　ばせを
なぐれて雪のかゝるから竹　山店
扶持かたのはし米取りに人やりて　史邦
またどろ〳〵とかみなりがなる　嵐竹
風雲のはしる間を月のかげ　養浩

毛蓼のはなのみゆる塀うら　執筆
雁わたるむかひは平野久法寺　店邦
使にやれば味噌つかせける　邦竹
普請場でこしらへてくる火吹竹　竹浩
よそほど風のあてぬ山ぎは　浩邦
松苗のはえ揃うたる一里鐘　邦店
田うゑの留主に煩うて居る　店浩
夏の月いらぬ葛籠は梁へあげ　浩竹
たゝきながして雨はるゝなり　竹店
篠原や黑ばね山もうちつゞき　店邦
馬すりかへてしらぬ顏する　邦竹
はつ花に酒毒が出來て取りかぶり　竹浩
年子まびけば菫みだるゝ　浩邦
御築地の雪もきえ行く新在家　邦店
敷いて垢かく水風呂のふた　店浩
兩方へあかりみせたる手行燈　浩竹
そよ〳〵草のなびく日の暮　竹店
蠻人のいつか後に立つて居る　店邦
文引きさいてほゝばりにけり　邦竹
盆前は貳歩にもつけぬ小脇差　竹浩
隱れて京の月を見るなり　浩邦
槿のくづれたうへを踏みあるき　邦店
籧はたけば鷄がよる　店浩
雲ぎれの山の端うすく寒くらし　浩竹
千日谷の銀杏冬たつ　竹店
跡さきを木戸でしめたる組屋敷　店邦
追々醫者を呼びにやらるゝ　邦竹
いら〳〵と星のいらつく横雲に　竹店
野水たゝふる椿新田　店浩
藪岸にほそき櫻の咲出でゝ　浩邦
夕日の筋に胡蝶むらがる　邦店
分別の底たゝきけり年の暮　芭蕉

小文庫

春之部

年々や猿にきせたる猿の面　芭蕉

鳰の海邊に年をこえて、三日鬢を氷す

大津繪の筆のはじめやなに佛　同

ふたみの机硯箱は翁ふかくいとをしみてみづから繪かき讃したまひぬ。又一とせ洛のぼりに、いささらば雪見に轉ぶ所迄と興じ申されける、木曾の檜笠、越の菅蓑に、桑の杖つきたる自畫の像、此のしなゝはさぬる年、花洛の我が五雨亭に幽居し給ふ時、一所不住のかたみとて予に下し給はりぬ。されば師のなつかしき折々、あるは月花に情おこる時は、是をかけこれをすゑ、ひたすら生前のあらましして、句の味をうかゞふのみ、睦月七日は、ことにわか菜のあつものをすゝめて、例よりもかなしく、かしこまる袖になみだこぼれて

折りそふる梅のからびや粥はつを　史邦

若菜つまん三浦の大助百六つ　嵐蘭

一かぶの牡丹はさむき若菜かな　尾頭

根小屋までうち下したるなづな哉　史邦

しろ水の押しわけて行く根芹哉　山店

一村を鼓でよぶや具足餅　史邦

いかなる事にやありけむ、去來子へつかはすと有り

菎蒻のさしみもすこし梅の花　ばせを

寺の名やわすれて梅の花ざかり　李由

うす雪や梅の際まで下駄のあと　魚日

むら〳〵と菰槌越やむめの花　史邦

鞍馬金銀の隠士が跡尋ね兼て

むめが香やたが賣喰の火打石　同

白梅やたしかな家もなきあたり　千川

山崎にて

しら梅や木食寺の料理人　史邦

はれ物に柳のさはるしなへかな　芭蕉

此の句、浪化子のありそ海に、さはる柳のしなへかなと、去來が書誤りて入集しはべるとて、常に此のことをくやみぬるまゝ、このついでとなしぬ。

春水滿二四澤一の氣色を

川柳水もうごかず柴葉口　山店

青柳の路次かまへなり鎗つかひ　嵐竹

川越して帶ときによる柳かな　岱水

泥龜に人たかりする柳かな　可長

青柳とともに動くや近かつゑ　史邦

馬乘の下くゞり行く柳かな　里倫

春風に吹出されけり水の胡蘆　去來

いかあぐる風に飜すやいもはしか　白良

草先や追鳥狩のむさうわな　史邦

苦清水

凍とけて筆に汲干す清水哉　ばせを

おなじく

はる雨の木下にかゝる雫かな　同

鞍馬

僧正が谷をすべれば餘寒也　野童

黑ぼこの松のそだちや若緑　土芳

呼出しに來てはうかすや猫の妻　去來

鎌倉も別のことなし猫の戀　南鄰

こがれ死ぬためしもきかず猫の妻　史邦

南良こえ

春なれや名もなき山の朝がすみ　ばせを

二月堂取水

水とりや氷の僧の沓のおと　同

味噌まめの煮ゆるにほひや朧月　史邦

蛇くふときけばおそろし雉子の聲　芭蕉

多田の御廟に詣ず

いきほひもさすがに神の雉子かな　史邦

栖去之辨　　ばせを

（年號いづれの年にやしらず）

こゝかしこうかれありきて、橘町といふところに冬ごもりして、睦月きさらぎになりぬ。風雅もよしや是までにして、口をとぢむとすれば、風情胸中をさそひて物のちらめくや、風雅の魔心なるべし。なほ放下して栖を去り、腰にたゞ百錢をたくはえて、柱杖一鉢に命を結ふなし得たり、風情終に菰をかぶらんとは、

雲雀より上にやすらふ峠かな　芭蕉

呂丸追悼三句

雲雀なく聲のとゞかぬ名ごり哉　會覺

ふみきやす雪も名殘や野邊の供　去來

野おくりや膝がくつきて朧月　史邦

伊賀新大佛之記

伊賀の國阿波の庄に新大佛といふあり。此のところは、ならの都東大寺のひじり、俊乘上人の舊跡なり。ことし舊里に年をこえて、舊友宗七宗無ひとりふたりさそひ物して、かの地に至る。仁王門撞樓のあとは枯れたる草の底にかくれて、松ものいはゞ事とはむ石居ばかりすみれのみしてと云ひけむもかゝるけしきに似たらむ。なほ分けいりて蓮花臺獅子の座なんどはいまだ苔のあとをのこせり。御佛はしりへなる岩窟にたゝまれて、霜に朽ち苔に埋もれて、わづかに見えさせ給ふに、御くし斗りはいまだつゝがもなく、上人の御影をあがめ置きたる草堂のかたはらに、安置したり。誠にこゝらの人の力をついやし、上人の貴願いたづらになり侍ることもかなしく、涙もおちて談もなくむなしき石臺にぬかづきて

丈六に陽炎高し石の上　ばせを

賀茂にあそびて

照りつゞく日やかげろふの芝移り　史邦

しこまれて苗代馬のあゆみ哉　山店

千刈の田をかへすなり難波人　一鶯

川淀や泡を休むる芦の角　猿雖

物よわき草の座取やばるの雨　荆口

はる雨や渾雞あがる臺所　游刀

引鳥の中にまじるや田螺取　支老

咲きみだす桃の中よりはつ櫻　芭蕉

三月三日堺の海邊に遊びて　二句

胸透きて須磨をのみこむ汐干哉　史邦

のぼり帆の淡路はなれぬ鹽干哉　去來

鹿島には杉菜のはゆる汐干哉　山店

すみ吉に詣ず

一日の日を春かせや松のひま　史邦

攝州甲山

上代の春日も光れかぶと山　同

出替や哀れすゝむる奉加帳　許六

下品の情

あさつきやうちとけ安き片結び　史邦

下々もみな居なじみてよめが萩　山店

馬よけや畑の入なる桃柳　北鯤

梅つばき是にも客し屋敷守　山店

藪に居て挽ききらるゝな赤椿　同

旅行

内庭を見せかけにけり白つゝじ　嵐竹

堀起すつゝじのかぶや蟻のより　雪芝

熨斗目着て來る人もなし菫草　山店

難波にて

海棠やお八つうち出す堂のまへ　史邦

僧丈草に別る

慇懃に成りしわかれや藤の陰　同

萬日の小屋も見えけり百千鳥　嵐竹

呼子鳥なくか碓氷の盤根石　史邦

西行像讃

すてはてゝ身はなき物とおもへども

ゆきのふる日は
さむくこそあれ花の降る日はうかれこそすれ　ばせを

芳　野

花ざかり山は日ごろのあさぼらけ　同
損にして食たかせけり花曇り　山店
花雪とちらすや銭のあゐの山　去來
ちか道や木のまた通る花ざかり　洞木
村中へ咲下したるさくらかな　養浩
景清も花見の座には七兵衛　芭蕉
しらあやに金王櫻さきにけり　史邦
藪陰に衞門櫻のはなみかな　山店

三月盡

赤猫のうるさくなりぬ春の暮　山店
新宿は麥に穂がつく春の暮　史邦
水風呂の置所なし。はるのくれ　嵐竹

三吟

櫻見る袖ちひさしや田舍染　嵐竹
麥の中からあひる啼きだす　史邦
うら坐敷山をうしろに春くれて　山店
手に〳〵膳を持つてたゝるゝ　竹
ひつそりと夜半の月のさびかへり　邦
堤の雁のさきさかりなる　店
八朔のさかやき剃りにまはるらん　竹
御門徒寺のすまふつぶるゝ　邦
穉蟬のいりつく樣に鳴く時ぞ　店
すべつた馬を引きおこしける　竹
若黨に内證きかする戀もあり　邦
汁も鮗もいなだなるらん　店
はつ雪の風にはづれてひら〳〵と　竹
お堀の月のさえわたるかな　邦
あみ笠を腰にはさみて丹波道　店
六帖じきをふたりしてかる　竹

花のかげ緣日ばかり掃きたてゝ　店
躑躅くづるゝ赤土の谷　邦
ひとつでも皿の揃はぬ小瀧鯛　竹
寅背中とてけふも灸せず　店
暮れかけて啼盛りたるほとゝぎす　邦
山も御茶屋も青葉なりけり　竹
本堂を右へまはれば反歩にて　店
ころぶといなや狐はなるゝ　邦
十五夜を吹きちらしたる西の空　竹
稻こす水に祠うきたつ　店
竹藪の鰐上戸うらがれて　邦
又たゝくやら泣きごゑがする　竹
一はしり行きて見て來る朝肴　店
八專あきて晴れわたるなり　邦
庭せゝる松や小笹のうゑ所　竹
返事にそへてかへすぬり臺　店
構はねばしらけて通る鉦たゝき　邦
どこでもおそき町の朝食　竹
景のよき山はつらりと花ちりて　邦
帋鳶のきれ行く梅若の森　店
花の雲鐘は上野か淺草か　芭蕉

小文庫

夏之部

文字摺石

忍ぶの郡しのぶの里とかや、文字ずりの名殘として方二間ばかりなる石あり。此の石は、むかし女のおもひに石になりて、其の面に文字ありとかや、山藍摺りみだるゝゆゑに、戀によせておほくよめり。いまは谷合に埋もれて、石の面は下さまになりたれば、させる風情もみえずはべれども、さすがにむかしおぼえてなつかしければ

早苗とる手もとや昔し忍ずり　ばせを

前書きれて見えず

一つ脱ぎてせなに負ひけり衣がへ　同

からたちも刈揃へたり佛生會　山店

灌佛や釋迦と提婆は徒弟どし　之道

落柿舍閑居（嵯峨日記に見えたり）

ほとゝぎす大竹藪をもる月夜　ばせを

○郭公鳴くや湖水のさゝにごり　丈草

夕やけやきら〳〵ととぶ時鳥　山店

ほとゝぎすまつ〳〵宵の丸寢にて　岱水

美濃にて

紅麥に鳴きやうきかんほとゝぎす　史邦

あかし

ほとゝぎすきえ行く方や島ひとつ　ばせを

す　ま

月を見ても物たらはずや須磨の夏　同

佛頂禪師の庵をたゝく

木つゝきも庵は破らず夏木立　同

葉ざくらや千體佛のみがきばえ　史邦

槇の戸をうつぶせにして葉より哉　嵐竹

太鼓にてほいろを返す葉撰哉　史邦

狹莚のへり踏みあらく葉より哉　山店

藪畔や穗麥にとゞくふぢの花　荆口

かみなりの鳴らで曇りし梧の花　史邦

山樫やわか葉のくさき一しきり　北鯤

子にせうといへば逃げこむふき籠　乙州

よせ馬の土手のあちらや紙のぼり　嵐竹

乙州餞別

花麥の秋はあふみとおもへども　山店

落柿舍閑居（嵯峨日記にみえたり）

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間　ばせを

さがにて

おのづから梧にならふやことし竹　史邦

○五月雨や蠶わづらふ桑のはた　芭蕉

無病さや物うちくうて五月雨　史邦

さきだちのふみ込む音やさつき闇　山店

川べりに狐火立つやついりばれ　史邦

箱崎や岩たて雲をつゆあがり　養浩

只おかぬ麥のぐるりや紅の花　山店

間不容髮といふ事を

ほとゝぎす起合せたり聲の中　同

おなじく

雲すきや尾越の鹿のねらひ狩　嵐竹

同じく

草むらや蠅取蜘の身づくろひ　史邦

○蘭の花にひた〳〵水の濁り哉　此筋

○一田づゝ行きめぐりてや水の音　北枝

虫の喰ふ夏菜とぼしや寺畠　荆口

卯月のはじめ庵に歸りて旅のつかれを

はらす程に

なつ衣いまだ虱を取りつくさず　ばせを

わが宿は蚊のちひさきを馳走也　同

みな月の竹の子うれし竹生島　去來

六月をしづめてさくや雪の下　東以

正成之像

鐵肝石心此人之情

なでし子にかゝるなみだや楠の露　亡ばせを
撫子にふんどし干すや川あがり　嵐蘭
ひるがほに虱のこすや鳶のあと　同
五六十海老つひやして鮠一つ　之道
どろ〳〵とすはや夕だつ鈴鹿山　史邦
ゆふだちや蓮の葉にふる池のくま　木白
蓮の花ちるや八島のみだれ口　史邦
澤潟をうなぎの濁す澤邊かな　嵐蘭
麻の葉のあからむすゑや雲の峯　史邦
三日月のいつか出て居る櫻麻　嵐竹
麻臥して風すぢとほす小家かな　斜嶺
蠅打になるゝ雀の子飼かな　河瓢
日の勢やくるしくうごく百合の花　素繪
鬼百合やりんとひらいて蟬のこゑ　史邦
水仙の種を干す日やせみの聲　嵐竹
森の蟬すゞしきこゑや暑き聲　乙州

鴨の子の芦根はなれぬあつさ哉　桐奚

甲斐郡内をすぎて

道ばたにまゆ干すかざのあつさ哉　許六
あさがほの二葉にうくるあつさ哉　去來
煤下る日盛りあつし臺所　恕風

旅行

痩馬の鞍つぼあつし藁一把　史邦
牢人して東武へ下る日、粟田口にて
すゞかけを着ぬばかりなる暑さ哉　同
すゞしさや先づ蛤の口の砂　句空

丈山之像謁　二句

風かをる羽織は襟もつくろはず　芭蕉
さかさまに扇をかけてまた涼し　丈草
琴引きて老いをがませよ夕すゞみ　智月
箒木に日かげが出來てすゞみかな　山店
石竹に雀すゞしや砂むぐり　史邦

ふたみ

あら波やあれて涼しき入日影　同

鴻之臺眺望

切岸や卯の花下し一文字　山店
安房上總うしろに當てゝ夏木立　嵐竹
うき雲や左右にわかれて青嵐　史邦

同吊古戰場

山は刀根のながれより生れて、營を南にみそなはす。未申に河水をまうけて是がためにそばたち、山のしりへを斷ちてなほ壘をかさねたり。さばかりのものゝふの、おほく此のところにうしなはれて、やゝ百の秋の露むすび霜うつれども、なにがし誰某と時めきのゝしれる名は、さすが人の耳にのこりて、むなしからぬぞせめていちじるき。松櫻よきほどにしげり、うのはなのくもりあひたる空に、時鳥のこゑもたまぎるゝ斗りなれば、魂魄の胸もはるゝにや、いとゞ哀れに覺えて

幽靈のあそび所や花うつぎ　山店
いかづちの荒れてひさしき夏野哉　史邦

黑雲の折り〳〵かゝる青葉哉　嵐竹

首塚

首塚やとげに咲きたる花むばら　史邦
首塚やひるは螢の草がくれ　嵐竹
首塚や人ものばらぬ夏わらび　山店

眞間寺

眞間山や茄子の畔もむかし繩　嵐竹
なつ山や麥も櫻も寺のぶん　山店
さびしさに涼しき眞間の寺構へ　史邦

同所楓

日蓮の歌にも見えず若楓　史邦
もの喰ふに茶莚かるや若楓　嵐竹
大木やはづれ〳〵はわか楓　山店

同繼橋

繼橋の田うゑや寺の男ども　嵐竹
つぎ橋や田草もとらぬそゞろ水　山店
つぎばしのあとは水田の水雞哉　史邦

歸路の吟

ほとゝぎす水戸海道も夜船也　山店
なつ空や精をも出さず渡し守　史邦
舟梁もまくらにならずなつ衣　嵐竹
丹波から使もなくて啼く鴉　蕉
節季が來れど利あげさへせぬ　店
雪に出て土器賣を追ひちらし　蕉
たゞ原中に月ぞさえける　店
神鳴のひつかりとして沙汰もなき　蕉
しやくりがやんで氣がかるうなる　店
奥の院おづ〳〵花をさしのぞき　蕉
けさからひとつ鶯のなく　店
春の日に產屋の伽のつつくりと　同
かはり〴〵や湯漬くふらん　蕉
いそがしくみな股立を取並び　店
目つらもあかず霰ふるなり　蕉
からびたる櫟林に日がくれて　店
佛の木地をつゝむ糸だて　蕉
ころ〳〵と臼挽出せばほとゝぎす　店
そゞろに草のはゆる竹緣　蕉
羽二重の赤ばるまでに物おもひ　店

餞別

新麥はわざとすゝめぬ首途かな　山店
また相蚊屋の空はるかなり　ばせを
馬時の過ぎて淋しき牧の野に　同
四五千石のまつのたて山　店
方々へ醫者を引きずる暮の月　同
躍の作法たれもおぼえず　蕉
盆過ぎの頃から寺の普請して　同
ほしがる者に菊をやらるゝ　店
蓬生に繼をやめたる男ぶり　蕉
濕のふきどのかゆき南氣　店
わかい時から神せゝりする　蕉
難をまたぬすまれしけさの月　店
畠はあれて山くずのはな　蕉
日光へたんから下す秋のころ　店
くれ〴〵たのむ弟の事　蕉
ゆふかぜに蒲生の家も敗れ行き　同
物にせばやとさする天目　店
花のあるうちは野山をぶらつきて　同
藤くれかゝる黑谷のみち　蕉

甲斐にて

行く駒の麥になぐさむやどりかな　ばせを

小文庫

穐之部

初秋やたゝみながらの蚊屋の夜着　ばせを

吊初秋七日雨星

元祿六文月七日の夜、風雲天にみち白浪銀河の岸をひたして、烏鵲も橋杭をながし、一葉梶をふきをるけしき、二星も屋形をうしなふべし。今宵なほ只に過ごさむも殘りおほしと、一燈かゝげ添ふる折りふし、遍昭小町が歌を吟ずる人あり。是によつて此の二首を探りて、兩星の心を慰めむとす。

小町が歌

高水に星も旅寢や岩の上　芭蕉

遍昭が歌

七夕にかさねばうとし絹合羽　杉風
西風の南に勝つやあまの川　史邦

閉關之說

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめに置けりといへども、さすがに捨てがたき情の、あやにくに哀れなるかたぐ〳〵もおほかるべし。人しれぬくらぶ山の梅の下ぶしに、思ひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人目の關も、もる人なくばいかなるあやまちをか仕出でむ。あまの子の浪の枕に袖しをれて、家をうり身をうしなふためしも多かれど、老いの身の行末をむさぼり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、はるかにまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀れなりとして、身を盛んなる事は、纔かに二十餘年也。はじめの老いの來れる事、一夜の夢の如し。五十年六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寢がちに朝おきしたる、ね覺の分別なに事をかむさぼる、おろかなる者は思ふことおほし、煩惱增長して一藝すぐるゝものは、是非の勝る物なり。是をもて世のいとなみに當て、貪欲の魔界に心を怒らし、溝洫におぼれて生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破布し。老若を忘れて閑にならむこそ、老の樂みとは云ふべけれ。人來れば無用の辯有り、出でゝは他の家業をさまたぐるもうし、尊敬が戸を閉ぢて杜五郎が門を鎖むには、友なきを友とし、貧を富めりとして、五十年の頑夫自ら書し自ら禁戒となす。

あさがほや晝は鎖おろす門の垣　芭蕉

雀子の髭も黑むやあきのかぜ　式之

不破にて

あき風や藪もはたけもふはの關　ばせを

はつ嵐ふけども青し栗のいが　同

初茸やまだ日數へぬ秋の露　同

しら露もこぼさぬ萩のうねり哉　同

ひよろ〳〵となほ露けしや女郎花　同

弓かためとる頃なれやふぢばかま　支老

玉かつらなまりも床し爪根花　史邦

昔しきけちゝぶ殿さへすまふとり　ばせを

つねぐ〳〵は後世ねがひなり相撲取　史邦

蜻蛉やなにの味ある竿の先　探丸

更科姨捨月之辨

あるひはしらゝ吹上ときくにうちさそはれて、ことし姨捨の月みむとしきりなりければ、八月十一日みのゝ國をたち、道とほく日數すくなければ、夜に出でゝ暮に草枕す。思ふにたがはずその夜さらしなの里にいたる。山は八幡といふさとより一里ばかり南に、西南によこをりふして、冷まじう高くもあらず、かど〳〵しき岩なども見えず、只哀れふかき山のすがたなり、なぐさめかねしと云ひけむも、理りしられて、そゞろにかなしきに、何ゆゑにか老いたる人をすてたらむとおもふに、いとゞ涙落ちそひければ

俤は姥ひとりなく月の友　ばせを

いざよひもまださらしなの郡哉　同

前書きれて見えず

夏かけて名月あつきすゞみ哉　同

名月や門にさし込む潮がしら　同

世波にたゞよひて、日暮の頃岡崎より京に歸るとて

鴨川や月見の客に行當り　去來

名月や夕日にむかふ宮さかな　塔山

名月の西にかゝれば蚊屋のつぎ　如行

名月や佃を越せば寒うなる　山店
名月や草の闇みに白き花　左柳
侍の身を露にして月みかな　史邦

常陸へまかりける時船中にて

あけぼのや廿七夜も三日の月　芭蕉

堅田十六夜之辨

望月の殘興なほやまず、二三子いさめて舟を堅田の浦にはす、其の日申の時ばかりに、何某茂兵衞成秀といふ人の、家のうしろにいたる。醉翁狂客月にうかれて來れりと聲々によばふ。主思ひがけずおどろきよろこびて、籠をまき塵を拂ふ。園中に芋ありさゝげ有り、鯉鮒の切目たゞさぬこそいと興なけれと、岸上に筵をのべて宴をもよほす。月はまつほどもなくさし出でゝ、湖上花やかにてらす、かねてきく仲の秋の望の日月、浮御堂にさし對ふを鏡山といふとかや、今宵しも猶そのあたり遠からじと、彼の堂上の欄干によつて、三上、水茎の岡南北に別れ、其間にしてみね引きはへ、小山巓をまじふ。とかくいふ程に、月三竿にして黑雲の中にかくる、いづれか鏡山といふことをわかず、主のいはく、折り〳〵雲のかゝるこそと、客をもてなす心いと切なり、やがて、月雲外にはなれ出て、金風銀波千體佛のひかりに映ず。かのかたぶく月のをしきのみかはと、京極黃門の歎息の言葉をとり、十六夜の空を世の中にかけて、無常の觀の便りとなすも、此の堂にあそびてこそ、ふたゝび惠心の僧都の衣も濕ほすなれといへば、あるじまた云ふ。興に乘じて來れる客を、など興さめて歸さむやと、もとの岸上に盃を揚げて、つきは横川にいたらむとす

鎖明けて月さし入れよ浮御堂　ばせを
安々と出でゝいざよふ月の空　同
鬼灯は實も葉もからも紅葉哉　同
鷄頭にうゑ合せけり唐がらし　史邦
枯れのぼる葉は物うしや鷄頭花　萬乎
花葛や松ふきたふす田成畑　史邦
もや〳〵としてしづまるや葛の花　山店
雨晴や煙のこもるくずの花　嵐竹
蚓なく明日は日和ぞ蓼の花　風斤
いなづまやなぐり盡して薄原　史邦

大見

稻妻やうみの面をひらめかす　史邦

小見

蟷螂のほむらに胸のあかみ哉　同
鶺鴒やはしりうせたる白川原　氷固
せきれいや壁土こぬる畔のうへ　磨盤
鷹の目もいまや暮れぬと啼く鶉　ばせを
ひゝなきに夜を待明す鶉かな　山店
はつ鶉時計の六つもうたせけり　史邦
道々の鶉きくらん藥とり　嵐竹
唐あみに袖ぬれてきく鶉かな　正秀
尻すぼになくや夜明の鹿の聲　風睡
寢がへりに鹿おどろかす鳴子哉　一酌

東山をめぐりて一乘寺に出づる

丈山の庵はいづこ引板の音　史邦
岡崎は祭も過ぎぬ葉鷄頭　同

前書きれて見えず

菊の香や庭にきれたる沓の底　芭蕉
見どころのあれや野分の後の菊　同
きくの露落ちて拾へばぬかごかな　同
人がらも古風になりて黃菊哉　史邦
朝寒や手をもみ初めて菊の花　風斤
借りかけし庵の噂やけふの菊　丈草
あか棚やまだいきて居る紅葉鮒　嵐竹

芽立より二葉にしげる柿の實と申し侍りしは、いつの年にや有りけむ。彼の落柿舍もうちこぼすよし發句に聞えたり。

やがて散る柿の紅葉も寢間の跡　去來
澁柿はかみのかたさよ明屋しき　丈草
木の本に狸出むかふ穗かげ哉　買山
やき米に歌こそなけれ近衞殿　史邦
虫の音や關宿船の麁朶の中　養浩
死もせぬ旅寢のはてよ秋のくれ　ばせを
穐の暮留主つかはれて歸りけり　山店

嵐蘭追悼四句

かなしさや日に〳〵ましてちる柳　嵐竹
莨麻の實をしぼり出す涙かな　山店
かたみにはいづれの草ぞ墓の露　史邦
千貫のつるぎ埋めけり苔の露　去來

高光のさいしやう、かくばかりへがたくみゆるとよみたまひけむは、九月十三日の夜とかやうけたまはりて

身の秋や月にも舞はぬ蚊のちから　史邦
わが宿は四角な影を窓の月　ばせを
柴の庵ときけばいやしき名なれども
よにこのもしき物にぞ有りける

此の歌は東山に住みける僧を尋ねて、西行のよませ給ふよし、山家集にのせられたり、いかなる住居にやと先づその坊なつかしければ

柴の戸の月や其のまゝあみだ坊　芭蕉

伊勢の國又玄が宅にとゞめられ侍るころ、其の妻の、男の心にひとしく物毎まめやかに見えければ、旅の心をやすくし侍りぬ。かの日向守が妻、髪を切りて席をまうけられし心を、いまさら申し出でゝ

月さびて明智が妻の咄しせむ　芭蕉
秋を經て蝶もなめるや菊の霜　同
梧うごく秋の終りやつたの霜　同
ゆく秋のなほたのもしや青蜜柑　同

題鷹山別

正行がおもひを鷹の山わかれ　史邦

題司召

挾箱さいかくするやつかさめし　山店

題百菊

百菊もさくや茶の間の南向　嵐竹

三吟

帷子は日々にすさまじ鵙の聲　史邦
籾壹升を稻のこぎ賃　ばせを
蓼の穗に醬のかびをかき分けて　岱水
夜市に人のたかる夕月　邦
木刀の音きこえたる居合拔　蕉
二階はしごのうすき裏板　水
寒さうに藥の下をふき立てゝ　邦
石町なれば無緣寺の鐘　蕉
手細工に雜箸ふときかんなくづ　水
よびかへせどもまけぬ小がつを　邦
肌さむき隣りの朝茶のみ合うて　蕉
秋入りどきの筋氣いたがる　水
鹽濱にふりつゞきたる宵の月　邦
無住になりし寺のいさかひ　蕉
持てなしの新剃刀もさびくさり　水
土たく家のくさきるもの　邦
花に寢む一疊あをき表がへ　蕉
小姓の口の遠き三月　水
竹橋の內よりかすむ鼠穴　邦
馬の糞かく役もいそがし　蕉
夕ぐれに洗澤賃をなげ込んで　水
とはぬもわろしばゝの弔ひ　邦
椀かりに來れど折りふしえびす講　蕉
此のあたゝかさ明日はしぐれむ　水
夜あそびのふけて床とる坊子共　邦
百里そのまゝ船のきぬ〳〵　蕉
引割りし土佐材木のかた思ひ　水

よりもそはれぬ中は生かべ　邦
言うたほど跡に金なき月の暮　蕉
もらふをまちて鳴ののつぺい　水
摺鉢にうゑて色付く唐がらし　邦
障子かさぬる宿かへの船　蕉
北南雪降り雲のゆきわたり　水
二夜三日の終るあかつき　邦
考へてよし野参りのはなざかり　水
百姓やすむ苗代の隙　蕉

座右之銘

人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ
物いへば唇寒し秋の風　芭蕉翁

千鳥掛集序

鳴海のなにがし知足亭に、亡友ばせをの翁やどりせるころ、翁おもへらく、此の所は名古屋あつたにちかく、桑名大垣へもまた遠からず、千鳥がけに行通ひて、殘生を送らんと、星崎の千鳥の吟も此の折りのことになん、あるじの知足此のことばを耳にとゞめて、其の程の風月をしるしあつめ、千鳥がけと名付けて、他の世上にも見そなはしてんとのあらましにて、程なく泉下の人となりぬ。其の子、蝶羽、父のいひけんことをわすれずながら、世わたる事しげきにまぎれて、はやとゝせに近く、星霜をふりゆけば、世の風體もおのがさまゞにかはり侍れど、父の志しをむなしくなしはてんもほいなきことにおもひとりて、ことし夏も半ばに過行くころ、洛陽に至り、漸くあづさにちりばむる事になりぬ。やつがれ折りふし在京のころにて、此のおもむきをきゝ、折りならぬ千鳥の

ねをそへて、集のはしに筆をそゝぐのみ。我れ聞く川風寒み千どり鳴く也の詠は、六月吟じ出でゝもそゞろ寒きよし、この千鳥がけも、時今炎天に及べり、其のたぐひにや沙汰し侍らん、又聞く東山殿鴨川の千鳥をきゝに出でたまふに、千本の道貞といへるもの、袖にらんじやたいをたきて出でけるを聞しめして、其の香爐を御とりかはしありて、今の世に大千鳥小千鳥とて賞せられけると也。此の後かほど至れる千鳥を聞かず、よし今香はたかずとも、星崎の千鳥にひとりもゆき、あるは友なひてもゆきてきかまほし、又そのあたりの歌枕、松風の里に旅人の夢をやぶり、ねざめの里に老いのむかしをおもひ、夜寒の里の砧をきゝ、なるみ潟しほみつる時は、上野の道をつたひ、雨雪には笠寺をたのみ、月のなき夜も星崎の光りをあふぎて、猶風雅の友をよびつぎの濱千どり、これかれ住興すくなしとせず。むべなるかな、ばせをが此の所に心をとゞめしこと。

正徳壬辰年林鐘下浣　　武陽散人　素堂書

千鳥掛上卷

星崎の闇を見よとや啼く千鳥　芭蕉

船調ふる蜑の埋火　安信

築山のなだれに梅を植るかけて　自笑

あそぶ子猫の春に逢ひつゝ　知足

鶯の聲夜を待つ月のほのか也　業言

岡のこなたの野邊青き風　如風

一里の雲母ながるゝ川上に　重辰

祠さだめて門ぞはびこる　言

市に出てしばし心を師走かな　足

牛にれかみて寒さわすれゝ　信

籾臼の音聞きながら我がいびき　風

月をほしたる螺の酒　蕉

高紐に甲をかけて秋の風　笑

渡り初めする宇治の橋守　風

庵造る西行谷のあはれとへ　足

啄木鳥たゝく杉の古枝　信

咲く花に晝食の時を忘れけり　辰

山も霞むとまではつゞけし　足

辛螺がらの油ながるゝ薄氷　風

角ある眉に化粧する霜　蕉

待宵の文を喰ひさく帳の内　言

寢られぬ夢に枕あつかひ　風

罪なくて配所にうたひ慰まん　信

庶子にゆづりし家のつり物　足

式日の日はかたぶきてこゝろせく　風

あさくさ米の出づる川口　辰

欄干に願ならぶ夕すゞみ　蕉

笠持てあふつ螢火の影　笑

初月に外里の娵の新通ひ　足

薄はまねぐ荆袖引く　蕉

朝霧につらきは鴻の嘴ならす　辰

あかがねかはらなめらかにして　笑

氏人の庄薗多き花ざかり　言
鶯籠きむれの春といまらず　風
田を返すあたりに山の名を問うて　信
かすみの外に鐘をかぞふる　執筆

めづらしや落葉のころの翁草　如風
衞士の薪と手折る冬梅　芭蕉
御車の暫くとまる雪かきて　安信
錢を袂にうつす夕月　重辰
矢申の聲ほそながき萩の風　自笑
かしこの薄こゝの篠庭　知足

歌仙有略之。

京まではまだなかそらや雪の雲　芭蕉
千どりしばらく此の海の月　美言

小蛤ふめどたまらず袖ひぢて　知足
酒氣さむればうらなしの風　如風
引捨てし琵琶の囊を打ちはらひ　安信
僕はおくれて牛いそぐ也　自笑
ふたつみつ反哺の鴉鳴きつるゝ　重辰
明日の命の飯けぶりたつ　信
わたり舟夜も明がたに山みえて　笑
鐘いくところにしかひがしか　蕉
其のすがた別れの後も一わらひ　足
なみだをそへて鄙の腰折　言
髪けづる熊の油の名もつらく　蕉
身に瘡出でゝ秋は寢苦し　風
釣簾の外にたばこをたゝむ月の前　信
楊枝すまふのちからあらそひ　足
小袖して花の風をもいとふべし　辰
こがるゝ猫の子を捨てゝ行く　信
うき年を取つてはたちも漸過ぎぬ　足

父のいくさを起きふしの夢　蕉
松陰にすこし草ある波の聲　笑
翅をふるふ鴉ひとつがひ　言
しづかなる龜は朝日を戴きて　信
三度ほしたる勅のかはらけ　笑
山守りが車にけづる木をになひ　蕉
燧ならして岩をうちかく　足
瀧津瀨に行婦法の朝嵐　風
狐かくるゝ蔦のくさむら　笑
殿やれて月はむかしの影ながら　言
老いかむうばがころも打つ音　蕉
ふすぶりし榾の煙りのしらけたる　辰
陣のかり屋に碁を作る程　信
山更によこをりふせる雨の脚　風
氣をたすけなんほとゝぎす鳴け　足
花盛り文をあつむる窓閉ぢて　言
御燈かゝぐる神垣の梅　執筆

芭蕉翁もと見し人を訪ひ、三河國に越え、序おもしろければ、伊良古崎見んと、白浪よする渚をつたひ、からうじて歸り給ひし旅の哀れを聞きて

燒飯や伊良古の雪にくづれけん　知足
砂さむかりし我があしの跡　芭蕉
松をぬく力に君が子の日して　越人
いつか烏帽子の脫ける春風　足
眠るやら馬のあるかぬ暖さ　蕉
曇りをかくす朧夜の月　人

寂照庵知足子の許へ、ばせを翁を尋ね來て

幾落葉それほど袖もほころびず　荷兮
旅寢の霜を見するあかゞり　芭蕉
今朝の月替ふる小荷駄に鞭當てゝ　知足

里の踊に野菊折りける　野水

寂照庵に旅寢して

置炭や更に旅ともおもはれず　越人

雪をもてなす夜すがらの松　知足

海士の子が鯨を告ぐる貝吹きて　芭蕉

春戸より直に踏みこはす垣　人

歌よせん此の名月をたゞにやは　足

蕎麥のみつぎを通す關守　蕉

鳴海出羽守氏雲宅にて

面白し雪にやならん冬の雨　芭蕉

氷をたゝく田井の大鷺　自笑

船繋ぐ岸の三股荻かれて　知足

蝸盧の高樓にいざなはれ、指さすかた

のひとつ〳〵におどろかれて、猶昏ををしむ

かきたてゝ見する夕日や松衙　轍士

障子開れば寒き川風　知足

袴着ぬ人を上座に茶を入れて　蝶羽

きのふ逃いた馬貰ひけり　龜世

不自由をこらふればこそ月の市　安信

新酒といふにそれこゝろ見よ　洗古

歌仙有略之

寢覺松風の里も此の近邊り成るべし

炬燵から友呼續の濱近し　圍友

窓つきあぐる時雨一息　知足

朝烏市の立つ日をわめくらん　露川

入りかゝりたる月のまひ〳〵　如瓶

笹茸は笹と思ひて取殘し　足

足駄で山をおりる秋風　友

歌仙略

初雪や寢言にいひし夢合せ　知足

皆うち並ぶ褶の賑ひ　圍友

あら壁の匂ひ靜かに風止みて　安信

さらばと今日は禮口が明く　露川

夕月の剃月代にしらみたり　業言

どこへ行きて宿る雁金　如瓶

歌仙略

露川亭にて

打交じる今日や木の葉の魚になる　知足

小春の空のとけあうた雲　露川

その里へ戻らるゝ駕こしらへて　獨卜

時宜する内に冷ゆる煎茶　素覽

材木を取りちらしたる暮の月　吏明

吹きも習はぬ濱のあき風　執筆

蝸盧亭にて

深閑と星崎寒し草まくら　舍羅

何をふれ行くすゞ鴨の聲　知足

絹を裁つ日は殊更にめでたくて　安信

次をのぞけば匂ふ杉の戸　蝶羽

盃に花柚を飛ばす片の上　龜世

あしたの事はしらぬ望月　執筆

歌仙略

から風や吹くほど吹いて霜白し　知足

すくんだやうな冬の裳鷺　路通

生魚のすくない折りは客の來て　同
小くらい月を無機嫌で見る　足
新綿を蒲團にいるゝ下り前　同
碓をもつと遠う聞きたき　通
色艶もつけぬ浮世の樂をする　同
山の中でもはやる念佛　足
しら雲の下に芳ばし花樗　同
きめよき顏に薄化粧する　通
哀れさをためて書きたる文の來る　同
あくたもくたのせまる物前　足
何所となうとりひろげたる中屋敷　同
土をつくねて獸を燒く　通
冬の月坊主は耳の根がさむい　同
京への駕籠のをらぬ栗栖野　足
見た事は咄しにもなる花の宿　通
夏をこなたに布施紅の咲く　同
陽炎の金原つゞき土肥えて　足
口をたゝけば日はしたになる　同
大やうな御寺の世話も引請ける　通
福々したる在のとし並　同
後の月見てから後の十七夜　足
芦穂の中をのぼる新三　同
ひとしきりしづめて渡る鴛の聲　通
身肉を分けし子に緣をくむ　同
人しれず白髮天窓に神いじり　足
夢見たやうな情わすれぬ　同
四條より結句糺のゆふ涼み　通
もんどりうつて郭公啼く　同
あの雲をひよつと落ちたる地雷　足
をさまつてよむ理趣經の頭　同
天井は生きてはたらく古法眼　通
翠簾のうちから猫の穿鑿　同
花盛りぎつしとつまる大芝居　足
旅をせば日の永き頂上　執筆

冬之部發句

千鳥

聞きあかでもどる汀や千どり足　貞德
淡路潟通ふや須磨の千鳥がけ　德元
唐までも行くか千鳥の浦めぐり　杉風（姫路）
浦ふれて千鳥も鳴くや船大工　宇古
打ちも寢ぬ鍛冶が火靑し小夜衞　新足
品川や塵をはなれて啼く千どり　百丸（伊丹）
せはしなや羽もやすめず岩衞　人角
目の驕り收まる雪の千鳥かな　長父
鋤鍬の身はいらゝきに千鳥かな　德七
櫂柄に頭巾を干すや磯ちどり　麥秀
明けがたの輕き衾や磯ちどり　金風
引汐に千鳥の聲の何國まで　和幟
千鳥どもねるか夜寒の里の妹　昨非（ナニハ）
靜かなる中のうごきは千どり哉　甘泉
淋しさの裏啼きかへす千どり哉　之白
更くる夜の千鳥におるゝ膠かな　月尋
方圓の影や心の小夜ちどり　柳水
いかになるみは爰じやもの此千鳥　全聯
不二うつる浪の寢入りて千鳥かな　龍風
起きはせず枕はなるゝ朝ちどり　光彦
ほし崎や波の笠着る磯千鳥　喪我
飛ぶ音や鳴かぬちどりの程拍子　泥隱
待たずしも風の夕べのちどり客　鴈山
浦やまし千鳥にあかん網代守　幸來
友ちどり火燒かぬ寺に明けにけり　嘉樂
四ッ二ッ明石の寢覺陸奥ちどり　文翅
傘海月相舍りとや濱ちどり　寸松
天てるや女筆の行衞千鳥形　法竹
浦風の殊の外なる千鳥かな　夕市（加賀）
曉の欠がなくか友ちどり　笑々翁（伊勢）
呼續や枕とかへる小夜千鳥　雷之（陸奥）

濱千どり緞子の夜着に聞く夜哉　三河　白雪
爐の炭を啼きほそめたる千鳥哉　桃先
とまり得ぬ波や崩れて鳴く千鳥　周東
鳴るといふ鳴海のゆきや啼く千鳥　尾城　尹之
此の海に節の筋引くちどり哉　如行
鷄のあとに矢橋の千鳥哉　熱田　夕道
狂ひけり波の兎と小夜千鳥　熱田　東藤
不斷さへしぐるゝ耳を小夜千鳥　寺本　祖月
月雪の跡の闇鳴くちどりかな　釋　暮岫
老いぼれが友たるものや友ちどり　釋　苔巖
濱まつの音やおぼえて啼く千鳥　獨笑
海士の住む里や都と啼くちどり　大高　酒聖
此の浦の功かちどりの嗟かはり　舟鶯
浦は町やむかしの鳴海鳴く千鳥　鳴海　業言
烏さへ鳴きつぶしたる千鳥かな　安信
海を田に埋めて鳴くなるちどり哉　重辰
立つ波にねられぬと鳴くや小夜衛　雨亭

此の里の松にきけとや鳴くちどり　自笑
往きもせず來もせぬ浦の千鳥哉　俳　牛歩
猫も我れに押れて鳴くな小夜千鳥　一邑
磯ちどり鳴けよ今夜は幾日汐　洗古
ひとり行く浦やすゝどき小夜衛　扇河
汐風に尾頭ならぶちどりかな　蟬木
呼續の浦に關なし啼くちどり　八幡　秋蒲
海士の火にそなへ崩すや村千鳥　嬉斗
打つて來る波をまくらや啼く千鳥　鷺汀
和田殿の九十三騎や浦千どり　鯉走
幾つかは產んで名に呼ぶ友ちどり　和子
旅ならぬ耳に問はばや小夜衛　一海
磯千鳥其のふみあとや文字つくし　一溫
汐滿や麥の二葉を友ちどり　泥燕
小夜ちどり枕焦すやたばこ盆　龜世
けふまでは人の噂や啼く千鳥　知足
晝のうち鷗に眠りちどりには　素堂

鳴海知足子は芭蕉翁の古き因みにて、旅寢の夢の見所と定めて、月に雪にやどかたらはれし其の心ざし、今も空しからざれば、予も亦たづねよりて、昔しに成り行く事ども物語り聞えしに、日數とゞまりて、古翁の月忌にさへ當り侍れば、たゞにあらぬやはと、道好める人々を招き追善を催ほされぬ。ただなつかしき此の胸にうかびて、句つづるべきおもひなけれど、しきりにとあればやまず

千鳥鳴く爰やむかしの杖やすめ　路通
此の浦のちどりに殘る紀念かな　蝶羽
俤のしぐれもこれや片便宜　自笑
俤は繪にもかゝれぬ紙子かな　龜世
落葉燒くけふの手向や七茶釜　知足

時雨

千鳥掛上卷

干網に入日染めつゝしぐれつゝ　來山
そよ時雨寬の水の生きて行く　名古屋　知足
秋の哀れすゝぎあげたり初時雨　肥後　木雞
さゝめ言物にもならぬしぐれ哉　筑前　宗信
來ぬ人をしかるところに時雨けり　野吟

はやこなたへといふ露のむぐらの宿は
うれたくとも袖をかたしきて御とまり
あれやたび人

たび人と我が名よばれむ初しぐれ　ばせを
かつぎした男見せけり一しぐれ　一邑
傘借せと背戸たゝくなり夕しぐれ　雨伯

水仙花

置く霜の敵を味方に水仙花　乙州
水仙の組合はなし獨り武者　蝶羽

茶の花

上野の道にて

茶の花や須磨の上野は松ばかり　素堂

茶の花や徑わけたる星月夜　龜世
茶の花のあるじや庭に唯居らす　團友

雪

雪降るや若衆の門を掃きに行く　才麿
降る雪になほおほきかろふじの山　尼智月
松は雪ふくべをいづる炭の音　伊勢八菊
あけぼのゝ雪を耕す蹄かな　出雲蝶羽
蠟追うた尾に雪拂ふ隙の駒　風水

氷

紅鹿子結ふや氷の下もみぢ　對馬氷下
我孝はうすきに厚き氷かな　龜世
池の魚あらしにあてぬ氷かな　知足

雜　冬

一すねも二すねもすねて冬の梅　扶搖亭
花の木に花の寢言の小春かな　光彦
せめて十夜何少將は九十九夜　名古屋蝶羽
大酒や三日足たらずえびす講　昨丁
木枯に出現したるお寺かな　對馬一口
木がらしもかしましからぬ柳哉　業言
荷もなうて柳やかろき冬の雨　龜世
角つゝむ越路の牛の寒さかな　和子
十の指口へそろへる寒さかな　伊勢紀之
こはいかに鏡は一切れて大根引　幸巴
丸合羽はしり過ぎたる霰かな　知足
わが宿は跡さいて寢る湯婆哉　小豆島寸伽
火加減の甘鹽を喰ふ炬燵かな　白雪
寒菊はちかよる梅の名殘哉　杉風
しら糸に霜かく杖や橋の不二　その女
富士ひとつこゝろがゝりよ河鯨汁　如泉
篦つかふ冬田の鷺や世の中は　柴友

歳　暮

代々の賢き人々も、古郷はわすれがた
きものにおもはえ侍るよし、我れ今は
はじめの老いも四とせ過ぎて、何事に
つけても昔しのなつかしきまゝに、は
らからのあまたよはひかたぶきて侍る
も見捨がたくて、初冬の空のうちしぐ
るゝ頃より、雪を重ね霜を經て、師走
の末伊陽の山中に至る、猶父母のいま
そかりせばと、慈愛のむかしも悲しく
おもふ事のみあまたありて

古郷や臍の緒に泣くとしのくれ　芭蕉
賑はしう煤とる宿の朝げしき　知足
年わすれしかし太皷はたゝかれじ　如柳
年の夜もかさゝぎ渡すとや成んぬ　蝶羽
行くとしや伊勢の御燈の粘細工　琴風

春之部發句

立　春

代々富めり壺中の茄子氷様　露霑
弓馬の初音うつくし兒手茶屋　冠里
賀に榮えり齒朶から花の綾錦　闌幽
そも〳〵は曙の色山のはる　露江
湖のほとりの玉やかゞみもち　才麿
初鶏のあした〳〵や無盡藏　舍羅
蓬萊の隱家にせん榧の殼　如風
異國へは跡かつがする初日かな　雨亭
わが春に實植の柑子粧りけり　知足
靈夢から裸もあるに着衣始　團友
初なづな經のたゝき納豆まで　素堂

梅

梅が香に醉ふべきほどの雀かな　知足
梅が香に妻うたがふや夜三更　鳴海柳水
寢覺めたる顏吹きなぐれ梅の風　和子
竹の戸に釣瓶の魚や梅の花　長父
麹屋にとまり客あり梅の花　ミノ淵泉
釋迦はやり梅は導く鼻ばしら　周東
かた〳〵は寂しがられて梅の花　ブンゴ繁貞

梅が香やこぼしちからもなるみ潟　柳舟（デハ）
八月にまけは致さず梅の花　芦汀（加賀）
這梅の殘る影なき月夜かな　野坡

聖廟奉納三句

松梅の庭や文武の右ひだり　知足
紅梅や萬燈ともす松の中　龜世
此の春を含むか神の松のはな　蝶羽

鶯

譽めらるゝ鶯の身ぞむつかしき　越後卷耳
うぐひすを命や軒の干大根　下野寸馬
うぐひすや千疊敷のあるじ顔　扇河
鶯やむかしは寺に歌のあり　蝶羽
金持を鶯選らぬ軒端かな　霑之
閑（かん）なる事を好んで、山ふかく入れば又里あるがごとし、府中に山林あり、足ることをしるや此の館の主人

その日には覗きとゞかぬ木の芽哉　露川

凍解

凍解や去年の紅葉の行覓　一海
鐘の音も解けて八十瀬の徑かな　名古屋寅三

柳

柳垂れてあらしに猫を釣る夜哉　木因
軒にさらり砂にもさらり柳哉　魯九（僧）
そよめくやあつらへの風梅柳　知足
雨風を〇〇の柳かな　つね（ちそく娘）
鳥どもの脊にのする柳かな　りん女（ブンゴ）
降る雨のこまかにしのぶ柳かな　繁貞
光陰をたらりと庭の柳かな　道甫
朝柳平等院の本尊かな　沾洲

胡蝶

夢に化す蝶や浮名の青表紙　霑之
照られても欝金しろまぬ胡蝶哉　木因

蛙

蛙啼く一夜々々に夜着重し　蝶羽
陸にても飛鳥を得るや蛙武者　嬉斗
野の宮の高麗狗になる蛙かな　素流（洛）

すみれ　たんぽゝ

明ぼのやすみれかたぶく土龍　凡兆（洛）
一昨日の鐵砲くさきすみれかな　東潮
戀せじな貌かたぶけてはな菫　蝶羽（釋）
たんぽゝの土手やむかしに鳴海潟　東推
たんぽゝや白壁見ゆる足の下　知足

田螺　田打

半蔀の空明渡る田螺かな　斗一邑（下野）
寒歸る木曾のむかしや田螺とり　惟然
しとやかなこと習はうか田打鶴

猫戀　つばめ

鞠それて妻乞ふ猫の行衞なし　沾竹
壁の穴覗きつ鳴きつねこの戀　氷下
乘かけを坂に越えたるつばめ哉　雨亭
つばくらや子を思ふ身の隙もなし　舍羅

陽炎

布袋書きたる繪に

袋よりたつ陽炎にかいだるし　杉風
燒かぬ日も陽炎もゆる鹽屋哉　嬉斗
陽炎の中に骨あり田うち蟹　東藤

朧月

里がよひかいどり前やおぼろ月　蝶羽妻
晩鐘に朧のにほふ垣根かな　蝶羽
蝸廬亭にのぼりて
星崎の朧や低し亭の上　越人

出替　養父入

出がはりの寢言に物をこそおもへ　團友
出がはりや水遠近の井戸車　蝶羽（加賀）
養父入やうなづきあひて行違ふ　柳雌

紙鳶　雲雀

鷹そらす顔や切行くいかのぼり　獨笑
若草にとんと消えたる雲雀哉　醉素

汐みちて上野の方や舞雲雀　露川

上　己

萬葉の姿ゆかしや俗雛　名古屋機石

そらねして御門通るや鶏合　農石

三日月の光りや浮きてもゝのはな　加賀句空

沖の石日にあたゝまる節句かな　鯉走

鯉もけふ伏見の桃にのぼるかは　龜世

桃咲いて釣るしかへたる干葉かな　治由

花

それは和靖

これは知足翁の花の宿なれ

初花やかさねぐ〳〵に鹿の角　高翔

知足亭の初花を詠めやりて

見直すやかゝる男も花の陰　祖月

おなじく

御壽命の外十年や花の山　一貫（コロモ）

老いの山踏　ふるさと

烏雲にうん〳〵とてぞ花の岫　須賀川藤躬

いつくれて花にはさかる三日の月　豐後紫白

足もとのあかるい華のもどりかな　伊勢辰閏

懐に寢て歸る子も花見かな　美濃千川

年喰へばいよ〳〵出たき花見哉　新城かめ女

さし浪や志賀からおとす花いかだ　蝶羽

花に呑んで年も小半（こなかも）合暮れにけり　龜世

櫻

鎖おろすたからの奥のさくら哉　才麿

咲くやいかに鹿追ふ獵師山さくら　下野里杜

糸櫻吹くや堅田の網さばき　豐後猶然

山ざくら世を宇治山の行脚哉　豐後馬貞

さくらにも談義にも寢る親仁哉　岡崎胡叟

明ぼのゝ鐘に咲いたか此のさくら　名古屋申桃

晝からは茶屋が素湯賣る櫻哉　業言

山ざくら表具してみるかすみかな　知足

やまざくらひかへて外は町屋哉　東推

山高うして海ちかきといへるをおもひ合せて

大勢の目に呑れたるさくらかな　釋白支

川裾や散るはおぼえて山ざくら　柳舟

奉納　歌仙

笠寺やもらぬ崖も春の雨　芭蕉桃青

旅寢を起すはなの鐘撞　知足

月の弓消行くかたに雉子啼いて　如風

秀句ならひに高瀨さしけり　重辰

茶を出す時雨に急ぐ笹の蓑　安信

賣殘したる庭の錦木　自笑

ゐのころの重なり伏して四ッ五ッ　業言

むら〳〵土の焦げし市原　執筆

籏竿に藪はほられて風の音　足

下部の祖父と女すむ家　風

きぬ〳〵のまだ振袖に烏帽子着て　笑

うらみを笛に吹殘しける　信

曇るやと夷に見せたる秋の月　辰

露さぶげなり義經の像　言

白絹に萩としのぶを織りこめて　風

院の曹子に薫を乞ふ　足

廊を双六うちにしのびより　信

火を消す顔の憎き唇　辰

盞をあらそひ負けてかり枕　言

一二の舶を汐にまかする　笑

乘捨てし眞砂の馬の哀れなり　辰

刀をぬきてたぶさおし切る　風

大年の夜のともし火影薄く　足

居眠りながらくける綿入　信

菊の戸に乳を呑む程の子を守りて　笑

もぎつくしたる午時の花　言

山路來て何やら床し郭公　風

笈おもげなる宮の休らひ　辰
姉妹窓の細めに月を見て　信
名を待宵と付けし白菊　足
おもひ草水無瀬の水に投入れん　辰
秋くれぬとて扇引きさく　笑
初雪のかゝる艘をうち拂ひ　足
鳥居を覗く八重の松ばら　風
花盛り尾張の國に札うちて　言
暖になるすゝの明ぼの　信

ちどり掛下卷

杜若われに發句のおもひあり　芭蕉
麥穂なみよるうるほひの末　知足
二ッして笠する烏夕ぐれて　桐葉
かへさに袖をもれし名所記　叩端
住馴れて月待つほどのうら傳ひ　業言
それとばかりの秋の風音　自笑
捨てかねて妻呼ぶ鹿に耳ふさぎ　如風
念力岩をはこぶしたゝり　安信
道野邊の松に一喝しめし置き　重辰
長者の輿に沓を投込む　蕉
から樽を荷ふ下部のうつゝなや　足
岸にかぞふる八百の鷺　葉
森透に燈籠三ッ四ッ幽かなる　端
子をおもふ親の月さがしけり　辰
それの秋すなる手打の悔しくも　足

猫ならば猫霧はれてから　風
鳥邊野に葛とる女花わけて　葉
ねためる筋を春惜しまるゝ　言
燕に短冊つけて放ちやり　端
龜盞を春負ふさゞなみ　蕉
天氣さへ勅に應じて雲なびく　信
五日の風の宮雨のみや　風
菓子賣も木隱れてのみ住みはつる　笑
長屋の外面たつ名はぢらひ　足

芭蕉行脚のころ

夏草よあづまぢまとへ五三日　知足
笠もてはやす宿の卯の雪　桃青

あるとし予がたらちね、洛にのぼりて眞珠庵のぬしにたいめせし頃、兩吟すべきとて、第三まで出來ぬ。歸國の後尾城の露川を加へて三吟となし、十三驛路幾度か往來してかく迄になりぬ。

川床や片尻かけて旅まくら　知足
鳴す間殘せ鐘のみじか夜　如泉
鵲の松を南に飛びぬけて　同
家のうは手に落ちさうな岩　露川
冬待ちて雪車の釘打つ暮の月　同
稻を仕廻へばしげき觸事　足
いつやらの野分に堤皆になり　同
相撲を賣つてありく男等　泉
一年も添うたる妻のひとり唏き　同
炬燵をおもふ夢の曉　同
どうゞと船の廁の波の音　川
分別貌に出たる兼房　同
精進に名代立つる花の宴　同
暮行く春は金に買れじ　足
居替りに女ひでりや江戸の町　同
運ぶ茶臺にうつる前髪　同
海廣くこゝが國での月見寺　泉

袖かた敷きて蘭に吹かれん　同
鹿聞きに來るはやさしき人心　同
きのふも今日も菜は燒鹽　川
雪のあるうちは軍を止めて居る　同
おくり迎へを船の通ひ路　同
しれぬ名の立つや網干の出來分限　足
小鼓打の小うたさへよき　同
夕月に晝の暑さを忘れけり　同
せめて隱居に京や願はん　泉
花の陰豆腐に須磨の鯛ふるし　同
被の伽羅に蝶のまつはれ　同
衣々を御影供參りにまぎらかす　川
あまりに晴れし空もしまらぬ　同

夏之部發句

衣更

ころも更壁に詩をかく御浪人　才麿
かたびらや袖に初香の神の庭　山扉
衣かへいまだひなたを人が行く　桑來
袷着てまづ立出でゝ峯の雲　之白
あはせ出せ花さへ芥子の一重なる　來山

新樹

若葉ふく風から出して卯月哉　呂千
若葉より出山拜むしやれ木かな　洛獨卜
雀たつ若葉が底に一二輪　春人
白雨に青葉が上の若葉かな　大垣荆口
葉ざくらや鳩の產家のうそくらき　泉羽
葉櫻やたらつき足らぬ鳩の聲　米澤蝶友

郭公

ほとゝぎす宗祇の質のながれ哉　伊丹青人
郭公茶なし酒なし去りながら　之白
曉のまくらも圓しほとゝぎす　百丸
雨による物でもあらじほとゝぎす　長崎古道
雲となる聲のはづれや郭公　伊勢芦本

子規あとのまつりに雨が降る　出羽重行
杜鵑鳴きたる跡の九輪かな　淵泉
ほとゝぎす口濡す間はなかりけり　左布里夏流
一聲は青葉に包めほとゝぎす　知足
山法師三ッがひとつはほとゝぎす　蝶羽
耳ふさぐ猿は尊し子規　龜世
此上は淺芽が原よほとゝぎす　下野夕全

さし棹書きたる扇に

鳥さしも竿や捨てけんほとゝぎす　芭蕉
ほとゝぎす濡れてかたびら一つ也　來山
雨になげ宿は洩るともほとゝぎす　昨木
民種の日遣もいつかほとゝぎす　露霑

牡丹

ほしさうに笑うてかゝる牡丹かな　路通
茶に醉うた振りしてくれぬ牡丹哉　知足
はたけとは志賀の都の牡丹哉　團友

杜若

千鳥掛下卷

八はしにて

二度手打つ澤時鳥かきつばた　三千風
馬に市かきつばたには人もなし　素堂
かきつばた汗でほとびぬ道明寺　不角
駒下駄にはる〳〵來けり燕子花　養民
秋津洲は色にほれけりかきつばた　全暇
立傘の俤殘れかきつばた　島田如舟
今ならば迦葉微笑らん杜若　釋雲歩
隱れ家の深川ふかし貌よばな　知足

笋

竹の子の裸になるは誰れゆゑぞ　斗米
竹の子や名聞の世に諂はず　對馬萬山
竹の子の一よ折るとも音なたてぞ　湖十
竹の子を竹になれとて竹の垣　來山

端午

事觸ものぼりの鈴も遠乘も　沾竹
誓ひてし粽結ふかはいはた帶　下野翠戸

しだり尾の長屋々々もあやめかな　斗米
鎗直切る顔やあやめのわたばうし　美濃己千
子はたらぬ物か幟に子持筋　不秋
岩橋や軒のあやめを下にのみ　平之允
曙の色をわけたるのぼりかな　昨非

五月雨

五月雨や三番三をふむまはり縁　泉流
五月雨や魚とる鷺のながれ足　和子
五月雨や山もかくれてなこの海　蝶羽

水草花

花咲いて猶うき草のうきに浮く　知足
泥亀や花うき草の誘ふ水　蝶羽
鯉飛んで萍のはな失せにけり　つね女

百合草

雨雲のひつくりかへる百合草の畫　百里
姫百合草や小町がむかし後ろ紐　律哥
姫ゆりにゆらるゝ露ぞ浦山し　亀世

あさら井に蛙游ぐやゆりのはな　伊丹金風

水鶏

氏雲にまけじと扣く水鶏哉　荷兮
明けがたの山もくづれて水鶏かな　其香（プセン）

蚊柱

蚊柱や角なきとてもそひくるし　好永
蚊柱もころぶ時あり夕あらし　魯九（廣島）
蚊柱に行きあたりけり鼻の先　菟好
蚊柱は夕がほ棚のひかへかな　釣壺

初茄子

初なすや腮の汐のいそがしく　武江松荀
玉の緒や是も齢の初なすび　泥燕

蓮

あの蓮の動く所や魚の淵　如風
水晶の山なだれてやはすの露　魯九
立つ鷺の羽風に蓮の折葉哉　自笑

題狂言

すむ水の芙蓉に恥ぢよ鬼の貌　山扉

蟬

山蟬や小紋すゞしきうす衣　獨卜
山蟬や權の太夫のからごろも　蝶羽
雨雲のちぎれて蟬の聲高し　嬉斗

暑

暑さをも問はで知れたり羅漢の身　和子
もゝ尻と人のいふべきあつさ哉　鯉走（浪速）
麻につるゝ蓬につるゝあつさかな　東行
鬼蜘蛛の圍にかゝらばや此の暑さ　羽野（下野）
岩ひばの握りつめたるあつさ哉　短船（鎌倉）

納涼

子を寢せて涼しくも有るか片庇　龍風
涼しさを舞うて見せたり水車　木因
涼しさをみよとやはしる帆かけ船　知足
極樂の風やお寺の夕すゞみ　醉素

名所之夏

星崎夜寒里
寢覺里上野

千鳥掛下卷

涼まうか星崎とやら扨何所じや　惟然
星崎の青田によるや波のはな　湖十
星崎のすがた亂るゝ螢かな　暮船
かたびらも夜寒の里の旅寢哉　釣壺
涼風や夜寒の里の吹きあまり　蝶羽（名古屋）
短夜は寢覺の里も朝寢かな　千鶴
一鮒ねざめの里やほとゝぎす　釣壺
夕貌や上野を通ふ油筒　雷之

行脚のころ

橘の小島が崎も青田かな　知足
勢田の手をうちもらされし螢哉　同
淀鳥羽の牛に帆かくる暑さ哉　同

知足亭にて

籠ともおぼしき庭の覆盆子哉　支考
夏氣色返すぐもなるみ潟　乙州

俳諧秋之部

鳴海眺望

はつ秋や海も青田の一みどり　芭蕉
乘行く馬の口とむる月　重辰
藁庇霧ほのぐらく茶を酌みて　知足
やせたる藪の竹まばら也　如風
蛤のからふみわくる高砂子　安信
笠ふりあげて船まねぐ聲　自笑

歌仙有略

賀新宅

よき家や雀よろこぶ背戸の粟　芭蕉
蒜にみゆる野菊刈萱　知足
投渡す岨の編橋霧こめて　安信
風呂焼きに行く月の明ぼの　芭蕉

杉垣のあなたにすごき鳩の聲　知足
はつ霜下りて紙子捫つく　安信

秋の部發句

初秋

笹竹の雀秋しる動きかな　杉風
是は扨あの松風が秋さうな　梶女（祇園）
初秋や筆を呼ばるゝ草の雨　惟三（ナニハ）

七夕

土器や壽の字さやかに天の川　露霑
はしり穂の一筋ぬきや星祭　木因
織女の娶入やよめり宵月夜　金士
ちよつとした雲のさはりや星迎　十哥（越中）
物かげに女の聲やほし迎　東白
ほし合の蒲團を敷くか宵の雲　紀之（伊勢）
棊盤出せ星さへふたり逢ふ夜なる　村女
取亂すわかれの雲や天の川　八菊
河風や梭の音吹くほし迎　龜世
七夕や糸いろ〳〵の竹の花　一溫
三ッ股や江戸の硯の洗ひ隈　沾竹

一葉

角文字は桐の落ちたる二葉哉　甘泉
くる秋のきりきばみする一葉哉　貝原
桐の葉やいたゞく桶の水のうけ　芙雀
桐いまだ風折りふしの合點から　姫路　千山

生身魂　木曾にて

かけ橋や生聖靈の袖の露　一鐵
死に〳〵て生きて露けし萩薄　天垂
蓮の葉も浮世の鯖にしみにけり　木因

玉祭

蓮池や折らで其のまゝ玉まつり　芭蕉
泪けのない魂棚や御寺方　卜誰
玉祭つゝしむ事の自然なり　龜世
かゝげても燈火暗し盆の月　蝶羽

をとこ女隔てぬ客や玉まつり　知足
親をおもふ衣の山の月の色　才麿

粟

風に名の有るべきものよ粟の上　惟然

青瓢　初秋中一　此所に遊んで

夕がほや秋はいろ〳〵のふくべ哉　芭蕉（加賀）
ねすがたや起きたところも青瓢　季邑
ふくべにて茅屋おさふる嵐哉　龜世

朝貌　木槿

朝貌や白髪も見えず花ざかり　月尋
せんぐりに咲いて久しき木槿かな　知足
一ひねり朝貌と申すつぼみなり　團友
朝貌の花や網戸のうらおもて　伯兎

花野　女郎花

惜からぬ風は花野のさわぎ哉　泥燕
それ〴〵や風に見らるゝ花薄　一海（龜崎）
秋風のこそぐりてゆく花野哉　卜志

いたづらの色をさりけり女郎花　龜世
角もじと妬くも寢しか女郎花　一海
松風の里に汐くめ女郎花　茨口

露

靜さや繪に書いて嘗む露の色　白支

寶永

おほ宮造りの時

露置くやましろのひがし八大名　風水
きのふには似て似ぬものか草の露　之白

虫

虫よ〳〵啼いて因果がつきるなら　乙州
ぬけがらの蟬哀れなり虫えらみ　木雞
蓑虫の啼いて枯木の風情かな　淵泉

鹿

兀山の松を見せけり鹿の聲　知足
おのが音の樹神追はゆる男鹿かな　鷗白
延びあがる臑より細し鹿の聲　魯九

棹鹿の聲うるみけり夕あらし　蝶羽
宵闇や寛にもれて鹿の聲　麥秀（大津）
冬ちかし終り初もの志賀の鹿　我笑

野分

草や皆野分に今朝のていたらく　柴友
西瓜ひとり野分を知らぬあした哉　素堂
庭の面も見えずおもしろき野分哉　之白（堺）
吹出すや野分のあした又をかし　成之

間引菜

間引菜の露提げてくる目籠哉　知足
間引菜や後にぞおもふまゝ子立　一邑

菌

狩りめぐり菌ひとつを鬼の首　夕全
宵の雨松と契りて木の子かな　龜世
かけ出すや菌などを數珠つなぎ　卜誰

碪

うたゝ寢の關打返す碪哉　蝶羽
手だすけのわらはれに出る碪かな　辰聞
碪聞く程こそよけれ興座敷　團友

鷄頭花

鷄頭や紅錦繡の裏住居　林鳳
鷄頭や唐のかしらの夕日陰　龜世
夕暮に何をちらさん鷄頭花　安信

月

裏銘は不知かつら男の大かゝみ　不變（加賀）
行く船や笘洩る月に袖の紋　北枝（洛）
いろ〳〵の枕やあらん秋の月　伯流
寢てをかし覺めてもをかし旅の月　鐵蟬
蘇鐵にも月はやどれど薄かな　素堂

名月

名にいはゞ今宵の月や三五郎　立圃
名月やいまだ增賀の裸ごろ　言水
秋ぞ最中心の須磨の四絃　光彦
名月に我れはへちまの袋やら　秋色
名月の湯にや水にも自在竹　柳舟
名月や照るも曇るもはなれもの　芦本（有馬）
今日の月いでや小町が袋には　嘯水（濃岐）
明月の鐘鳴りわたる名殘かな　正次（筑前）
白砂にひたと座しけり今日の月　無天（加賀）
名月や今宵一夜の秋の晴　露因（備）
肴屋の日記に乘らん月見かな　柳水
名月や約束勝ちで内に居る　泉流
名月やついでに明くる日を拜まん　知足
名月の窓やわづかに梅の花　才麿

八幡にて

名月の麓の松やをとこやま　蝶羽

十三夜

月やちる袖は木の葉の十三夜　重春
草も木もこの國ぶりよまたの月　全暇
酒盡きて臂の寒さや後の月　長父

白菊や黄菊の中の一ねぶり　由平事自入
清香をめぐらせけふの菊の風　之白
白菊や菊におろかはなけれども　蝶羽
中椀に千代を瀬どるや菊の酒　十律
松がねに千代をあやかる野菊哉　知足母永参
白菊の咲くや浮世の秡入手　知足
白菊に黛つくれうすぐもり　知足孫しゆん女
大人に徳あり菊の酒はやし　龜世
濡色は山路の菊の自然かな　醉素
門あけて見らるゝ菊のよろこびか　ナゴヤ僧大椿
壁際や蔦に手をかす菊の花　文來

老菊

白髪にはならず此の花小むらさき　山扉

深川素堂より文の中に

十六夜の月と見はやせ殘る菊　芭蕉

新綿

新綿や治まれる代の弓の音　晩山
新わたや弓より散りて綾はどり　泥燕
新綿にこもる鶏や雪の聲　林凰

秋暮

夕暮はいつもあれども秋の海　團友
馬牛の脊もさがされし秋の暮　松荷
何うゑた跡とも見えず秋の風　初候
棕櫚の葉や草摺たゝむ秋の風　八菊
癖とても常なき秋の扇かな　横船

長夜

長き夜や蚓の聲も長恨哥　古蝶年
宵闇や霧の氣色に鳴海潟　其角

ばせを老人、此所に杖をやすめ給ひ、俳談のあまり付句幷にほくども書殘し置かれけるを、反古の中よりさがし出し。なつかしさのまゝ茲に記し侍りぬ

琴引きならふ窓によらばや
折提ぐる道にて菊の名を忘れ　ばせを

酒に興ある友を集むる
ぬけ初むる父の一齒のかなしくて　同
それ〴〵に年取る用意いそがしく
猿の小袖を染むる猿引　露荷
櫻はなみ木梅は山里
行尊の笈に入れたる哥枕　其角
おほく咲きたる菊の
うき秋をはゝの書かする物がたり　同
棊に染めて凉敷く夏をくらしけり
馬しゝてより出でず桑の戸　桑門宗波
我が夢を鼻ひゝ霜の草まくら　ちり
來月は猶雪降らんはつしぐれ　仙化
橋までは供して行かん今朝の霜　中川氏濁子
幾時雨心そひ行く江戸さくら　李下
朝毎のかみこや重き霜の松　文鱗
秡んでゝ送り申さん時雨哉　舉白
時雨々々に鑑借り置かん草の庵
時は秋よし野をこめん旅のつと　露沾
冬枯も君が首途や花の雲　其角
木枯の吹行く後姿かな　嵐雪
鳴く千鳥富士を見かへれ鹽見坂　杉風

送紙布

萩かれぬ陸の紙布都まで　寶生露蓬

笈銘　蝶羽

世を面白く誹諧にかくれ、ひとつの笈を友とし、身の動く所を驛とし、杖のとゞまる所を宿とす、其の廣き武藏野も秋過ぎ、古郷の空に通る時雨の侘しければとて、あが軒端に立寄り、笈さしおろしかうかけの紐打ちとけて、そこ爰の物語に日を忘れけるが、土丹生の寢覺がちなる夜の、星崎のかたに千鳥の鳴くを聞きてほくしけるを、亡父な

にがし感に餘り、其の道をこのみ給ふ人々の句をも、呼續のはし〳〵つけわたして、一冊にせんと心がけしに、とゝせ過ぎにし夏、其の心ざしもむなしく、鳴海のひろふかひなき身まかりにけり。予其の事のすたりぬるを歎き、又我が友ちどりの聲をも打添へ、絶えにしをつぎふたつの卷になしぬ。まことに翁の餘情も懷かしければ、其の頃翁あが許よりして、熱田の桐葉がかたに往きしが、また難波の春におもむかんとて、いかにおもひしや、自ら負ひし箱物を殘し、猶行先の霞とも消えなん後のながめにもせよといひ置きて出で行きしが、終に其の浦風にさそはれ、世をみじかき芦の下浪とは成りぬ。此の卷もと翁の句より興りしなれば、せめて其の俤に此の笈の見まくほしく、桐葉の花も紫のゆかりなれば、かくおもふよしをいひやりてこひけれど、ばせをの露のかたみ、いかにし侍らんや、我れもし一葉の秋にもあはゞ、それまた我が名殘りにもみせんなどいひしが、去年の五月雨に秋をも待たぬ花と散りて、哀れ添へつつ送りおこせたり。いかに世は露の玉手筥、ふたりの記念となりて、あが許に所持しにけり。其の形はさながら婦女の玉櫛笥に似て、おほいさもさる物なれ、高麗人の工みと見えしが、くろう塗りこめたるに、金泥の繪のこまやかなるも、はげうせて見るかげのあるかなきかに氣しきして物ふりたり。左右に蕨手をつけしは、負ふにたよりとやせし。むべ獨りありきの用にはたりぬべかりける物とこそ覺ゆれ、此の道の好どち打寄りてとり出し。ふたゝび翁の文臺に連なる心地し、其の風情をしたふ。されば其の心ざしをのべて銘し侍りぬ

笈言古极　极本書箱
衲物不壞　事約用詳
獨歩自負　客路友倡
坐懸肱嘘　臥枕顱康
滑稽之頓　詞華餘光
屑吐之審　言實得鄰
四時佳景　身心洋々
一世消息　風月彷徨
其人已逝　爾笈爰昌
員篋終腐　秀嗧無亡

それはいかいの道は、とほく千金の涙をわけて、崑山の玉をひろふにもあらず、はるかにながれのいさごをこえて、靈山のたからをもとむるにもあらず、たゞ我が秋津洲のくにゝつとふるかなの、よそじあまりをいでずして、よろづのさかいにいたれるわざなりけらし、しかはあれど、まことにそのみなもとをしり、ふかき心をくまんことは、いそのかみふりにたる世に枝の雪をならし、まどの螢をむつびぬる人もかたくなむ侍りき、まして神杉のするのよとなりて、たつきなきともがら、何がしの翁くれがしのいらつめなどいひて、わたらひ草となせるよりぞ、おのづからかしこきもすくなかるべし。このみちのひじりてふものゝ、書きおける七ツのふみを一まきとなして、たはやすくその奥儀をしらしめんと世に行ふものならし。

安らけく永き三ツのとし長月の頃

大鵬館主人がいふ

俳諧七部拾遺

七部拾遺序

天下有二有益書一而無二無益書一といへば、いづれの書をかよまざらむ。こゝに家々の五車につみこぼれたる集どもを、とりかさねてかくなづくるものは、例の菊舎がひろひえたる玉をあきなひ、利をもとめんのしわざなれば、かの家に一倍の利を得させて、よみ見む人はかならず百倍の徳つくべき書ぞ、

享和二年秋　　平安竹巣月居誌

初懐紙は見るべきものと北枝傳にも見えたり。野ざらしは骨にこたへてかなし、三歌仙は貞享の氣格凛々たるものなり。一橋、桃の實、其帛は三つながらすがたかよひて、俳諧の愚痴をはなる、はつ便、をはりの巻は誠に風流の平話を盡して、又たぐふべくもあらず、是を集めて七部拾遺となづくる、其成がために蒼虬しるす

享和三年春正月

初懐紙序

決龍の頷をさぐりて珠をうるは、いとあやふきわざにしあれど、求むるの甚しきに至りては、しかせざらむや、おのれ若きより此の道にこゝろざし深くて、あしたにゆふべに古人の蹤を思ひ侍るが、いまだ全たく連城の良玉にあはぬぞ、うらみて過ぎしが、ひと日つれ〴〵のあまり、市肆をことそともなくありきけるついで、それの文屋にて一束ばかりの反古をなん贖うで歸りぬ。さるをとみに校索しけるそが中より、此の一卷を獲たり。是なん先哲の才をたくみにつゞりおけるものから、彩色といふ斗りなくめでたしと見ゆ。思ふに古賢のよき玉を櫃に隱せるものか、はた善きあたひを求めて其の人にあはざるものか、今幸ひにおのれ是を得て、早く世に售めやと、喜びをしるすものは、鶴齡堂主人にこそ于嘗

寶曆十一年秋八月

丙寅初懐紙

日の春をさすがに鶴の歩み哉　其角
砌にたかき去年の桐の實　文鱗
雪村が柳見に行く棹さして　枳風
酒屋幌に入相の月　コ齋
秋の山手束の弓の鳥うらむ　芳重
炭竈こねて冬のこしらへ　杉風
里々の麥ほのかなる村みどり　仙化
わが乘る駒に雨覆ひせよ　李下
朝まだき三島を拜む道なれば　擧白
念佛に狂ふ僧いづくより　朱絃
淺ましく連歌の興を覺すらむ　蚊足
敵よせ來るむら松の聲　千里
有明の梨うち烏帽子着たりけり　芭蕉
うき世の露を宴の見納め　執筆
惜しまれし宿の木槿の散るたびに　鱗
後住む女きぬたうち〳〵　角
山ふかみ乳をのむ猿の聲悲し　齋
命を甲斐の筏とも見よ　枳
法の土我が剃る髪を埋み置かむ　杉
はつかしの記を閉づる草の戸　重
咲く日より車かぞふる花のかげ　杉
はしは小雨のもゆる陽炎　化
殘る雪のこるかゞしの珍しく　絃
しづかに醉うて蝶をどる歌　白
殿守のねぶたかりつる朝ぼらけ　里
兀げたる眉をかくすきぬ〴〵　蕉
罌子咲いて情に見ゆる宿なれや　枳
葉わけの風に矢篦切りに入る　齋
かゝれとて下手の掛けたる狐わな　角
あられ月夜のくもる傘　鱗
石の戸樋鞍馬の坊に住みわびて　白
我れ三代の刀うつ鍛冶　下

永祿は金乏しく松のかせ　化
近江の田植美濃に恥づらん　絃
とく起きて聞きがちにせん子規　里
船に茶の湯の浦あはれなり　角
筑紫まで人の娘を召しつれて　下
彌勒の堂におもひ打ちふし　枳
待宵の鐘は墜ちたる草の中　蕉
友よぶ蟾の物うきの聲　化
雨さへぞ賤しかりける鄙ぐもり　齋
門は魚ほす磯際の寺　白
理不盡に物くふ武士等六七騎　里
あら野の牧の御召撰みに　角
鵙の聲夕日を月に改めて　鱗
糺の飴屋秋寒きなり　下
稲妻の木の間を花の心ばせ　白
つれなき聖野に笈を解く　枳
人あまた年取る物をかつぎ行く　楊
酒もりいさむ金山の洞　水
この國の武仙を名ある書に書かせ　絃
京に汲まする醒ケ井の水　角
玉川やおの〳〵六つの所にて　齋
江湖々々に年よりにけり　蕉
卯の花のみな精にも見ゆる哉　化
竹うごかせば雀かたよる　重
南むく葛屋の畑の霜消えて　水
親と碁をうつ晝のつれ〴〵　不
餅作る檜の廣葉を打合せ　ト
贄に買はるゝ秋のこゝろは　鱗
鹿の音を物いはぬ人は聞きつらめ　風
にくき男の鼾すむ月　蕉
笘の雨袂七里をぬらすらむ　絃
伊駒河内の冬の川づら　々
水車米搗く音はあらしにて　下
梅はさかりの院々を閉づ　水
二月の蓬萊人もすさめずや　角
姉待つ牛の遲き日のかげ　齋
胸あはぬ越の縮を織りかねて　重
おもひあらはす菅の刈りさし　蕉
菱の葉を柵ふせてたかべ鳴く　風
木魚聞ゆる山陰にしも　鱗
囚人をやがて休むる朝月夜　下
萩さし出す長がつれあひ　齋
問ひし時露と禿に名を付けて　春
こゝろなからむ世は蟬の殼　絃
三度ふむよしのゝ櫻よしの山　化
あるじは春か草の崩れ家　下
傾城を忘れぬきのふけふことし　鱗
經よみ習ふ聲の美し　重
竹ふかき笋ほりに駕かりて　白
梅まだ苦き匂ひなりけり　齋
村雨に石の灯吹きけしぬ　峽水
蚫とる夜の沖も靜かに　化
伊勢を月松に朝日の有りがたき　ト
けや木えり來て橋造る秋　ト
信長の治まれる世や聞ゆらん　下
居士と呼ばるゝから國の兒　水
紅に牡丹十里の香を分けて　鱗
雲すむ谷に出づる湯をきく　春
岩根ふみ重き地藏を荷ひ捨て　水
笑へや三井の若法師ども　角
逢はぬ戀よしなきやつに返歌して　齋
管絃をさます宵はなかるゝ　化
足曳の廬山にとまるさびしさよ　重
千聲唱ふる觀音の御名　水
舟いくつ涼みながらの川づたひ　角
尾長にまじる松の白鷺　風
寢むしろの七荷に契る花匂へ　水
連衆くはゝる春ぞ久しき　ト
　　白

貞享三寅年初春

寶暦十一年秋八月梓

鶴齡堂藏

野ざらし紀行序文

我が友ばせを老人、ふるさとのふるきを尋ねんついでに、行脚のこゝろつきてそれの夜江上の庵を出で、またのとしのさつき待つ頃に歸りぬ。見れば先づ頭陀のふくろをたゝく、たゝけばひとつのたまものを得たり。そも野ざらしの風あるなり。出立つあしもとに千里の懷ひをいだくや、聞く人さへそゞろ寒げなり。次に不二を見ぬ日ぞおもしろきと詠じけるは、見るに猶風興まされるものをや、富士川の捨子は惻隱に見えける、かゝるはやき瀨を枕として、すて置きけん、さすがに流れよとはおもはざらまし、身ぞかふる物になかりきみどり子はやらんかたなくかなしけれどもと、むかしの人のすて心までおもひよせて哀れならずや、又さよの中山の馬上の吟、茶の煙り、葉の落つる時驚きけん詩人のこゝろをうつせる也、桑名の海邊にて白魚白きの吟は、水を切つて梨花となすいさ

ぎよきに似たり。天然二寸の魚といひけんも、此の魚にやあらん、行き行きて山田が原の神杉をいだき、またうへもなきおもひをのべ、何事のおはしますとはしらぬ身すらも泪下りぬ。同じく西行谷のほとりにて、芋洗ふ女にことよせけるに、江口の君ならねば父にもあらぬぞ口惜しき。それより古郷に至りて、はらからの守袋よりたらちねの白髪を出して拜ませけるは、まことにあはれさは其身にせまりて、他にいはゞあさかるべし。しばらく故園にとゞまりて、大和めぐりすとて、わた弓を琵琶になぐさみ、竹四五本の嵐哉と隱れ家によせける、此の兩句はとり分け世人もてはやしけるとなり。しかれども、山路來てのすみれ、道ばたの木槿こそ此の吟行の秀逸なるべけれ、それより三芳野のおくにわけ入り、南帝の御廟にしのぶ草生えたるに、其世のはなやかなるをしのび、またとく〳〵の水に臨みて、波に塵もなからましを、こゝろみにすゝぎけん。此の翁年ごろ山家集をしたひて、おのづから粉骨のさも似たるを

もつてとり、今心とゞまりぬ。思ふに伯牙の琴の音、こゝろざし高山にあれば峩々ときこえ、こゝろざし流水にあるときは流るゝがごとしとかや、我れ亦鐘子期がみゝなしといへども、翁のとく〳〵の句をきけば、眼前岩間をつたふしたゝりを見るがごとし。同じくふもとの坊にやどりて、坊が妻に砧をこのみけん、むかし潯陽の江のほとりにて、樂天をなかしむるはあき人の妻のしらべならずや、坊が妻のきぬたは、いかに打ちて翁を慰さめしぞや、ともにきかまほしけれ。江のほとり、是は麓の坊、地をかふるとも亦しからむ。いづれの所にてか、笠きて草鞋はきながら、歳暮のことくさ、是なん皆人のうき世の旅なる事を、しりしらざるを諷したるにや、洛陽にいたり、三井氏秋風子の梅林を尋ね、きのふや鶴を盗まれし西湖に住みし人容、鶴を子として梅を妻とせし事をおもひよせしこそ、すみれむくげの句のしもにたゝん事かたかるべし。美濃や尾張や大津のから崎の松、伏見の桃、狂句木がらしの竹齋にも鼓をう

つて人の心をまはしむ。言葉皆蘭とかうばしく山吹と清し。靜かなるおもむきは秋しべの花に似たり。その牡丹ならざるは隱子の句なればや、風のばせを霜の落葉破れにちかし、しばらくも跡にとゞまるものゝ、形見草にもならばなるべきのみして書きぬ。

かつしかの隱子　素堂

（本文は泊船集中に在り。故にこれを略す。校訂者誌す。）

三歌仙序詞

さきに名古屋五歌仙熱田三歌仙は、一雙のはうびと也。冬の日選なり次いで顯れ出づべきを、卷のしりへとゝのはざる間に〳〵、とくも春の日の卷の世にもれ出でしより、此のえらびかひなくやみたりなど覺ゆ。世上冬春のふた卷をもて、左右のごとくなし侍るもいかゞあらむ、我徒には熱田の卷を五歌仙に合せてまなびさしむ。かくて其卷のはし〴〵を摘みこぼれたるをつゞりて、蓬がしまといひ、皺箱といひ、古くはこれ後のわざにて、卷のつら、物語に書きなしつ、其の終りもたしかならず、廣くは世に知られずなりぬ。芭蕉の翁、貞享はじめのとしごろ、道をあらたにかりひらき正しくしほりし、身終るまで、十とせあまり一とせのほどに、冬の日のえらびを先とし、つぎ〳〵の卷なほ精しく、骨髄を撰び出されしも少ならず、そをいつの頃いづれのさかしら人がわざにや、

あるが中に七まきをぬきて、七俳集とかぎれるはいと憎し、かいつめて金科玉條なりと思へるも、わづかにまどへるはしならし。初め學べる人是をもて摸寫におき、ことのふしぶしをのみいひうつせば、やがてうはべ髣髴なるものゝ世におほくて、うちに其の眞ごゝろを學びつたふるに疎かなるを歎く、今いふ俳諧は水上に匏をおすがごとく、即轉してとゞまらず。轉變しておのづから古しへにかなふ。おのづからかなふはよしつとめて古き調におしあてたらむはよからぬわざなり。古調のはいかいすなりなどいはんは猶うたてし。見よ此三歌仙、いま脫錐の時にあひて古きを合せ新しきをそへ、木上して同志に徇あたへんと、暮雨菴曉臺龜手をのべはじめにことをしるしいふ。

安永四未夏五月

貞享はじめのとし、桑名に遊びてあつたにいたる

あそび來ぬ鰥釣りかねて七里迄　芭蕉
旅亭桐葉の主、心ざし淺からざりければ、暫しとゞまらんとせし程に

此の海に草鞋捨てん笠しぐれ　芭蕉
むくも侘しき波のから蠣　桐葉
凩に冬瓜ふらりとふら付きて　東藤

尾張の國、あつたにまかりける頃、人人師走の海みんとて、船さしけるに

海暮れて鴨の聲ほのかに白し　芭蕉
串に鯨をあぶる觴　桐葉
二百年我れ此の山に斧とりて　東藤
樫の種まく秋は來にけり　工山
入る月に鶚の鳥のわたる空　葉
駕なき國の露負はれ行く　蕉
降る雨は老いたる母の泪かと　山
一輪咲きし芍藥の窓　藤
碁の工夫二日とぢたる目を明きて　蕉
周に歸ると狐なくなり　葉
靈芝ほる河原遙かに暮懸り　藤
華表はげたる松の入口　山
笠敷きて衣のやぶれ綴り居る　葉
秋のからすの人喰ひに行く　蕉
をとゝひの野分の濱は月すみて　山
霧の雫に龍を書續ぐ　藤
花曇る石の扉を押しひらき　葉
美人の形ち拜むかげろふ　山
蝦夷の聟聲なき蝶と身を侘びて　蕉
生海鼠干すにも袖はぬれけり　藤
木の間より西に御堂の壁白く　山
藪にくずやの十ばかり見ゆ　蕉

ほつ〳〵と炮烙作る祖父ひとり　藤葉
京に名高し瘤の呪咀　葉蕉
不二の根と笠着て馬に乗りながら　山端
寢に行く鶴はひとつ飛ぶらん　葉藤
待暮に鏡を忍び薄粧ひ　山蕉
衣かつぐ小姓萩の戸をおす　藤葉
月細く時計の響き八ッなりて　蕉山
棺急ぐ消えがたの露　藤端
破れたる具足を國におくりける　葉蕉
高麗の縣に畠作りて　端葉
紅染の唐紙に花の香を絞り　蕉山
ちひさき宮の永き日の伽　葉藤
春雨の新發意粽荷ひ來て　藤葉
青草ちらす藤の撮折　蕉端

何とはなしに何やら床し菫草　芭蕉

編笠しきて蛙きゝ居る　叩端
田螺わる賤の童のあたゝかに　桐葉
公家に宿かす竹の中みち　蕉端
月曇る雪の夜桐の下踏すげて　葉蕉
酒飲む姨のいかに淋しき　蕉端
双六のうらみを文に書盡し　葉蕉
琴爪をしむ袖の移り香　端葉
髪下す侍從が娘おとろへて　葉蕉
野々宮のあらし岐王寺の鉦　蕉端
虚樽に色なる草をかたげ添へ　端葉
藝者をとむる名月の關　葉蕉
面白の遊女の秋の夜すがらや　蕉端
燈風をしのぶ紅粉皿　端葉
川瀬行く髻を角に結分けて　葉蕉
舍利とる瀧に朝日うつろふ　蕉端
畏る石の御坐の花久し　端葉
羽織に酒をかへる櫻屋　葉

歌よみて女に蠶おくりけり　蕉
枕屏風の畫になみだぐみ　端
聞きなれし笛のいろえの遠ざかり　葉
三ッ股のふね深川の夜　蕉
菴住やひとり杜律を味ひて　端
花幽かなる竹こきの蕎麥　葉
いかに啼く百舌鳥は吹矢を貢ひながら　蕉
水汲む小僧袖ひやゝかに　端
月明けて打板山をへだつらん　葉
雲は夜盗の跡埋むなり　蕉
むら雨のそゝぎ捨てたる馬の沓　端
ひとつ兎の瓜喰ふ音　葉
笠みゆる人は葎にとぢられて　蕉
男やもめの老ぞかなしき　葉
風くらき大年の夜の七ッ聞く　端
御門をたゝく生鯉の奏　蕉
常盤山常盤之介が花咲いて　葉

霞に殘る連歌師の松　端

右蕉翁眞蹟有暮雨菴

つく〴〵と榎の花の袖にちる　桐葉
獨り茶をつむ藪の一つ家　芭蕉
日影山雉子の雛をおはへ來て　叩端
清水をすくふ馬拵抄に月　閑水
面白き野邊に鮎賣る草の上　東藤
宿のみやげに撫子を掘る　工山
はな紙に都の連歌書きつけて　蕉
暮るゝ大津に三井の鐘きく　端
雪を侘ぶ漁の姥が袖を見よ　山
寢に行く鴨の四五百の空　葉
松風の饗に酒を飲盡し　水
ほとけを刻む西山の僧　藤
烏羽玉の髪切る女夢に來て　端
戀を見やぶる朝顏の月　蕉
秋は猶筌味き物喰ひけり　葉

白子の太夫わが霧の海　山藤
浪よする鯨の骨に花植ゑて　端藤
陰干す於期のかつら這ふ道　蕉端
笠持ちて霞に立てる痩男　桂蕉
五重の塔のほとり夕ぐれ　端桂
鶺鴒の尾を蜘の囲に懸けられて　葉端
風に身を置くけふの討死　端葉
筆とりて朴の廣葉を引撓め　藤端
田舍祭りに物見そめたる　楫藤
うちかつぐ前垂の香をなつかしみ　蕉楫
たはれて君と酒買ひに行く　葉蕉
銀の鉢に鮑およがせて　山葉
おほん歸京の時を占ふ　藤山
鞦韆の東の寺の月凄く　端藤
猿手の粟の何を招くぞ　蕉端
蟬鳴いてまだ澁柿の秋の空　山蕉
草屋幽かに馬の尾の琴　藤山

哀れなる乘物燒いて歸る野に　藤
入日の跡の星二ッ三ッ　葉
宮守が油さげつも花の奥　蕉
つゝじのふすま着たる西行　楫

神前の茶店にて

しのぶさへ枯れて餅買ふ舍り哉　芭蕉
しわびふしたる根深大根　桐葉

其のあした

馬をさへ詠むる雪のあした哉　芭蕉
木の葉に炭を吹きおこす鉢　閑水
はた〳〵と機織る音の名乘り來て　東藤

翁みの路へうち越えんと聞えければ

檜笠雪をいのちのやどり哉　桐葉

稿一つかね足つゝみゆく　芭蕉

みしゆうふくゐりし御やしろに、ふた
たびまうでゝ

磨直す鏡も清し雪の花　芭蕉
石しく庭の寒きあかつき　桐葉

翁膳所へのぼり給ふ時、八橋のはし株、
炭の如く埋れたるをわかち、餞すとて

霜の袖はし株つゝむ別れかな　桐葉

おなじく

冬の空やのし行く鶴のめかれせず　東藤

みやこにあそびて

題二秋風子之梅林一

梅白しきのふや鶴を盗まれし　芭蕉

杉菜に身する牛二ッ馬一ッ　京秋風

我櫻鯛割く枇杷の廣葉哉　秋風
寛にうごくやま藤のはな　芭蕉
日の霞夜鍋の氣をしりて　湖春

山家

樫の木の花に構はぬすがたかな　芭蕉
家する土をはこぶもろつば　秋風

梅絶えて日永し櫻今三日　湖春
東の窓の蠶桑つく　芭蕉
巣の中に燕の貌の並び居て　同

旅店即興

つゝじ生けて其の陰に干鱈裂く女　芭蕉

二十年を絶て古友に逢ふ

命二ッの中に活きたる櫻かな　同

桑名にて

雪薄し鮑しろきこと一寸　同

木曾を經て、武の深川へくだるとて

おもひ出す木曾や四月の櫻狩　芭蕉

京の杖つく岨の青麥　東藤

ふたゝび熱田に草鞋をときて、林氏桐葉子の家をあるじとせしに、又おもひたちてあづまにくだるとて

牡丹蕊分けて這出づる蜂の名殘哉　芭蕉

とかきてたびけるこたへに

うきは藜の葉をつみし跡の獨り哉　桐葉

笠寺にて

笠寺やもらぬ窟も春の雨　芭蕉

途中時雨

笠もなき我を時雨るゝか何と〳〵　同

名月や御堂の鼓かねて聞く　江戸其角

散舟の名月橋の長々し　同仙化

露や降る蜘の巣ゆがむ軒の月　同曾良

商人も見る物とてや船の月　同文鱗

年一夜きしり殘さじ日の鼠　同嵐雪

蓬萊や御國のかざり檜木山　杜國

出船や磯見ゆるまで啼く雲雀　長虹

夕だちは書に書く風のすがた哉　越人

秋の日やちら〳〵動く水の上　荷兮

大萬歳くゞりを這入り兼にけり　夕道

歸る帆のふくらに溜る霰かな　一井

鹽鱈やしほ嬉しがる山ざくら　鼠彈

腹の鳴る音も更行く時雨哉　旦藁

荻枯れて蜉の羽を拾ひけり　東藤

凡兆が亭に遊びて、爐の南といふ事を

埋火の南を聞けやきり〴〵す　其角

おなじく爐の西といふ事を

雪の日や春中あぶれば嵯峨の山　野水

秋の日のかりそめながら亂れけり　去來

我を客われをあるじやけふの月　如行（ミノ）

献立の一にさだまる月見かな　前川

蜀黍の陰をわたるや露しぐれ　荷兮

背戸見せに連れて歩行くや茄子畑　重五

酒うけて散らば今なり花の下　長虹

熱田にまうでゝ

さはへなす虻やうたれん神の注連　江戸專喰

我貌の黒くなるまで月は見む　魚兒

餌かひして戻る箭や鵜の勢ひ　曾良

年波のまことに越ゆる白髮かな　越人

木曾川のほとりにて

流れ木や箭の上のほとゝぎす　丈草

蕣はうら一輪になりにけり　舟泉

冬枯は鶴より低き入日かな　聽雪

正月は聟見る窓の笑ひ哉　羽笠

杜若水より中はつぼみかな　松芳

假りそめに鶉狩行く一里かな　卜信

人ごゝろ鳥放つあり魚はなつ　露川

露凍でゝ筆に汲干す清水哉　芭蕉

尾陽昌圭がもとにての句也。いづれの集にや凍解けてと誤る。

附錄

十二月九日　一井亭興行

旅寢よし宿は師走の夕月夜　芭蕉

庭さへせばくつもるうす雪　一井

どやゞと寛をあぶる藁燒きて　越人

紙漉を見に御幸ある頃　昌碧

琴持の蓮の上をつたひ行き　荷兮
障子明くればきゆるともし火　楚竹
起きもせできゝ知る匂ひ怖ろしき　東睡
亂れし髪の汗ぬぐひ居る　蕉
投げられて又取付けるをかしさよ　井
乳を飲む子の我れに似るらし　人
麻布を煤びる程に織かねて　碧
蘭をとりこめばねこだせはしき　兮
夕立の先に聞ゆる雷の聲　竹
馬もありかぬ山際の霧　睡
小男鹿のそれ矢を袖にいつけさせ　蕉
飛あがるほどあはれなる月　人
風にかじけて花のふたつ三つ　兮
畠につゞく野は遙かなり　碧

四季混雑

月雪の夜をあらそへる風情哉　士朗
宿とりて花に出直す羽織かな　東壺
月たま〳〵人の面をならべけり　春幸
寒そらやたゞ曉のみねの松　曉臺
時雨する日は折り〳〵ぞ時雨ける　文亟
馬立ちて六月寒し楠が下　三州岡城 趙鳧
けふは又小雨さへ降りて秋の暮　方州

○

蜻の髭見る壁の朝日哉　白圖
發心をひるがへりけり翠簾の花　仙臺 五周
後の月翌日は秋なき思ひあり　洛 丈芝坊
つもる後はたゞ散るまでの小雪哉　美角
若葉山國にめでたきひとつ哉　岡城 騏六
虫死んで初冬めきし日ざし哉　入素
のら〳〵と柳見に行く塘かな　曉臺

○

瀬に立ちて妹がふる見ゆ鵜松明　都貢
月満ちて靜かに花のしづく哉　麿三
菖蒲めせ武門かやうに靜かなり　一桑
忘れ花にわすられぬ風の夕べ哉　蕉南
菜の花の白きにはさのみ心なし　方布
舟路よりふねは沖行く汐干哉　岡城 魚日
後の月顯はれて夜の深く見え　五周

○

秋の江の舟に傘干す夕日哉　東壺
花の下に誰れわすれけん小サ刀　越出雲崎 以南
枸杞の實のこぼれて霜のやゝ寒し　士朗
花なかば切りてくれたる葵かな　萬岱
木下川水色赤く秋くれぬ　岡城 桃生
こがらしや樞ほそめに砧うつ　周夢
水うたゝ活きて流るゝ春の貝　亞滿

○

秋の風窓に月見る寡かな　子東
神鳴りて櫻ひらけし夕べかな　騏六 矢作
水鳥の聲吹立つる川邊哉　麥甫 岡城
痩藪や夜の落葉の音寒き　兎六 矢作
枯蓼のふし〴〵高し霜の原　朱雁 同
人いねて一際すゞし閨の月　魯佩 同
青柳や霞めるものゝ中にひとり　呑溟 湖南

○

子規つれなきものゝ限りかな　宰馬
雲赤く日の入りてしばし落葉みる　琴宇 奥信夫
鉦ばかり叩いてはしる時雨哉　蘭雅
草の庵つと出て秋を見付けたり　羅城 岡城
流れ木や翅やすむるはつ燕　婆良 岡城
鷺の羽のひら〳〵と落ちて月朧　雀志 同
ひと本に花こそみしやさし木槿　東壺

○

蔓たれて朝顏清し水の上　事紅

帶うりに花見催すはなし哉　方州（矢作）
蓮咲いて徐（おもむろ）に風のわたる哉　焦尾（奥信夫）
靜さや雪の原行く鞭のおと　南楚
あがり鵜の夜明けて痩せし濡羽哉　子東
秋の雨舍り泣きよる山の中　猿眉
誰れやたぞ月に花見る夜半の聲　白圖

○

蓮切つてこの花洗ふ水もなし　亞滿
夕暮を水札（けち）の啼入る夏野哉　入素
水に添うて流るゝ春の心かな　臥央（奥桑打亡）
鷲一羽つく〴〵と人をながめけり　回車（淺香）
世の田植なぐさみに見る物ならず　露秀（三州中垣内）
風やみて雪に音ある高瀨哉　李貢
のどかさに立出て見れば冬げしき　都貢

○

利酒（きさけ）に醉うて戻るや秋の市　臥央
閑なるは落葉の中の石蕗の花　焦尾
色かへて菊ふたゝびの匂ひかな　白圖（岡城）
花を吹くとき春風のすがた哉　雪巣（中垣内）
蘭の香も秀でよこよひ星の闇　姑牛（岡城）
星高く枯野の草のひかり哉　充路
啞蟬の立ちしほもなくて哀れ也　春幸

○

夕がほに露あぐる見ゆ二日月　羅城（岡城）
雪のうへ歩みかぬらむ蟹の足　竹也
猛き人は猛くも聞かんほとゝぎす　蟻冠
暑き日やさらに心のとゞまらず　斗拙
日の朝や氷柱はらへば玉の聲　士朗
月晴れて地もけぶりたつ夜の秋　烏雪
鯉抱いて夕立過す蘆間かな　子東

○

秋風や夜間に衰ふ鶴のあし　丈芝坊
秋もはやうら菊がちと成りにけり　以南（奥福島）
田螺わる刈葱（かりき）がもとの小家哉　芻古

末の苔なくてもあらむ花あふひ　帶梅
鹿の聲誰が燒帛（やきしめ）のへだてより　琴宇
更衣ひとり笑み行く座頭の坊　曉臺
有るが中に白蒲公英に春の露　宰馬

○

起きて見れば夜も散るなる櫻哉　呑溟
岩梨や野上あたりの艾見世　朱雁
若竹の五尺にもたらで涼しさよ　一桑
蘆かれて雨にたわらぬ强みかな　蕃渉
麥刈りし跡や細江のぬれ鼠　衆甫
袷着て行くべきところ多きかな　魯雄
更衣元日の後のいさみかな　磨三

○

若竹は月にやしなふけしき哉　曉臺（矢作）
花ひとつふたつ一口なすびかな　千久婦
蝶つら〳〵塘こえ行く日暮哉　李沛（洛）
しみ〴〵と冷ゆる日石の光り哉　貞雅
朝妻や小舟隙なき初月夜　都貢
きり〴〵す啼いて茶筅の音高し　是山
斧の音ふかくも入らず冬の山　事紅

○

夕月や池一ばいに梅のはな　南河（南勢川崎）
小ざかしや網うつ先のかいつぶり　滄洲
夕ぐれや江に吹く風の冬ちかき　楚竹
降る雪の果なく見えて日は暮るゝ　眞魯
雨ほそし新樹のふかみ鳩の鳴く　只浩
草臥れてぬる夜に花のあらし哉　逸漁
蜑の砧その夜は海もしづか也　騏道（大津）

○

一むしろ芋干す寺の冬がまへ　萬岱
後の月身をひそみても月の前　何大
暮れかけて水に猶すむ鵜の目哉　文亟
里の小春横たふ竹のけぶり哉　趙鳧
日にそひし色や牡丹の夕凋み　嘯珂

松ばかり青き師走と成りにけり　一奎
月もれて雪の降るまで見ゆる哉　曉臺

○

白蓮の花より出づる旭かな　粟津重厚
秋の風地を吹くまでに募りけり　同班鳩
網代うち物おもふさまの日暮哉　水口貫志
歸り咲くさくらに近し後の月　自子無曲
露に似て花ほそかりし野撫子　大阪畫涼
散るころの香はもれやすし梅の花　津銀岱
舟に見る月の中より須磨の梅　飯田蕉雨

○

けふは只うらえを梅の命哉　坂本千當
雲水の中に失せけり春の鴈　桐五
淡雪や亂るゝほどの風もなし　東甫
椋の木の南表やふゆの月　許風
五月雨や鵜殿の蘆を降りくらし　湖南尤露
紅に誇りぬ霜の烏瓜　樂二
流れ木のながれとゞまる霜夜哉　馬涯

○

水涸れて雪三尺の漂木かな　葛巾
宵啼の鷄捨てゝけり竹の霜　赤間關騏道
凩や松の下行く鶴の聲　洛羅風
ものかゝぬ扇にうつれ子規　其成
埋火に家のあらしを聞く夜哉　箕風
落葉して日南にたてる榎哉　東武成美
花のあたり明るく雨の降りにけり　仙臺巢居

飯貝轟のさとを隔てしさくらのわたし
こゆるに、山は遠からず近からず、妹
なり脊なり心かよはして
山鳥の寢に行く中をよし野川　曉臺

桑下に三ツの卵あり。大いなること掬するにあまれり。或人袖にして家雞に照孵さしむ。日々羽翼とゝのひ鳴聲律呂にかなふ。宇宙に摶て南溟を轗しめしとかや、こゝに三卷の金玉あり、麻中にひそむ。あか師暮雨叟啐啄して門下の龜鑑となす、予に附屬してひめ置く事三十歳、平安の菊舍響きに應じて題を世に鼓舞せむと乞ふ。强ひていなむも、實にあしたをしらぬに似たりと、いさゝか補綴を加へ首尾を全うし、やがてこぶしを放さむといふ。

淡海青雲居識

一はし

爰に一書あり、名づけて一橋と云ふ。これ陸奥の住鈴木清風、俳諧の修行者となりて、都江戸とわたり盡し、これかれいひかはせし卷十にみちたるを板行して、今も見そなはし後の代にもかたみ〳〵と殘さむとならし。其名につきて是を見るに、野田の入江のふりけるさまにはあらで、かの難波わたりのといひけむやうに、此道におもむくもの、此のさかひをきゝて、あからめなせそとおもふにやあらん。まことに是詞を心地に託して、其の花を詞林に發するものか、抑も俳恩は一橋の雪中驢子の上に在りとやいはむ。于時貞享三年九月初六の日、洛友靜みだりに序す。

江戸　調和　芭蕉　立志
　　才麿　其角　擧白
　　コ齋　嵐雪　曾良

京　一晶　如泉　言水
　　湖春　信德　仙菴
　　素雲

羽州尾花澤
　　鈴木清風　選

三月廿日即興

花咲いて七日鶴見るふもと哉　芭蕉
懼ぢて蛙のわたる細ばし　清風
足踏木を春まだ氷る筏して　擧白
米一升をはかる關の戸　曾良

名月を隣りはねたり草まくら　コ齋
枝見ぐるしき桐の葉を刈る　其角
墨衣ふるへば虫のから落ちて　風
內外の下向しづかなりけり　白
すでに立つ討手の使いかめしき　良
一夜の契り錢かつけたる　蕉
松明に顏見んといふ君はたぞ　角
生きて捨子の水にながるゝ　風
影形ちしれぬ敵を世に歎き　良
ことしの餅をおもふ山寺　齋
雪を持つ樫や椹に露みえて　白
虹のはじめは日も匂ひなき　角
しづみては溫泉を醒す月すごし　蕉
三ッ行く鹿のひとつ矢を負ふ　齋
勢〻と軍に氣ある朝薄　雪
男ながらの白粉をぬる　風
膝琴に明の風雅を忘れざる　角

涙をり〳〵牡丹ちりつゝ　白
耳うとく妹が告げたる杜宇　蕉
つれなき美濃に茶屋をしてゐる　良
札焼いて刀ばかりを傳へけり　風
我がうつ鷹を殿の御拳　角
楢紅葉狂歌やさしくよみ添へて　齋
京の月夜は嘸躍るらむ　雪
物となくものやむ人の獨寢に　白
眉ぬく袖の翠簾にうつむき　蕉
からのふみよめぬ處を打ちやりて　良
ひともじ買ひに雪の山みち　齋
哀れさは笘屋に捨てし破れ網　風
何やらなくて鹽やかぬ浦　蕉
相國の植ゑたまひけん花と松　角
車をおりて春のやすらひ　白

春行くに頬愚かなる蛙かな　湖春
茅花のそよぎ蠶矢一筋　清風
櫻木や朝靜に音さけて　同
ざれて猿の陰嚢ほすらん　春
月髣髴笑ふか啼くか子規　同
嫗住む庵籠のいとくる　風
光廣の情を殘す宿有りて　春
別れにふみし八朔の雪　風
曉の夜着に螢の秋枯槁ぬ　春
余所のをどりに佛唱ふる　風
水尾や木槿を枝折る垣ふかし　春
鳴子くづれし長月の暮　風
日の廿日雨見る雲の離れたる　春
札うつ堂に姉や妹　風
武夫の狂氣三年今さめて　春
麓の篠屋富士を珍らし　風
旅とても柳の二月花彌生　春

日のゝどやかに老馬いそがす　同
汲みはてぬ憂世を鮎の命にて　風
幾人隱す山城の谷　春
詠むれば蓬をふかぬ軒ひくき　風
小雨にもゆる埋草の骨　春
布子着て布子に歸る北のはて　風
終に答へず黄檗の釋迦　春
神鳴の落ちても松の色青き　風
塒いづくに鵜の千羽飛ぶ　春
いにしへの京の七夕指折りて　風
夜さりの鏡月に顔見る　春
萩そよぐ地震に妻の恐るらん　風
土手につけたる寺の裏道　春
うれしげに罠をそれ行く鳥一ッ　風
けふまで錄にほださるゝ哉　春
はる〳〵と天の岩戸の朝氣色　風
主を憐れむ道のべの數珠　春

月花の廿九日につまりたる　風
寢てばかりなる蝶のはかなさ　同

とまり江や火を焚く舟に寄る蛙　才麿
霞を遠き蔦の折笛　清風
手のとゞく軒端に梅の鎖して　同
世になぐさめと咄し書續ぐ　麿
年經たる軍治まる秋の月　同
溫泉のふもとに見るほどの萩　風
石買に木賊刈るなる徑分けて　麿
泣く〳〵きゆる幽靈の衣　風
氣はさすがきたながらざる乞食哉　麿
實なき櫻の梢にぞ臥す　風
子を殺す愁ひは夜の子規　麿
いつかふむべき古郷の橋　風

うち荷ふ炮爐重き師走にて　麿
赤犬ほゆる入逢の月　風
涙盡きず駒迎へたる關の跡　麿
綾卷いだく老女なつかし　風
花はみな松あるまでの禰宜の家　麿
柳に見ゆる遠里小野の鴻　風
田の中に耕殘したる石の塚　同
京につれだつ和歌の物しり　麿
晝涼し月と星との明らかに　風
湯殿の道の踏枯す笹　麿
優婆塞の折らぬ覆盆子は茨にて　風
野に淺ましや馬の煩ひ　麿
瀨を落す筏遙かに留めかね　風
大麻作る伊勢ぞ貴き　麿
年の夜を圓位に似たる假寢して　風
誰が人魂の空に行くらん　麿
濱庇津浪一ッのうち越すや　風

夏をみどりの麥二三寸　麿
皮つきの鳥居に吹矢殘りけり　同
氣のみだれたる昨日くやしき　風
懷の骨はかへらぬ世なりしを　麿
道守る山に五日とめられ　同
花四本鶯二ッ月七ッ　風
春を現の酒に游げる　同

馬子の袖に晝顏かゝる假寢哉　言水
拳に据ゑて鵜の羽を干す　清風
東雲の石切る音をたよるらん　同
風に折れふす椎の梯　水
詩を捨つる雨名月の日を惡み　同
百里に弱るひとつ鴈がね　風
ほの白き桔梗や美女の塚ならん　水

しのびの小川渦あらく卷く　風
板屋うつ霰に牛のめさめたる　水
夫九十に嫗五ッまする　風
六月のはじめ稻かる國有りて　水
魚灯のかをり佛いやしき　風
時うつる世を侍の腹きらず　水
文掘出す露の下芝　風
嫉れの虫盃を游ぎゆく　水
幣の起ふし月は暗々　風
蒔菜釣る松の見越に花散りて　水
琵琶負ふ法師若草を出る　同
埋め金あやな雲雀の子をつかむ　風
窓のすさみに首帳をよむ　水
大和路の釋迦雪霜の覆ひせる　風
いつ齒朶葺くと母に尋ぬる　水
世に見ゆる敵鞍に腰かけて　風
岨守る宮は五町地にさけ　水

照々とうとろの中に火の幽か　風
蛸突く賤の引浪をまつ　水
六條に今陸奥の道絶えて　風
もる露ながら伯父の屋を繼ぐ　水
月影の夜すがら廟の草刈りし　風
身ふるふ羊秋さむげなる　水
明暮を山見ぬ舟に楫折れて　風
我れ足袋はかず一冬を過ぐ　水
いかなれば棺の中に產れたる　風
麥の四尺に樗くもれり　水
花稀に泥引く筏跡ありて　風
木魚に淋し二月の山　同

見るべくば乘馬なくて山ざくら　立志
菴のあとの蕨ある芝　清風

春の雨石の寛の音すみて　同
月になるより蚊の二ッ三ッ　志
語りさす平家哀れを知せけり　同
畠あたらし松の風折れ　風
神主の水汲む眞間の宮所　志
うは着しるべに死骸尋ぬる　風
母親の利口跡先しどけなし　志
礎ばかり老母草ひともと　風
淡雪の雀おり立つむら〳〵に　志
日のつる〳〵と鉢ひらく聲　風
三里來て白く見えたる京の町　志
女房をさらす牛の小車　風
戀衣假名に染めたる名のにたり　志
端歌聞せに龍田宮城野　風
花に入る月をやどりの瓠賣　志
杉菜にふかき春の炭竈　風
蟾の居て汲めぬ朧の清水哉　同
心に負けし尼の境界　志
破魔矢みる師走の市の闇敷き　風
棺舁過る晝なみだなき　志
森〳〵と社頭に松の風すみて　風
人のあたまにとまる蜩　志
さま〴〵の燈籠見による夕月夜　風
胴腹えぐるいなづまのかげ　志
いとしさの餘る此身の置所　風
おもひに足らぬ涙もどかし　志
僞りのある世と起請返されて　風
われ踏みへらす住よしの橋　志
水無月は三日と宿に寢ぬ夕べ　同
庵室紙帳つるもむづかし　風
摘むほどは莧生茂る花の跡　同
千葉野の駒に聟迎へけり　志
俳諧の修行者とむる朝の雨　同
茶杓見立に分くる竹藪　風

東都に聞えし人々連の中に這出侍りぬ
有るが中に常山がもとの蓼一晶
花しべ高き濁り江の蓮　清風
鹿樑つむ奥の籠に人なくて　同
廿日過ぎたる盆の月かげ　晶
はげ山や日ぐらし鳴きて曇るらん　同
簗の火消ゆる秋の朝かせ　風
榊持田中の井戸に水のみて　晶
軍がたりの松の十かゝへ　風
釣鐘に石うつ人の夕涼み　晶
猿の胃を賣る津の國の人　風
梅ちりて花咲くまでの眠たさよ　晶
たゞ陽炎の墓に塵なき　風
巣をかくる寛の燕貌出して　晶
二つぶ三つぶ雨草を打つ　同
月入りてしばし隣りのやねみえず　同
旅寢の砧海のなる音　同
長崎の初かりがねを聞きに來て　同
持戒の尼と俗の法師と　同
箔消えて瓦は土をかつぎたる　風
七日日を見ぬ晝のともしび　同
砂漉や汐去る水の清からん　同
馬さへ京を跡に足せず　同
木の間もる伽藍煙のうづまきて　同
菫が奥の簫をほり得し　同
年の雪春百日に過ぎざるや　同
娘あの世に雛を詠めん　同
葉隱れの繼穂に花の一ッづゝ　同
くまぬ野井戸は畜埋みし　同
曙の月に片輪の子を捨てゝ　同
無佛の國に菊萩ぞなき　同
十分は黐るゝ、たらぬに哀れあり。是
はしきれとして世人の憎みあらんかし
雨の日や門提げて行くかきつばた　信德

いつ刈る麻の機を織りやむ　清風
曉の樟木を問はぬ程さりて　仙菴
纏横たふ月の川隈　德
松風や相撲を立てし跡ばかり　風
柿圓ながら塵に朽ちたる　菴
蜻蛉の飛ぶさ哀れに夕されて　德
人燒く野邊に肱をかたしき　風
古郷の琵琶を嵐の音に替へし　庵
文に張子の佛作りて　德
鴻撫づる袖の匂ひの懐しや　風
七日をさめぬ夢の俤　庵
虛なる銀杏が奥の水の音　德
崩れ車の秋をつれ〴〵　風
余所に月聞きし計りの盲尼　庵
露の小莚捨子育つる　德
花吉野京に矢數の名を留めん　風
朧のやしろ記錄尋ぬる　庵

蛙鳴く星のあさら井水さびて　德
人とはぬ間の鶴の毛をひく　風
物うらむ女房うへの衣さきし　庵
佐夜の松山艶に死すべき　德
もろともに夕日を蟬の聲かれて　風
稀れに童の粮を春く　菴
川座敷隣垢離とる男有り　庵
梨の下枝に礫うつ音　德
百炷香月を小雨て空寂し　風
三味線法師乳母薄霧　庵
拜み行く常には關す御堂かな　德
花の彌生の廿日過ぎけり　風
獨活蕨竈の煙り絶え〴〵に　庵
ひばり巢かくる岸の捨ふね　德
駕輿にあやし娘の不言　風
老婆なさけを楢に飯盛る　庵
東雲や四月八日の鐘聞いて　德
汲みたらぬ筧に涼む夕べかな　風

乙鳥の後待つほとゝぎす　庵

麻かり侵す山笹の陰　菴
馬かばふ聲すむ月の明けがたに　風
鼻の先する相撲ちり〴〵　菴
楢柴や椎とりつくす跡さびて　風
京にほしがる我が菊の長　同
三鳥を君が信にゆるしけん　同
同じ毛よろふ別れさまうき　角
こがれつゝ奪取てのる蜑小船　角
朝夕かはる松しまの妙　風
草の戸の丸寢をかしき姿共　角
尿して行く鹿の足おと　角
霧なびく方を翹に導かれ　仙菴
ゆからぬ塚に萩の折れさす　風
殘る月誰が旗竿の朽ちぬらん　菴
ほうこのなかば母を追行く　風
大晦花は心の花にして　菴
新町の晝島原の夜　風
涙ぐみ七里が渡し跡遙か　同
孕める容水にやつれし　菴
入相の鐘に籠菜を戴きて　風
鳩の藪垣ことばかはしす　菴
千早振るいつの帝の捨社　風
舍利拾うたる雨の明ぼの　菴
淺茅生のやどりに啞の物云うて　水
晝盗人の牛に乘行く　風
讀みさらぬ石碑に己が世を悔ゆる　水
すげなき松の陰に火を燒く　風
あやしきは翁に龜の背負はれて　水
虹切る釼夕月に入る　同

塔横に蔦や眞葛の這ひかゝり　風
赤子の飢ゑし秋の小夜風　同
小雨降り足駄ふみ欠ぐあやわかず　水
手づからゆする中川の船　風
妻やなき燕も花に羽折れて　水
風鈴かなしき木瓜の捨垣　同

武藏野に春あり。山城に夏あり。季を
しらぬ奴あり

嗚呼いづれ花月に雪子規　仙菴
亞方にめぐる六十の六所　清風
初陽の數の子牙に年暮れて　同
今日のうつゝの世にとめる告ぐ　菴
手をかけて空の桂を枝折る哉　風
萩ふむ童池水あやふき　菴
施餓鬼守る女に髪を生させて　風
別れを恥づる鵙の曙　菴
十廿途をふさぐ虚車　風
ちからためしを松の根がへり　菴
日の夕べ御湯の絶えたる釜さびて　風
峠ひとつに富士を見かくす　菴
獵船の風うたゝ寝を驚きし　風
雨なき月に梟を聞く　菴
膝卷や墨の衣のつらからん　風
牡丹の種の消えて秋來ぬ　菴
奈良の京櫻七重に咲かざりし　風
水をおぼろの礎にたつ　菴
鋤の刄に蛙はもろき命にて　同
色百色の舍利の百粒　風
宮づかへ局はつらき世を知れる　菴
子をつかまれし鷺の深山路　風
雨乞のかへさは星を見ざりけり　菴

陸に朽ちたる帆ばしらの折れ　風
十二年先の丁を指ふせて　菴
しめ出されたる吉原の里　風
小夜の雪をしや袂の香をふるふ　菴
礫ひとつを神にうらめる　風
落武者の行衛隔つる禁川　菴
青磁をうづむいつの朝月　風
麻かりし畠は露のしぐれけり　菴
男鹿二ッの玉によわりし　風
大空の谺木魚の音に絶えて　菴
承應殘る石橋の苔　風
實植せし花一囲に餘りけん　菴
巣だつ雀のねぐら見かへる　風
種蒔く人の歸るかた原　清風
朧月炬の松を踏消して　同
柴の戸しむる犬幽かなり　和
網すきてあしたの風を思ひける　同
疎き眼に山近く見ゆ　風
武藏野の記を書きながら哀れなく　和
鬼灯の音に世を捨てし妻　風
中々にぬれ衣さらす月の奥　和
霧にさまよふ埋木のふね　風
折節は蘆火たく屋に鍋借りて　和
佛の像を岩に切りつけ　風
曉の蝙蝠聲のいとゞしく　和
女を負うて跡を見かへす　風
戀しらぬ草刈は草を刈つて居る　和
古き首に花ぞ日覆ふ　風
蝶飛べば口を揃ふる池の鯉　和
空駕籠捨てゝ眠る陽炎　風

青柳に鵜の背すゝぐ夕べかな　調和

心なく親死ぬ傳を待つのみぞ　同
見ひらく僧の山に入りつゝ　和
蚊の逃ぐる眞柴の煙り打ちしめし　風
京の草鞋を捨つる松の井　和
不破の關越す日計りは冠着て　風
兼て契りし阿闍梨呼出す　和
夕顔の種とる頃に成りにけり　風
深山は雪車を削る秋風　和
書を擔ひ月すむ方に赴きぬ　風
碁石拾はん波の象潟　和
けふまでの命は孫に養はれ　風
火たつに近き雪の橋　和
またぬ夜の障子に俤の嬉しくて　同
實を見するためのそら泣　同
春の日は鳴たつ澤のさもなけれ　風
松おのづから正月の寺　同
花守の花なきうちは寢安くて　同

雨あたゝかに風のそよ〳〵　風

七月朔日興行

松暮れて塔は動かぬ涼みかな　如泉
わくらにてらす京の葉櫻　湖春
舞ひさがる燕に蛇の目を覺めて　言水
陸引く舟の日をおぼろなり　仙菴
彌生山笠一群れの鑓遠き　信德
不思議の里に熊の子拾ふ　素雲
朝月やなら梁丸太の崩れたる　清風
雨二夜サのあとの川霧　筆
世をうしと出づればよもに虫鳴いて　長齋
ふるき瓢の壁にからつく　自樂
汁の具の品面白き冬なれば　魯隱
草鞋をほどく伊賀の古郷　有中

今なるは初瀨の寺の鐘かとよ　國
つらりと並ぶ手習の子等　瑞
卯の花の陰をつれ行く裸馬　馬
潮のとほらぬ樋をふせにけり　瑞
靜かさに節句のひと日もてあまし　友
鑓にかけたる三日月の形　國
花見にと女車のたちならび　齋
戀しる神を祈る陽炎　瑞
誰が跡か帋燭落ちる石の上　馬
袖かきあはす廊の明ぼの　國
今の間にふり埋みたる雪の松　齋
ちひさすゞめがなじむ掌（てのひら）　樂
稱名の外は物いふこともなく　隱
かなしきものや弓も兜も　中
ほん〳〵と洞に打ちこむ浪の音　瑞
ふりむく上は秋のしら雲　馬
芋の葉の霧ふりこぼす夕間暮　國

寢轉ぶほどの窓の月かげ　齋
いち時に入らるゝ風呂を讓り合ひ　樂
槇の木だちに鐘響くなり　隱
はや河を瞬くうちにさしくだし　中
菊太どものこひあさるかな　瑞
かり入れし麥もこなせぬ五月雨　馬
宮の普請のかり葺がたつ　國
ものがたるやうに及釜の鳴り出し　齋
御幸の沙汰も先づのびにけり　樂
あふ坂や關の茶店に餅搗いて　隱
帶のあはひにはさむ木硯　中
手から手へうつせば消ゆる初雹　瑞
七ッか四ッの稚たはむれ　馬
寶晋子酒のさかなを求めたり　國
梢のかげを床のまの月　齋
菊すゝき黃金白銀ちりばめて　樂
こゝらに落ちよあまつ鴈金　隱

湖の浦のとまやは蜃もなし　中
くち三味線のあとうちて行く　瑞
ちる花を扇の上にひろひのせ　馬
火をたく方はかすむ夕ぐれ　國

自樂
魯隱同
有中
瑞馬
友國校
長齋

桃の實序

其のむかし、ひとつの桃の實ありけるが、中頃西王母が袖にかくれて、世に知らざる事としありけり。今とし東方朔出できたりて、ふたゝびもを携へ、長安市中に種をうゑさせ、千載不朽の妙術を傳ふ。

安永四乙未孟冬の日　半化居士

桃の實

富花月

草庵に桃さくらあり
門人に其角嵐雪あり
雨の手に桃と櫻や草の餅　芭蕉翁

菓子盆に芥子人形や桃の花　其角
桃の日や蟹は美人に笑はるゝ　嵐雪

かゝる翁の句にあへるは、人々の譽れならずや、おもふに素人の句は、青からんものをと、人はいふらん思ふらん

しろしとも青しともいへひしの餅　兀峯

夏題十五句合　都鄙萬人

卯花

うの花や蠣がら山の道の隈　其角

卯の花やせはしく市に出づる人　兀峯

若竹

わか竹やきぬ踏洗ふいさゝ水　同
若竹や鞭にわかぬる箱根山　其角

鰹

人のもとにて

人の誠先づあたらしき鰹哉　同

上戸に寄下戸

酒よりは鰹に酔うてくるしいか　兀蜂

蟬

蟬いづこあみがさの日をもる日陰　同
せみ啼くや木のぼりしたる團賣　其角

夏頭巾

晝よりいねて

うたゝねやかぶりつめたる麻頭巾　同

少年達になぶられて

此男みゝづくらしや麻頭巾　兀峯

幟

誰が馬ぞ幟見するも梓弓　同
幟網沖には幾つ帆かけ舟　其角

五月雨

貌拭ふ田子のもすそや五月雨　其角
鬼門射る弓もゆがみぬ五月雨　兀峯

夏草

河邊

なつくさや橋臺見えて川通　其角

化野

居士信女かくす小草の茂り哉　兀峯

蚊

旅泊にて亡人の忌日にあふ

草まくら蚊に施行とて喰はせけり　同
蚊遣火に蚊屋つる方ぞ老ひとり　其角

水鷄

水鷄啼く夜半に旅行の勤め哉　同

喪のうちをそろ〳〵たゝく水鷄哉　兀峯

瓜

澁紙の言ものよ瓜つくり　同
ならはしの鹽茶のみけり瓜の後　其角

夏川

夏川に藏より仕出す簀子哉　同
なつ川や裾をかゝげてざんぶ〳〵　兀峯

麥

身にあたれ麥吹分くる風の筋　同
秋しらぬ茂りも憎しからす麥　其角

夏

傾城の夏書やさしや假の宿　同
つく〳〵と夏書の筆の命かな　兀峯

心太

うれやうれわきて糺のところてん　同
順禮のよる木のもとや心太　其角

雑玉

春

つふ〳〵と梅咲きかゝる霞かな　尚白

野梅を折り大根にさして家に歸る

偶ひがたき梅の根となれ土おほね　兀峯

初蝶の見ておく芥子の二葉哉　好春

飛ぶ蝶も踏割りぬべし薄氷　文鱗

梅雪亭にて

つゝじ咲くうしろや闇き石燈籠　桃隣

梅の散る所こそあれねぶか畑　風笛

鶯や下駄の齒につく小田の土　凡兆

生きてある蕗の塔見る山路哉　即章

初鰹や水田の小芹薄氷　定耕

芹摘や御歩行一はなこねて行く　野徑

冷酒にのみつく頃かもゝの花　曲水

沖にけふ足跡つくる汐干かな　吉治母桃女

淺間嶽にて

永き日に遠近人とならふよや　兀峯

五幾内の花落合へよみをつくし　雲鹿

暖き日や賤の蟹とる玉たすき　峯嵐

山あひや左へよりておぼろ月　兀峯

花の日も田螺にくるゝ鴉哉　一伴

須磨寺の花の制札に、一枝を切りとらば一指を切るべしと、義經の戒れられし情を感じて

當代も指切る事やはなごゝろ　兀峯

世の花や五年以前の女とは　其角

此句をおもふに、玉ふちの笠きたるは、今の世に乞食女ならではなし。然れば小町が世にふる樣もさこそかはりて思ふらんと、晋子がおもひ付きたるなるべし。五もじに世の花と置きたるは、花實のそなはりたるにや。

春雨やわが魂の行きどころ　水口芥舟

うれしくも去年の繼穂の木目哉　野蝶

此せまき庭へ來たるか百千鳥　一牛

年寄も皆女夫なりさくら狩　莞笑

竹の葉のへゝにかすみかな　峯青

寺子共墨を落して花見哉　何羨

金錢花夕陽につるゝ眠りかな　百里

畑打に替へて取りたる菜飯哉　嵐雪

菜の花や小屋より出づる渡し守　史邦

行く雁に櫻一ふさ付けてよし　兀峯

立籠めて淋しがらせん春のくれ　普船

舞々か暮春になりぬ花莚　其麿

夏

馬士起きて馬を尋ぬる麥野哉　其角

うつくしき人猶結ぶ清水哉　晩翠

柚の花や庭へ下りたるついで有り　彫棠

飛ぶ蝶やまぐれあたりに白牡丹　桃隣

泥見えぬ程や水ありかきつばた　團風

嵐雪

芥舟

和風

可听

兀峯

里東

兒の手の玉にもあまる眞桑哉

湖の螢の果は富士黑し

我庵は階子もいらぬ菖蒲哉

追付いて砂道遠し郭公

五月雨や一聲賣りし物の本

骨折や闇の五月を行く螢

餞別

帷子を洗はずにやるなごり哉　正秀

母の背におく露祗る鹿子哉　知義

常夏にゆかた吹きとる風いかに　兀峯

蚊二ッの力をためせ蜘の糸　問隨

竹の子の伸びて甲斐なき灰屋哉　桃子

白雨や先づ石竹を引起す　樂長

晝宿の白雨かなし馬の聲　峯風

土用干花の塵ある袂かな　遲梅

湯あがりや蟬鳴止んで夕烏　雖志

僧帶に團さし出る砌かな　一蜂

白雨に裝束こそはしづかなれ　岸水
大つぶの雨百ばかり蓮にほし　梅員
さなきだに肌ぬかしませ蟬の聲　其由
涼しさや北よりおこる帆掛船　尚白

隱者の住所をとひて

あまつさへ茂りにけりなしのぶ草　貞直

此句下七より下五までは、作意なきに似たりと大かたに見侍らば、作者も思ひ捨つべき句なるを、是此上の五文字にて、發句の正意を顯はし侍る

土用中

きのふをも峠といひしあつさ哉　彫棠

つねに人のいふ事をたゞにいひ出でたる句に、かく情出でくる句あるもの也。風雅に心をよせば、人はうごくにもぬるにも心を付くべき事にや

頓て死ぬけしきは見えず蟬の聲　翁

此の句、人上渡世天道地變にも、かゝれる名句ならんと、世こぞつていひ侍りぬ。なまじひに註しては花實をそこなふたぐひなるべし

綿の花たま〳〵蘭に似たる哉　素堂

例の素堂の感情、蘭よ〳〵との風雅にこそ

秋

家に歸りて

見舞うてやなくてほこえし宿の萩　肅山

堀氏の妻の追善

秋の夜や紙燭ともして泣く涙　貞直
その樣はうしろ田守らぬ案山子哉　全峯
靈祭母屋の妻戸の音は何　嵐雪
送り火によわるか足のふみ力　兀峯
鬼灯は傾城のふく調子かな　進歩
秋のかぜ貌に蚊帳のかゝりけり　知義
野男も力なく見るすゝき哉　梅子
耳づくの頭巾吹きとる暴風哉　愚口
茸狩や大かた買うて歸るもの　流水
蟷螂の鵙に及向ふ譽れかな　兀峯

寢かへれば枕をつたふ碪かな　隨意
草まくら疊の上も落穗かな　龜翁
名月や門へさしくる潮かしら　翁
川筋のせき屋はいくつけふの月　其角
名月や先づ蓋とつて蕎麥を嗅ぐ　嵐雪
名月や緣とりまはす秬のから　去來
駒迎へ鼻かはきれつさねかづら　兀峯
冬瓜の毛ふかくなるや後の月　曲水

木曾塚にふして

木曾殿と背あはする夜寒哉　又玄
我れが身に秋風寒し親ふたり　鬼貫
拙さや牛といはれて相撲とり　彫棠
夕陽や合羽干したる露のいろ　兀峯
玉虫の光りや死んで後の事　進歩
人々のうそを語らぬ月見哉　一鵬

高祖の臣を探題して、我れ韓信を得たり

唐秬にたゝかれてゐる鹿驚哉　兀峯

仁意十七年回忌

おもふ夜の雁が音寒き背かな　貞直
川つらに楫こふ聲の夜寒哉　仙化

冬

萬句興行

見しりあふ人のやどりの時雨かな　荷兮
鷺からす片日かはりや夕しぐれ　其角
氷る江や中に捨てたる樽もよし　兀峯
口切やのしめの裏の貧乏さ　洒堂

山中

松寒し蜘ひく鳥の沉む蘆　路通
はつ雪に何して居るぞ隣どの　兀峯

田家

里の屋の見込も深し鷹の糞　晩翠
石地藏ひとつは握る丸雪かな　尖峯
凩や柴になしたるくづれ橋　摘山

寒垢離よおのれ本間の女方　峯及
石臺の松さへ寒し夜の月　志計
網代守大根盗をとがめけり　其角
朝霜や屋根つたひ行く鶏の息　茂門

芭蕉庵に

花鳥や見出せし冬の有所　兀峯
一聲の念佛かはゆし網代守　德之
おのが子に見違へられな網代守　知義
寒聲の出ぬを笑ふか川ちどり　知春
淡路まで渡る千鳥よ聲きれな　烏水
先づ杖をはじめに燒かん冬ごもり　兀峯
月寒し八百屋が軒の破れむしろ　貫知
武士ならば雪の蘇鐵は誰れならん　三夏
冬の夜や八ッ半時なる犬の聲　勒也
里神樂ちはや仕丁にもらふたか　石龜
煤掃いて見れどもとの厩かな　兀隨
鴨飛べば一筋ながきしづく哉　氷花

旅行　數百里程多少難

笠の緒に口あけて行く雪吹かな　兀峯
鶏や榾燒く夜の火のうつり　酒堂
陰をしき師走の菊の齡かな　露沾

雑玉終

第三迄

寺中花

新發意が花折る跡や山おろし　嵐雪
皆躾しませ酒の糸遊　兀峯
出してよき棟を節々霞して　芙蓉

同

うらゝさや野馬ふりむく朝日影　兀峯
千里の燕水に聲あり　琴藏
しほ風に岬の櫻しめりきて　沾德

同

梅が枝やより添ふ君が髪の曲　兀峯

東風ふく下に梅の薫　其角
祀春のひかりのやはらぎて　同

同餞別

いとゆふや馬の尾髪の及ぶまで　貞直
聲吹送れ山際の東風　兀峯
さりとては櫻咲きけりとびぐに　進歩

同

うたゝねやかぶりつめたる麻頭巾　其角
何をゆするぞ窓の若竹　兀峯
夕月に筆の命毛(すかし)賺し見て　同

同

何となくかはゆき秋の野猫哉　同
我れもかゝしも默る夕ぐれ　一峰
岨の井はうごかず月の缺見えて　山夕

同

わきはとも宇治橋ばかり霧晴れな　不風
酒なき船に秋の夜の明け　知義
峯の月松ちよぼ〳〵とかげろびて　兀峯

同

世の事しげき中に、志まがふ事なく
とふらひ給ひける人に對して

水鳥や氷にすゝむ夜の興　路通
氣もかるゝとも枯蘆の雪　兀峯
廻り込む澤より奥に家立てゝ　晩翠

○近き頃、世に郭公の句にいさをしある程の句のひとつも聞えぬは、いかなる故にか有りけんと人の申されしは、げにさる事ぞかし。東の道の紀を人毎にすなるうちに、富士の句は必ず落ちて見え侍る、之を以て是を思ふに、郭公と富士とは、そなはれる風雅の威ある物なれば、作者の風雅の富士郭公に負ける故なるべし。洛陽の信德一とせ、不二に添うて三月七日八日哉とたゞにいひ出せるは、富士見るたびにおもひ出でぬといふ事なし。

○予が扇子の端に「春雨に山田の曠を行く賤のみの吹きみだす暮ぞさびしき。との後鳥羽院の御製を書付侍るを嵐雪とりて見侍りて、尊しや花實かたじけなしや風雅とうなづき侍りける。有りがたき風雅ならずや、其角が「やりくれて又やさむしろ年の暮とせしは、とゞめず惜まずおのが氣象のまゝなる骨肉、句の上に顯はれたるなるべし。路通草庵を立出づるに「出づるときは氷も消えてはしる也。これまたおのがかたちに句も添へて出したり。洛陽の好春は去る御方にて「四人して御蚊帳釣るらん女房達。と情をうつしてよくいひ出でたり。心とすがたと、句とは一つなる物なれば、世に風雅ほど妙なるはなし。

○尾陽の荷兮を、此ごろ世に木枯の荷兮といへるは「木がらしに二日の月の吹きちるか、といへる句よりいふ事なるべし。二日の月のぬしになりたる故にや、歌連歌に物かはの藏人、日頃の正廣、あくたれの兼與などいへるたぐひなるべし。

雨吟

硯する傍にうつくし白かさね　嵐雪
ほとゝぎすまつ辨の化粧　兀峯
さし覆ふ手に憚りの嚏して　同
身を喰ふ鑢いたく謗られ　雪
芝の月起臥しすべる革蒲團　同
藥は掘らでくるひくらしつ　峯
沙彌が氣をえやはからせし秋の風　同
うしろは男中草履とり　雪
いひたつる名古屋歩きの八文字　峯
戀も初心に返歌幾度　雪
此花よ御狩は丁ど二十年　峯
桃ある家にあそぶ半狆　雪
不細工を笑はれけらし紙鳶　峯
都つとめの留守の古妻　雪
氣隨にはあらず晝寢は夢の種　峯
うしと見し世に鞭はゆるさじ　雪
船の火のちらり〳〵と須磨の月　峯
人をちからに鷗啼く秋　雪

同

夏の日に見る物からの瘠かな　兀峯
這入せばむる母が蚊遣火　嵐雪
行水の跡もこぼさず月すみて　同
露のそこらは皆黄菊也　峯
直垂のひたとつくろふ漸寒み　同
ほゝ所をもしらぬ舞の手　雪
何事をしろき扇子の拭ひ書　同
まゆみだれたる横貌の色　峯
忍び目にもしも座頭や覗く覽　雪
小便すればふるふ寒月　峯
盜人の諷うて歸る古手市　雪
打つかまねくか饂飩屋の幣　峯
吉原はわざともほどく茶洗髪　雪
いひ習うたる戀のあて言　峯
糸組のいと恥かしき白地　雪
鉢をも乞はで首座歸る也　峯
葭ぬきに來る子もやさし垣の花　雪
茶具取置きて爐をふさぐ頃　峯
水鳥よ汝は誰れを恐るゝぞ　兀峯
白頭更に蘆しづか也　翁
中汲の醉も仄かに棒提げて　洒堂
月の徑に沓拾ふらし　峯
鳩吹ば榎の實こぼるゝさら〳〵と　翁
板の埃に圓座かさぬる　堂

籠戸に袖口赤き日の移り　里東
君はみな〳〵撫子の時　翁
泣出して土器ふるふ身のよわり　峯
御念頃にて鎌倉をたつ　東
門々に明日の餅をくばり置き　堂
莚踏むなとうつす鹽鯨　峯
山陰をまれに出でたる牛の尿　翁
梨地露けき兒のさげ鞘　堂
名月に雲井の橋の一またげ　東
今としの米を背負ふ嬉しさ　翁
花に來て我名は佛德右衞門　堂
春はかはらぬ三輪の人宿　東
陽炎の庭に機へる株打ちて　峯
たゝむ衣に菖蒲折りおく　堂
きんといふ娘は後のものおもひ　翁
戀のあはれを見よや鳩胸　峯
城代の國はしまらず田は餒て　堂

美濃は伊吹で寒き秋風　翁
夕月に荷鞍をおろす鈴の音　峯
聟なじまする質の出入れ　堂
麥飯に交らぬ食を取りわけて　翁
德利引摺る川ぶねの舳　峯
帷子に風も涼しき中小姓　堂
明日御返事を黃昏の文　其角
美しき聲の匂ひを似せて見る　峯
人めにたつとひきなぐる數珠　堂
一息に地主權現の花ざかり　角
膳に日のさす春ぞきらめく　峯
鶯は此頃の間にいとひ啼き　堂
歳旦帳を鼻紙の間　角

備の前州の勇士兀峯子は、風雅を抱へ滑稽を荷ひて、花月にあそぶ事年あり。去年の暮春より、東武に勤めて仕官の身のいとまなきひま〳〵、此書を集めて予に見せ給ひぬ。我目を悅す而已にては無下なる事におもひ、梓に鏤むるもの也。

元祿六辛酉歳五月

水口　芥舟書

初便

俳諧は三尺の童子にさせよと、芭蕉老人の申されしといふは、世の人の私知を用ふる事をにくめるならし。只此間に公道ならばいとはざらましを、先師示されしとて、學業修得を放下するは、識者の人を教ふる一時の楯をしらざればなり。輪人の手にしめて緩急の心にひゞける妙所は、其子にすらつたへがたしといへり。是芭蕉翁といへども、門人につたへらるゝ事あたはざる地なり。宗鑑、貞徳は此道の祖なれども、いまの世に用ひがたきは、流行の異なればなり、來者の芭蕉翁を見ん事もまたしかり。誰れかしる往年の是は今年の非となり、今年の非は來年の是とならんことを、春は秋にあらずきのふはけふのむかしなり。

元祿十二龍集己卯春正月

散る花を追ひかけて行くあらし哉　定家卿

○法眼季吟、黄門の句なりと、ある人のいへるとて山の井にいだされたり。

散る花をなむあみだぶとゆふべ哉　守武

○晋其角曰く。荷兮、集に辭世と書きたれど、神職の正統として此境はにらまれまじ、嗚呼と一時の歎ならんと、さこそあらんかし。

是は是はとばかり花のよし野山　貞室

花見せむいざやあみだのひかり堂　貞徳

花の香をぬすみてはしる嵐かな　宗鑑

つくしにて

世の中の宇佐八幡にはなの時　宗因

花の雲　鐘は上野か淺くさか　芭蕉

○詞以レ奪可レ用、情以レ新爲レ先と、定家卿は示したまひ、山谷は換骨奪胎の法を立てたるに、誰れかつたへし、俳諧は平話のあたらしみを本意にして、あながち古人のことばを用ひずと、ばせを翁の示されしとて、窮巷僻地には、傾治の艶言、舞妓の荒唐、俚語俗詞ならねば俳諧ならずと、此筋の魔におちいるもの多し。もとより此の道を俗によつて眞趣をたのしぶ事なれば、いづれをか是としいづれをか非とせむ。しかもひたぶるこゝにのみかゝはらば、詞はあたらしくとも、情致はふるびぬべし。

○句を見る事字眼を要すべし。

あつみ山や吹浦かけてゆふ涼み

といふは、吹の字にあたりて、ゆふ涼みとはせられたりとみえたるを、世に福の字を書きなどして發句と思へる口惜と或人のいへり。さあるべし。陶淵明が詩の、神にして千古の名あるは、秋菊有レ佳色。といふ佳の字也ときゝし、撰集のぬしになる事かたし。ある人集をするとて、余に句を乞へる折から、芭蕉翁の義仲寺にましゝとき

明月や海にむかへば七小町

としたまふを、いかにきゝ給へるやと問ひしに、小町は湖邊のたゞちにして、別に意義なしとこたへられき、此句は欲下杷二西湖一比中西子上。淡濃也相宜と東坡が作例によられたるべきを、草々に看過せむは本意なし。此器にて撰者といはれむこと覺束なし。されど、あか佛尊くばいかゞせん。我れを罪するものは春秋とは聖者の歎なるをや。

○名人の古事をとりたるは、古人の力をからずして句中無盡のひゞきあり。此の境中人分上のにらみたらば、くはしく先人の唾餘にして、剋レ鵠類レ鶩といへるにもあらざるべし。

三井寺の門たゝかばやけふの月　ばせを
ほとゝぎす鳴くや五尺のあやめ草
卯の花やくらき柳の及びごし
ほとゝぎす聲よこたふや水のうへ
初しぐれ猿も小蓑をほしげなり

是皆古詩、古歌本、說、物語をとりたる句なり。あやまるときは沈詮期が辟におちいり、しすますときは家隆卿の名譽を得べし。水にしられぬ氷なりけりととりたるは、絹を盜んで小袖にしたるとぞ、俳諧の作者はおもふべし。

○名所の句をする事安からず、石曼卿が意中流水送、愁外舊山青と籌筆驛にて作りたるを、しらざるものは稱揚すれども、山水の地ならばいづれの所にも相應して、籌筆驛のせんたゝずと、先輩のそしりたるは、句中に動きあればなり。

秋風や藪もはたけも不破の關　ばせを
せめよせて雪の積るや小野の炭　去來
うら枯や馬も餅くふ宇津の山　其角

此類鳥獲がちからにも動かざらまし。

菊に出てならと難波は宵月夜　ばせを

といふ句を、影略互見の法なりと世につたふるはあやまれり。錯綜轉倒の法なるべし。

紅稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝といへる句法にも似たり。

梅が香にのつと日の出る山路哉

此句餘寒の題なるよし、句中寒の字はなけれど、長夏にも寒かるべし。これらをや影略の法とはいふべき、杜甫秉蔑の題にて、暫時雪載花、幾處葉沈波。林和靖が梅の詩に、橫斜疎影水淺深、暗香浮動月黃昏、秉蔑といはず梅といはず、されど吟勢それとたしかなり。是影略の法なり。

○發句に詩歌なるあり、俳諧なるあり、味なきを味として俳諧なるをあらまほし。

蚤虱馬の尿こくまくらもと　芭蕉
年頭はかはのとぢめのうつは物　洒堂
松茸や人にとらるゝ鼻の先　去來
足あぶる亭主に聞けば新酒哉　其角
筍や道のふさがる客湯どの　浪化
庭へ出て馬の米喰ふ夜寒哉　筑前露川
草あつし蚓のおよぐ馬の尿　水驅
兼平も切籠ひとつの身と成りぬ　探志
親仁さへ起きざるさきに三十三才　乙州
蚊遣火や女の斧に石をわる　風國
家船のじつとして居る月見哉　嵐雪
血を分けし身とは思はず蚊の憎さ　丈草
猿引は猿の小袖をきぬたかな　芭蕉
出替や照る日に下駄をはいて行く　知足
誰れが來て遊ぶや雛のたばこぼん　車來
初雪や幸ひ庵にまかりある　芭蕉
井の底に蛙をもどす釣瓶かな　爲有
朝夕を見合す旅の袷かな　風睡
夕顏に次郎の這入る小家かな　筑前直方丹山
佛たち衣更にもおどろかず　木一
蕗の葉に髮包みたる田植かな　可喰
芋種や花のさかりを賣りありく　芭蕉
我が願ひ花四五反の中に家　朱拙
あさがほのうねりぬけたり笹の上　萬乎
芋の葉の軒につられて秋の風　豐後日田紫道

仰向にこけてもがくや虻の足　土芳
朝鷹の提灯で出る田畝哉　筑前黒崎 帆柱
稲妻やいたり來たりに夜を明す　ブンゴ日田 りん

深川の八貧

米買うて雪の袋や投頭巾
（米買ひに雪、として聞ゆ。校訂者誌す）
ほろ酔の是やまことの雪見哉
草庵とおもへど年の炭大根
ながるれどせかずに游ぐ蛙かな

○感情にわたる句は、本情多くして俳諧少なし。思慮にわたらざるは俳諧多くして本情少し。案ずるに本情は難きに似て易く、俳かいはやすきに似てかたし。今の世眼前をいひて、按排を經ざるをこのむもさる事ながら、周詩は多く感情より興れる、取捨は其の人にあらむ。

深川閉關の頃

葬や是も亦我が友ならず　芭蕉

しら菊に咲かれて我れはもとの顔　朱拙
ばせを葉の何になれとや秋の風　路通
（ばせを葉は、として聞ゆ。校訂者誌す）
蓑虫の我れは綿にてふゆ籠　風麥

崎陽に旅寢の頃

故さとも今はかり寢や渡り鳥　去來
松風も聞けば浮世ののぼりかな　尼支考
月日をもうくる斗りに枯野哉　大阪智月
皆我れにつかはるゝなりとしの暮　讃竹
山やおもふ馬屋も猿も松かざり　ブンゴ日田 若芝
おとろひや齒に喰當てし海苦の砂　ばせを

深川舊庵に入りて

爰らにはまだ〳〵梅の殘れども　惟然

○平句は氣先にのつてつくろはず、かろ〳〵と付くるを第一とすといひ、又氣のなき發句にして、句の上の新古をかへり見よといふあり。いにしへより、師家の人を敎ふるは、其の氣象に從がひ、

句は風聲なりといへば、生質の重く出るには輕くせよとをしへ、卒爾なるには季のなき發句ともしめさるべし。しかるをおのが氣象の偏をしらずして、先師のかく示されしなどいうて、萬人にあてがふは、人を敎ふる法にはあるまじ。氣先々々とのみ敎へたらば、中古の宗因門人の意氣に落つる事多かるべし。秦少游ははやけれどもつたなく、陳無巳は遲けれども、古人の趣きを得たりとはききし。

○或人宗長に付句はいかゞし侍るがよしやと問ひたるに、上手の連歌は他人の中よき如く、表向は遠けれど下心よく付きておのづからの匂ひあり。下手のは親類の中わろきに似たり。表向は親しけれども、下心よからずと申されしときゝし、めでたき敎へなれ、芭蕉翁の付けられしは、他人の中よしといはん。

○中古の俳諧はしたれども、今の風俗はせずといふは、其のしたりといふ中古の體未熟なるを、己が量のつたなきをしらで、したりとおもふは口惜しと、其角が雜談しけるとぞ、いとをかし。其中古といへる宗因が句に

遙かなる唐茶も秋の寢覺哉
蕎麥切の先づ一口やとしわすれ
杜宇鳴くやら淀のみづ車

是らの句は、當世にしたりとも誰れかかゝらんといはん。宗因をして當世に生したらば、流行の押しうつるまじや、兎にも角にも風雅は根柢のあらまほし。

○李白が法外の風流を得て、道にちかしと宋儒の評せられしは、天機を動かさゞればなり。惟然が諸州に跨りて句をわるくせよ〳〵、もとめてよきはよからず、内すゞしくば外もあつからじといふは、生得の無爲をたのしびて、この爲めに塵埃をひかじとならん。